女鑑

明治三十四年十月五日發兌



女鑑第貳百參拾八號

目録

定價

一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貮圓拾錢
全國無遞送料

明治三十四年十月四日印刷
明治三十四年十月五日發行

編輯兼發行人 川崎直衛
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
印刷人 並木眞雄

發行所 國光社
東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地

發賣元 靜思館
（電話本局一千三百七番）

社告

従來各所より御寄贈にかゝる新刊新聞雜誌及圖書等單に國光社とのみ御認めの分は往々當部へ着せず為に折角の厚意も遂に無にするに至り遺憾少からず候就ては甚だ御手數ながら以後必ず國光社女鑑編輯部へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

東京京橋區築地貳丁目廿一番地國光社內
女鑑編輯部

稟告

本誌(女鑑)編輯に關する即ち原稿投書等の事件は必らず女鑑編輯部へ御送被下度候又發賣に關する總ての事件は必らず靜思館へ宛御發信被下度願上候也

東京京橋區築地二ノ廿一、國光社內
女鑑編輯部
(電話新橋八十八番)

東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館
(電話本局千三百七番)

本誌定價改正

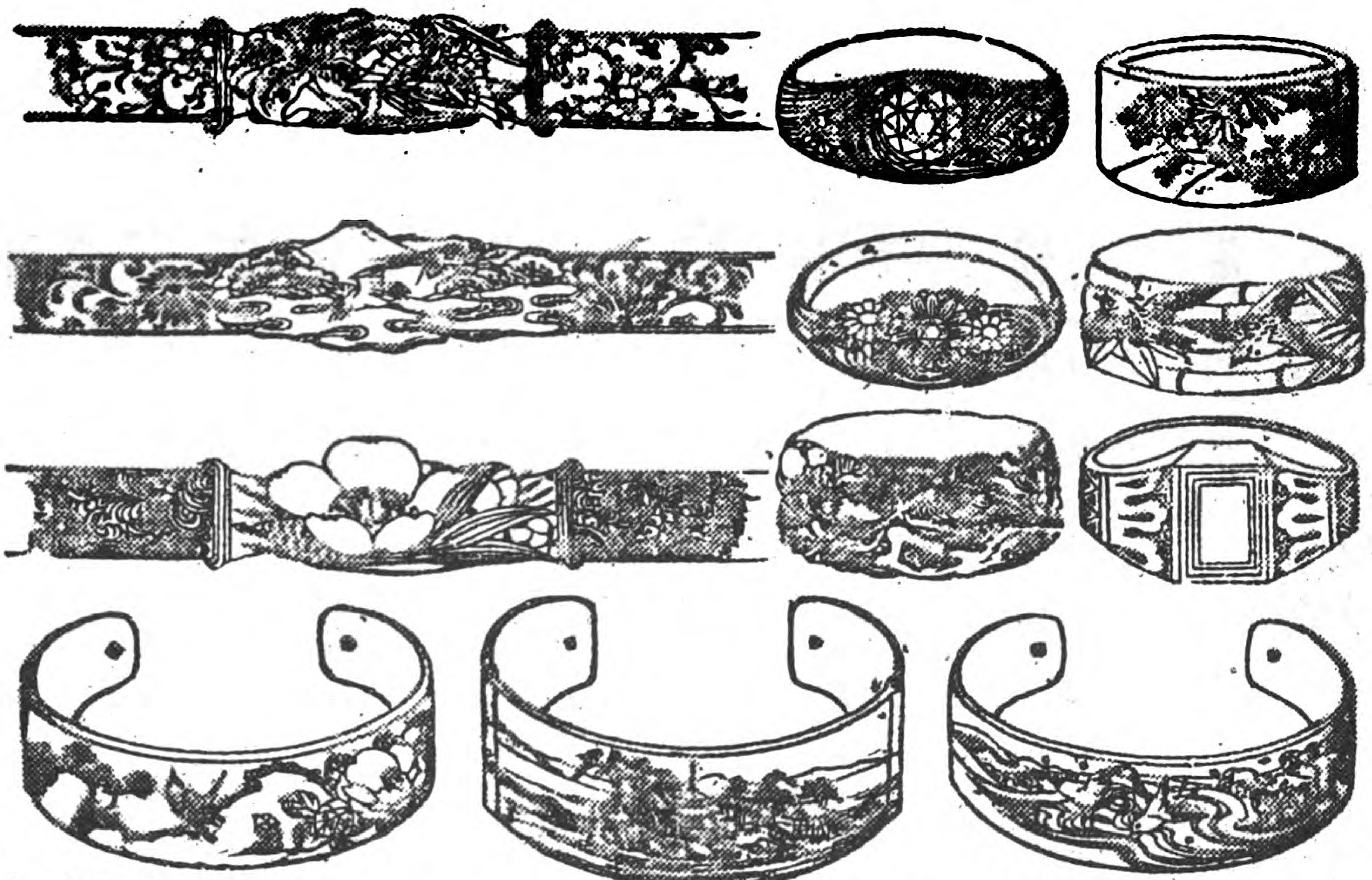
壹冊代金拾錢
六冊代前金(三ヶ月分)五拾七錢
拾貳冊代前金(半ヶ年分)壹圓拾錢
廿四冊代前金(一ヶ年分)貳圓拾錢
全國無遞送料

本月より右の通相改め申候尤是迄前金御拂込濟の分は從來の定價に據り候也

明治卅四年九月

女鑑發賣元
靜思館

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫付
甲價　十六圓
乙價　十四圓

●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價　廿二圓
乙價　十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價　廿六圓
乙價　廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價　卅四圓
乙價　廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價　卅六圓
乙價　卅一圓

●廿二金三匁五分厚肉象嵌彫刻
甲價　卅八圓
乙價　卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價　二百五十圓
乙價　百八十圓
丙價　百三十圓
丁價　九十圓
戊價　六十五圓
巳價　五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
廿二圓四十錢

●純金五匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢

外ニ段付模樣付形状ノ異ナルニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫蒔絵彫刻付
甲價　卅五圓
乙價　三十一圓
丙價　廿七圓
丁價　廿三圓
戊價　十九圓
巳價　十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價　十一圓
乙價　九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價　十四圓五十錢
乙價　十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價　十九圓
乙價　十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價　廿圓
乙價　十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片切彫刻付
甲價　廿三圓
乙價　廿圓

◎印材製作篆刻　應貴需

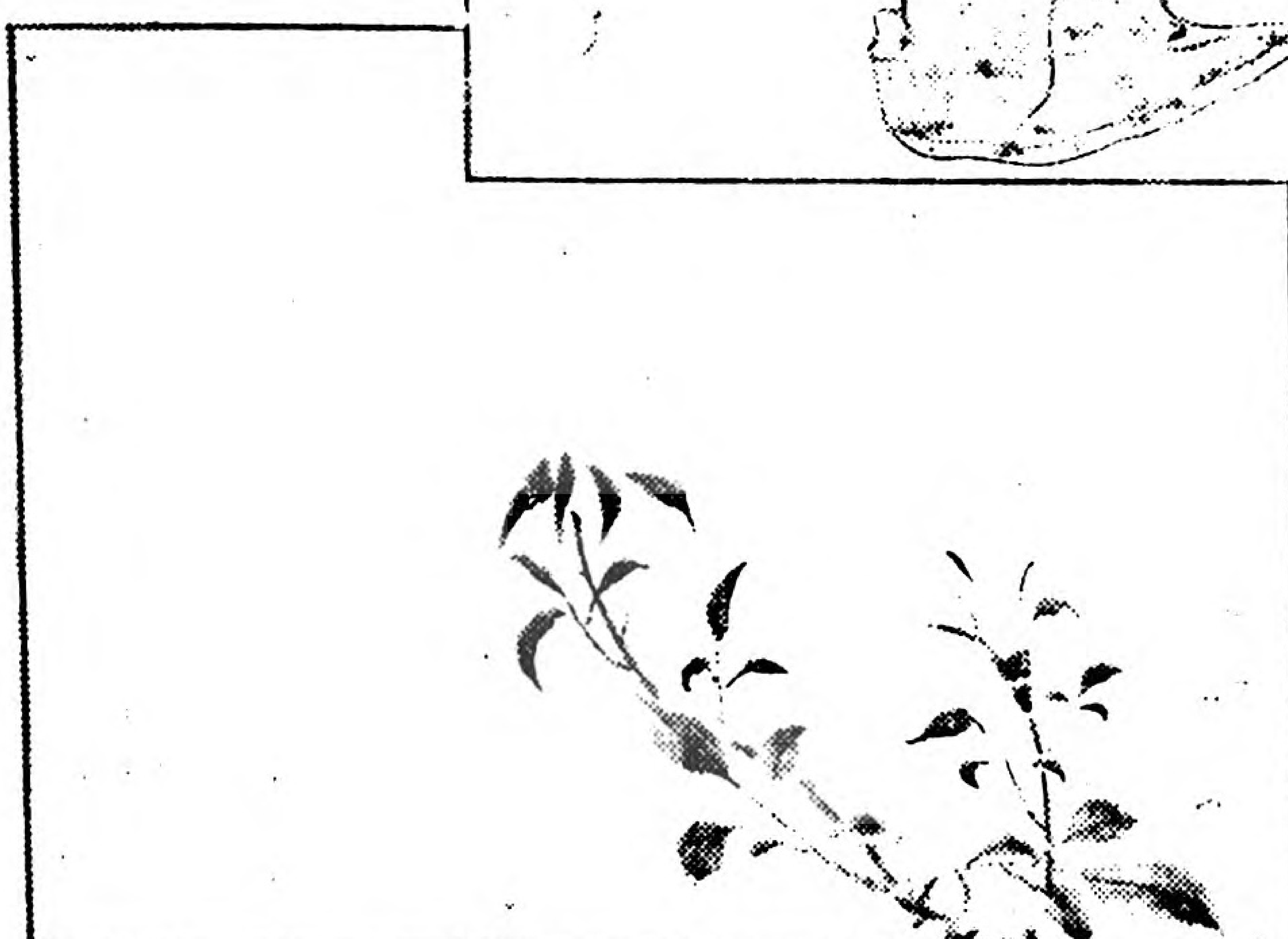
右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品種々あり

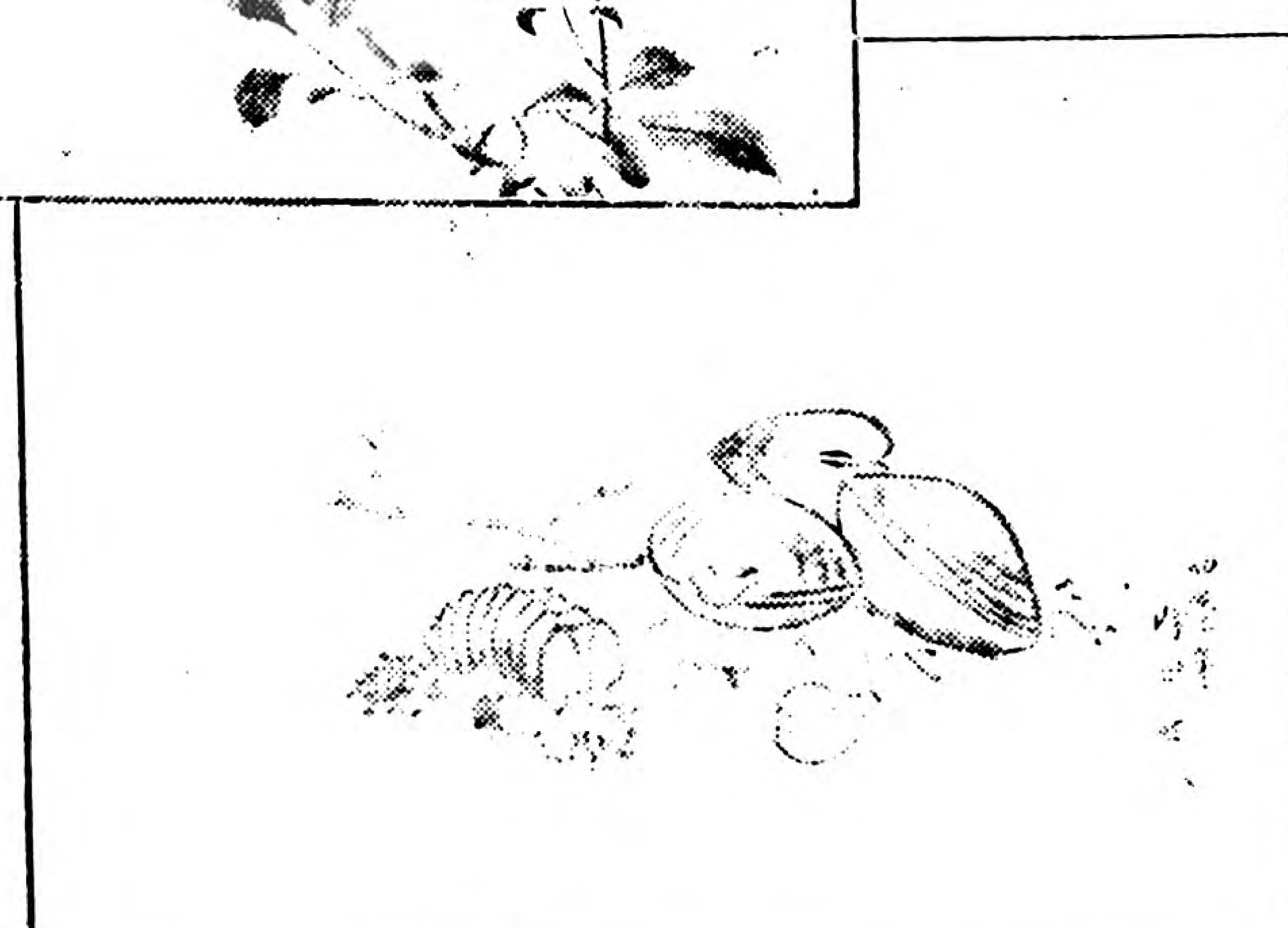
時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目
吉沼又右衛門
電話本局三十三番
長距離電話接續

群芳

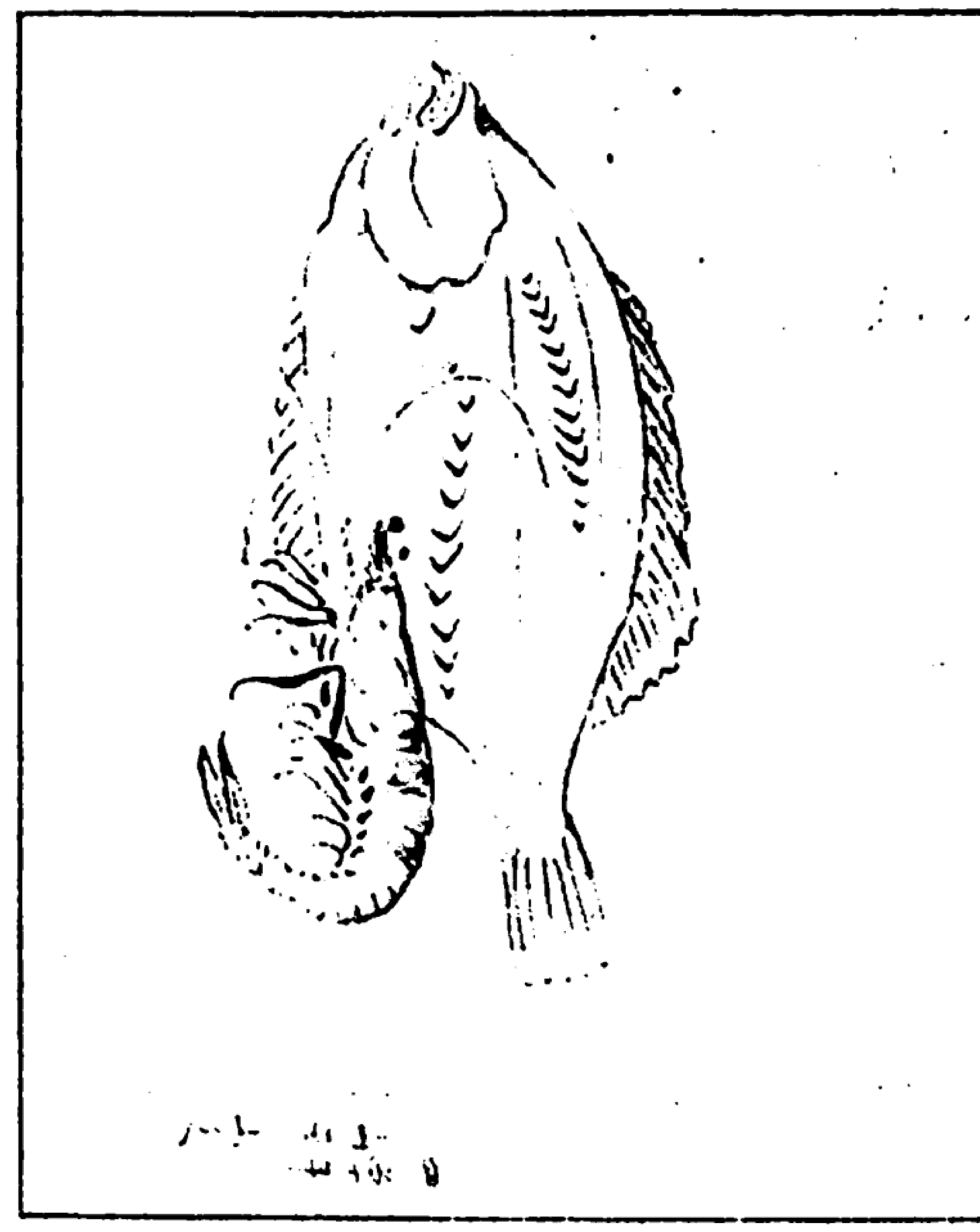


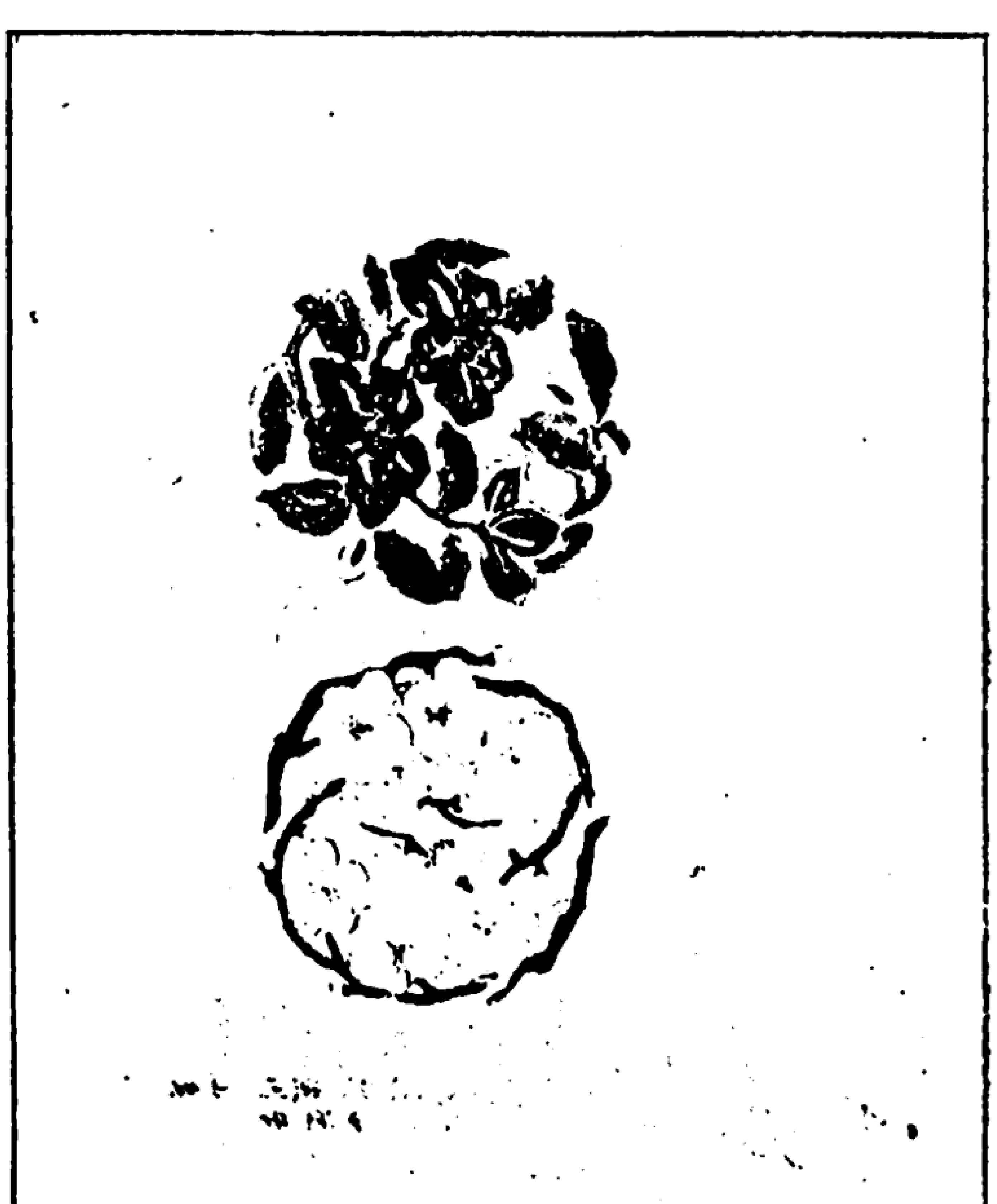




群芳









楠判官軍六

法令
凡天下國家ヲ治ルニ九経
アリトイフハ古ノ教也先上下
不論民ノ欲ヲ知リ奉行
職ヲ撰テ其器ニ当ルヲ
其職ニ定メ若其職ガモ
非儀アラハ大キニ可罰之
其本乱ハ末必不治之
上ニ有人ノ可慎ハ無礼也
志アル侍ハ縦ヒ分ノ禄ヲ無モ
礼儀無ハ不可召仕之無礼
ナレハ一日ノ用君命ニ背也
為臣國ヲ領ルモノハ心得ハ
先己ガ分國ノ諸人豊饒
ナラシメントヲ可為徒ニ國ノ土
地ヲ費テ報國ノ無忠モノハ
不知人倫也余可准之
郎等ヲ召仕フニ忠アレトモ
不賞常ニ勿労ヲ使事忠
勝レテ可賞之
又功ニホコルコトヲ分ナレハ
妄而主ヲ覆ス古今多シ
可考平清盛源頼朝ハ
足利尊氏等也貪ニシテ
不論ハアリ富テモ不修之
君直成トイヘトモ邪曲ノ
臣権柄ヲ執時ハ明月ニ
如蔽雲之
又月ノ夜雲ノ朝酒ハ無量
不及乱如有威儀人モ危
赤眼イカリ狂乱ノ寛事
ヲモイヒモラス之
旋女ヲ不可好口論ノ媒ナリ

呉國本朝傾城傾國ノ基
数多之
不可好賭ハ貪ヲ招ノ根本
口論ノ源之
邪賞邪敗トテ忠有ヲ不賞
邪有ヲ不罰大罪ヲ閣小罪
ヲ罰スル事人ノ忠ヲ謀テ勝
者ヲ立戒ハ一人ニ賞シ一人ヲ
不賞乱ノ根之如是ノ闇主
盲将上代ニ希之末代是多
予領地摂河両國ヲハ九
分ノ八分ニソヒリナハ究資ニ
請スヤウニ治事之自今以後
理非決断ハ上宮太子ノ鏡
ノ鈔ノ心理ヲ深ク可知ナリ
天平ノ貞録ニ心善ノ式目武家ノ
東鑑ニハ非ノ成敗多シ太皇
九國ノ日記貞永ノ式目等
貞観政要ヲ可考之
前ニ所焉ノ勝軍收世記并
異論祈ノ巻摂河泉碑書
千葉鹿捉書相伝ノ巻等
無油断可相密行重テ所
覃心常ニ写書之常ニ額
國成敗可勿解怠者也

建武三年
五月八日　正成（花押）
勝五郎正行
楠帯刀正氏
和田五郎正季
各日

舊弊と新弊

吾人は、あながちに新を嫌ふにあらず。たゞ、その新と稱するものゝ多くは、不健全にして、而かも、世を毒するを忌む。健全に進歩したる新事物ならば、勿論、賞揚おかざるべきなり。もし猶、これをしも、頑固と罵らば、しばらく、その言に任せおかむのみ。

近來、家庭に對する注意の加はりしに乘じ、新意見と稱して不健全なる説をなし、舊來の平和穩健なる家庭を紊さむとするものあり。其の説一にして足らずといへども、要するに、父子親愛の情より迸出したる、仁義によつて一家を平和にせむことは結婚の目的に對して妥當ならずといふにあり。これ崇外者流の囈語のみ。

そも〳〵、わが國は、純然たる一大家族より成立し、君と臣と、同じく、天神の血統を受け、國民、すべて、皆、其の祖先を同じうせり。而して、皇室は、天祖の御嫡流におはしまして、天壤と窮まることなく、この國家を統治せさせ給ひ、

國民は、天祖の支流、皇室の分胤にして、開闢の初より、永く、皇室に臣事せり。故に、皇室と臣民とは、宗家と支家との如く、また、親と子との如きなり。是を以つて、上は、常に、仁慈を以つて、下民を子愛し給ひ、下は、また、常に、忠誠を以つて、其の君上に親事す。而して、臣民の、君に忠なるは、即ち、其の父母に孝なる所以、父母に孝なるは、即ち、君に忠なる所以にして、忠孝全く一途なり。これ、即ち、わが國の粹美なる道義にして、世界萬邦に、其の比を見ざる所なり。斯くの如きの國體の下に生長發達せし、わが國の家庭は、父子夫婦兄弟の道、つぶさに相備はり、また、他に見る能はざる良風特質を存す。これを如何ぞ、彼の、自己の國を失ひて、各國に寄生し、輕侮凌辱せられて耻づる能はざるもの丶祖先によつて唱へられたる道義にならふを要せむや。あはれ、舊弊はすみやかに洗滌し去るべしといへども、而かも、亦、新弊に汚されざらむことを警告しおかざるべからざるなり。



德育と體育との關係

細川潤次郎

近日、教育家の套語として、智育、德育、體育と、曰へる三大綱を設けたり。此の三者は、互に、相關連して、分つべからざる、恰も鼎の三足の如し、其の一を缺くときは、必用をなさゞるべし。然るに、學校教育に於ては、動もすれば智育に偏する傾向ありて、修身の課はあれども、德育の効果顯はれ難く、智德の關係につきては、世の識者の論述する所少からず、而して、德育と體育の關係に至りては、未だ、多く、人の論述せるを聞かず、之を以て、余は、茲に、德育、體育、兩者の關係、甚だ密にして、分離すべからざる所以を論せんとす。

人の初めて生るゝや、徒に、運動することゝ、啼き、笑ふことありて、言語を發すること能はず、此の如き時期に當りては、父母たる者は、其の子の身體の、完全に發達することを、望む外あるべからず、從ふて、智育德育の施すべき樣もなければ、只、體育の一點あるのみ、嬰兒、稍成長して、分別ある時に至りては、智育德育の施すべき初期なれども、仍、體育を重しとす、其の愈成長して、自由の行爲をなすべき時期に至りては、體育は、最早、獨立すべからず、德育と相須て、其の用をなす者あるべし。今日、學校に於ては、體育の方法として、各種の遊戲、各種の體操、及、各種の運動等を採用せり。此等の事に由つて、筋肉を發

達せしめ、手足を敏捷ならしめ、消化機をして旺盛ならしめ、精神をして爽快ならしむることを得ることは、固より疑なかるべしと雖も、此の如き健康の身體にして、一心の統御、其の宜を失ふときは、或は、腕力に任せて、他人と鬪爭し、或は、飲食男女の慾を始として、肉體の快樂に耽り、謹愼して、節制を加ふること能はずして、遂には、德育と背馳するのみならず、併せて、體育の目的を達すること能はず、身體の強壯は、適々、其の身を害する程度を高め、或は、性命を亡ひ、品性を壞り、或は、健康を損じ、病弱に陷ること、其の例甚だ夥し、恐れざるべけんや。

勤儉と曰へることあり、此の二字は、德育上に於て、人の貴重する所なり。茲に、此の勤儉を實行して、怠らざる人あらん、其の人、果して勤あらば、早く起きて、晏く眠り、晝間は、其の熟る所の業に從事して、或は、坐して書を讀み、人に接し、帳簿を繙し、計算をなすが如きこともあるべけれども、凡百の人事に、拮据鞅掌し、農家は、農事に從事し、工人は、工事に從事し、官人は、公務に從事し、社員は、社務に從事して、其の勞働は十分なるべし。勞働、果して十分なるときは、遊戯、體操、運動等の事をなさずとも、此れと、同一の効果を收むることを得べし。而して、其の人、果して儉ならば、其の人の生活、自然に規則正く、飲食を節し、肉體の快樂に耽ることなくして、養生の道に合し、即ち、體育の目的を達することを得て、大抵は、無病長壽たることを得べく、知るべし、德育十分なれば、體育を講せずとも、自ら、體育の目的を達すべきことを。

近日、醫士某の、養生法を論せる書を一見せしに、其の中に言へることあり、曰く、精神と肉體とは、

必ず、親密の關係あるものにして、强度の喜怒哀樂は、血行、作用する如く、恐くは、第一に精神侵され、次に、腦の血行に變じて、種々の病狀を呈するに至るべし。即ち、快樂は、血行を旺にして、早老を防ぎ、沈鬱は、之に反して、憂世の勞に、堪へざらしむるに至るものあり。又、曰く大なる悲哀失望は、人をして、殆ど、其の業を執るに、堪へざるに至らしむるものあり、强大の不幸は、精神衝激の作用をなし、心臟の機能は、微弱、且、不整となるのみならず、心臟、漸次、擴張して、遂に、瓣膜の雜音を聽くに至り、胃、及、腸の機能は、殆ど、全く休止し、四肢、及、其の他に、水腫を呈するを見ん、是れ、精神の沈鬱は、腦の血行を防ぐるものにして、其の結果は、遂に、右の如き、不幸を呈するに至るものと知るべし。此等の言に付きても、精神と身體とは、關係の親密なることを徵するに足れり、精神と身體との關係、親密なる上は、德育と體育とも、亦、別物に非ざることを知るべし。

之れを要するに、養生長壽の道は、平生、諸々の善事をなして、諸々の惡事をなさず、因て、以て、精神の快樂を覺え、沈鬱憂苦の境遇に、陥らざるに在り、果して然りとするときは、德育を講せずして、徒に、體育の効果を收めんと欲すとも得べからず。但し、幼稚の時に在りては、勢、體育に重きを置かざることを得ざること、前に言ふ所の如くあるべし。

女子の學問

岸田松二郎

國語科　上

國語科といへる名稱には、近來、二樣の解釋を用ゐることゝなれり。即ち、中等以上の程度なる學校に於ては、和漢文を併せて、國語科と稱し、小學程度の學校においては、讀書作文習字の三者を包含せる學科の名を呼べり。予輩は、此等、名稱の適否如何を詮するものにあらずして、便宜のため、小學程度の學校に於いて用ゐる稱呼に隨ひ、讀書作文習字の三科に就きて、國語科なる題目の下に、卑見を陳ぶることゝなせり、看者、之を諒せよ。

言文一致を唱導せらるゝ今日に於て、讀書の事を談ずるは、將來を慮りて、社會の趨勢を知悉するの明を有する人士の眼には、如何あらんと思惟せざるにあらずと雖ども、予輩は、將に、來らんとするの機運を知りて、談論するは、自から、其の時あることを信ずるが故に、別に、之を他の題目の下に論ずることゝし、現下の時文を基礎として、之を論述せんとす。

蓋聞く、文字は、無聲の言にして、文章は、即ち、有形の思想なりと、されば、文字の智識、豐富となるに隨ひ、自己の言語を精密に發表することを得、又、他人の言語を仔細に了得するを得べし、文章を作るの技能、習熟するに隨ひ、自己の思想を明確に表出することを得べく、文章を解釋するの能力の發達するに隨て、他人の思想を明瞭に悟了するを得べし、古今の成敗を眼前に描出して、鑑戒となし、峩々たる山嶽、蜿蜒たる秀水、渺茫たる大洋を描きて、其の、壯大を思ひ、其の

秀麗を賞するものは、文章の力あり、千古の偉人を泉下に起し、東西の豪傑を一室に集めて、親しく、其の謦咳に接し、其の言論を上下するが如くするを得るものは文章あり、凡そ、古今東西の事物を知り、又、其の人を知悉するも、將又、風物の美、人情の常とを、識別するも、皆是、文字文章の力ならざるはあし、されば、此の智識と技能との修養は、他日に、其果を期待して、終生、智識の鍵鑰とあさゞるべからず。

學窓にある孃等が、螢雪を積める、狀況を觀るに、孜々として、維、月も足らずとあし、小學の課程未だ卒らざるに、既に、高等教育を受けんとするの準備に忙殺せられ、春花に背き、秋月を外にして、只管、受驗學科に眼を晒し、既に、高等教育の門に入るを得るや、寤寐を忘れ、眠食を廢して、自家の修學に熱血を濺ぎ、甲を凌ぎ、乙に勝らんことを務めて、歲華の飛ぶを顧みるの暇なく、葛裘數次を重ぬるの後、課業全く終りを告ぐるや、茲に、滿身の榮譽を荷ふと同時に、年來の負荷を脫卸し得て、双肩茲に輕きを覺え、算術問題に腦漿を搾るの苦なく、諳記諳誦に頭腦を病ましむるの憂を免かれ、自由自在の我が身とあるの心地して、之より、更に、自から進まんとするの勇氣なく、書籍は、之を高閣に束ね、手習れたる筆記帳簿を筺底に埋藏して、日光を見せしめず、如斯にして、三五年の星霜を經るや、良緣を求めて、婚嫁を整へ、一家の令夫人と化したる後は、更になすべきの事なき時も、猶且、舊書を繙きて、之を温むるもの、蓋、晨星の如しと聞けり、故に、歲月の久しきを積みて、年來、苦辛慘憺に餘に積み得たりし智識を消散し、理解力を鈍あらしめ、果ては、日常須要の文字を、瞑目數分あらざれば、以て、

之を再現する能はざるに至る、既に、子女を設け、前襟後擁の身となるに於いてをや、然らば、則ち、母となりては、子女鞠育の責あり、嫁となりては、舅姑良夫に事ふるの務あり、家計の細務に膺りて、晝夜、其の心身を勞するの身となるもの、焉ぞ悠悠として讀書に耽り、淡々として文墨を友とするの餘地あらんや、然るを、余輩が、之を肯定せざる所以のもの、亦、其故なくばあらず。

男兒、一たび文墨を投じて、牙籌の人となるや、寤寐共に銖錙を爭ひ、又、文筆を顧みるの暇なく、隨て、既得の智識を消散し、既修の技能を銷磨して、一夕の夢と化し去るに過ぎず、男兒、既に然り、況んや、女子の日常欠くべからざる細務に服するの時に於てをや、然れども、一たび眼を他方に轉じ、女子の唯一なる天職の重きを思視せよ、古は、女子の天職を解すること、極めて、漠然なるが如くにして、其の所説の至なるものを擧ぐれば、食膳衣服鞠養の三者と、舅姑良夫に事ふるの類に過ぎず、近世と雖ども、敢て、其の種類を増加し、其の範圍を無限に擴充したるに非ずして、其の責務の分類を明にし、其の、系統を瞭かにして、而も、之を細説したるに過ぎず、食膳の事には、調理の法あり、衣服の事には、經濟の法あり、鞠育の事には、教育の理法存するあり、家内の衛生、一家の經濟、家從の使用、自から、其の方法なくんばあらず、之を學び、之を究むるは、寧ろ學校にあらずして、家政施行上の經驗にありとす、女子の所謂天職なるもの、多々之ありと雖ども、要は、一家の内にありて、適當に家政を執るを以て、第一の務となさゞるべからず、然るに、此の、家政執行の上に於ける女子の行動は、直に、一家の盛衰に關すること甚だ大なるものに

して、能く、之を行はんとするには、單に、故老の經驗にのみ倚るべからざるものあり、例へば、調理の事に臨みて、衞生の法に背き、經濟の理に戻り、教育の事に當りて、子女身心の發育を顧みず、衣服を整ふるに、美感を缺き、經濟を顧みざる時は、爭でか、之を完全なる天職を全ふすと云ふべけんや、而して、衞生の理論、教育の理法の如き、年と共に改進し、萬事萬般の事、一として進化せざるものなし、進化は、宇宙の大原則にして、時々刻々休止することあらず、此の、急劇なる進化の世態に處して、頑然、舊株を墨守して動かざる時は、即ち、世運に背馳して、孤獨を守るの愚に陷るを免れず、苟くも、世の進運に伴隨して、灼々餘裕あらしめんには、勢、文字文章を資りて、活動世態の趨勢を知了し、之を以て、一家の安寧幸福を增進することを務めざるべからず。女子の天職を知り、進化を吸收し、之を實地に應用して、眞正の道途を實踐するの計を立てざるべからず、思ふて茲に至らば、焉ぞ、文章を讀むの暇なきを嘆じて止むべけんや、惟ふに、時は得難きにあらず、四六時中、決して、時なきにあらず、雜談に時を移すを吝まずして、讀書の時を愛むを知らざるものは共に語るに足らず、能く、無用の時を節して、之を有用急須の讀書に用ゐんこと、予輩の切望して止まざる所なり。





日本女訓（未定草）

川崎重陽

十八、日常、定まりたるところに往復し、又は、父母長上の使などする外、許なくては、みだりに、一人にて出づべからず、多くは、禍のもととなる。又、姉妹、親族などの、よきつれなくて、多人数集合する場所に出づるもよろしからず。

十九、女子は、成長して、他人に嫁ぐべきものにて、我が父母のもとにありて、つかふる間、おのづから、ながゝらざるものなれば、ことに、厚く、孝養を盡すべきなり。又、祖父母をば、深く敬ひて、つねに、その心を慰め、朝夕、なでさすりまゐらせなどして、まめまめしくかしづくべし。又、兄姉を敬ひて、むつましくし、弟妹の世話介抱をも怠るべからず。

二十、姒をば、實の姉と差別なく、敬ひ親みて素直にかしづき、姒の身のうへ、何事も、兩親の意にかなふやうにとりなすべし。

二十一、上に述べたる條々は、概、皆、太古よりの自然の風習にて、我が國固有の女風なり。およそ、世界の國々、その風俗の、たがひに、相同じからざるは、なほ、草木の花の、色彩形狀、おの〳〵、異なるが如し、我が國の女子は、我が國の歴史の上に咲きにほへる、固有の花のすがたにならひて、いよ〳〵、その美を濟さんことをつとむべきなり。（上編をはり）

孝女ちよ

丸橋吾水

ちよ女は、肥後國蘆北郡津余木の郷、野中村の百姓、藤十郎の孫なり。藤十郎は、わが娘に次郎右衛門といふ婿をとりしが、ちよ女は、その間に生れたる一人娘なりき、さて、ちよ女が、六七歳の頃より、父、次郎右衛門、病にかゝりて、農事のつとめもなりがたく、もとの里にかへりて、二年あまり經にけるうち、母は、常にこれを憂ひて、はかなく床につきけるが、ちよ女のあつき看護も、そのしるしなく、遂に空しく失せられぬ。いかに、定れる人の命數とはいへ、かさね〳〵の、不幸のみ續きしかば、ちよ女の歎きたとへん方なく、目を泣きはらし、寢食も忘るゝ程なりしに、親類の人々は、これをあはれに思ひ、種々に慰め諭して

けり。その時、祖父の藤十郎は、六十五歳にて、ちよ女は、僅に九歳なりしが、もし、祖父の畑へ出る時は、かゐ〳〵しくも、農具を持ちて従ひゆき、さて、家にかへりて、祖母を助け、日暮になれば、また畑にゆきて、祖父を伴ひ歸るを、習はしとしき、稍、人となるに従ひて、孝心いよ〳〵深く、自ら、田を耕し、畑をうち、野菜を摘み、菓實を拾ひ、はては、山に入りて、葛蕨の根をほり、人に雇はれて、賃錢を受け、晝夜となく、片時も、いこふるひまなければ、いたく、顔色もかじけ、形容もやつれしからに、祖父は、之をいと不便に思ひ、おのれも、ともに、山に入りて、その業の助けをせんといふに、さらばとて、天氣のよき日は、ともなひ行きしが、老たる者は、かへりて、足手まとひなれど、ゆめ、その心にそむく事なく、まめ〳〵しく仕へけるに、祖父の若き時より、馬

を好みて、大切に飼ひ置きけるが、はからずも、頓死しけるにその悲み大方ならず、日々快々として、楽まざりしかば、これをみるに忍びず、いかにもして、馬を求めて、祖父にえさせまほしけれど、その價だになければ、それより、苧うみ、織縫の業に、ひときは力を盡し、いさゝかづゝの錢をたくはへ、年を積み、月日をかさねて、漸く、馬一疋を買ひ得て、祖父にあたへ、みづから、馬草を刈りて飼ひければ、祖父は、なのめならず喜びしといふ。あはれ、年はも行かぬ、か弱き女の身をもちて、老いたる祖父母を養ひ行きけるも、なか〱かたきわざなるに、くるしきいそしみに、僅かの代を得て、これをつゝまやかにし、その欲する者を買ひて、滿足せしめしが如きは、まことに、うるはしき心栄えあり、今の世に、かゝる者の、一人二人あらましかば、いかにうれしかりなまし。

かくて、仕事の傍はら、祖父母にいたはり仕へけるに、もとの里に歸てりし父、次郎左衛門も、久しき病の身となりて、朝夕の煙も、絶え〲なりと聞き、これをも、ちよ女がこゝろづくしにて、その養を缺くことなし、或人、その辛苦のさまを見て、人につかへて、其の身の代を得て養はゞ、かくばかり、なやまさるゝ事あるまじといひしに、祖父母よはひ傾きて、外にたのむべきよすがなければ、わが身出でゝ、人に仕へがたし、力の及ぶべきほどは、かくてあらむとぞいひける。いとも〱、ありがたき孝心ありかし。

一とせ、芦比郡、なりはひあしく、秋にいたりて、五穀みのらず、人々、食にうえて、さ迷ひ合へり。領主之を見て、藏を開き、米を與てしに、ちよ女も、その米を受けしが、祖父母のみに薦めて、おのれは、所々の山々をかけめぐり、木の實、葛の

根をとりて食ひけり。か丶る事ども、領主に聞えて、貞享二年六月より、年々に、いくばくの米を與へられにき。これちよ女が、十八歳の時なりき。その後、里の長のはからひにて、高無禮村の、喜三次といふものを婿として、ちよ女にめあはせ、田畑をもあたへければ、心やすく祖父母を養ひ、且は、母の墓をもいみじう仕たて丶、度々詣でしが、前かた、あるかなきかの有様なりしを、口惜しく思ひ、後世の弔ひにとて、花々しき供養をなし、せめてものこ丶ろやりとしぬ。また、祖父母の老衰して、歩む事かなはねば、それを背おひて、寺にも詣でさせ、すべて、其の思ふがま丶にもてなせしが、祖父は、元祿十二年に、八十九歳の長壽を保ちて、死せりとなん。それより、一家睦まじく、祖母と、父とをかしづき、行末長く暮せしとぞ。座はせば、祖父母父母に孝を致し、死すれば、わつくその墓をさむ、人の孝道、この上やあるべき、ちよ女は、實に神の心にして、一片の私欲邪心なきなり、孝のためには、身を思ひたらず、多くの辛酸をなめ盡して、其の終りを全ふしたるは、恰も梅の雪霜をしのぎて、春風に咲き匂へるが如く、その心の、常に變らざるは、松の亭々として、綠を易へざるが如し。昔へ、から國にありつる曾參とて、孝の形こそ異なれ、その心は、おなじ。鄕黨にもてはやされ、後世美譚とするも、故なからずやは。





家政

禮法講習について

西澤之助

今回、本校に於いて、夏期講習會を開き、禮法の一科をおきて、之を講習せしむる事になしたれば、いさゝか、注意のため、禮法につきて、一言述べむとす。

通例、禮法といへば、たゞ〳〵、禮式、又は、儀式と同一の意味にのみ通用すれども、之を正確に云ふ時は、禮法とは、禮儀と作法とを合せて稱したる者なり。

嘗て、しば〳〵述べたる如く、我が國は、ことあげせぬ國にして、議論はさておき、先づ、實際を以つて敎へ導く國柄なれば、大國主神の天孫に對し奉りし禮、木花開耶姫命の父母の神に對せし禮、其の他、神祇に對する禮、人民相互の禮等、總て、後世の摸範とすべき諸禮を、事實を以つて傳へられしが、議論格言として、茲に擧げむとする例は、上古には一もあることなし。

之に反して、支那は、兎角、理論を好む國柄なれば、禮に對する議論も、頗る多くして、禮は敎のみといふ孝經の語、或は、朱子の禮の本は人を敬ふにありと云ひし等は、漢籍を學びし者のよく知る所なり、殊に、朱熹の語は、最も多く人口に膾炙せる者の如し、而して、後世に至り、我が國にても、禮とは、心につゝしみありて人を敬ふをいふと、敎ふる人あるに至りぬ、成程、恭敬の意を表するといふは、人間相互の間に於ての禮の說と

してば適當なるべけれど、未だ、禮全體に通じたる説明にあらざるなり。

思ふに、禮は、他の總てに對する道なりといふ説を、最も要を得たる者と信ず、即ち、わが心を正ふして、而して、他に對して、應對の道を失はざらむことをつとむるは、禮の主意にして、他に對し過なからざらむ爲に、よく、我が心を修養するは、禮の目的なり。

次に、作法とは、心の中にて得たる所の禮を、實際行動に現す仕方なり、即ち、作法は、禮を實際の形態に現はしたるのみにて、必竟、禮も作法も、その歸する處は同一なれども、たゞ〳〵、心の中にある間と、外に出でゝ、形態に現はれしとによりて、區別せらる。

禮は、他に對して過なからむため、よく、我が心を修養するを目的とすと述べしかども、所謂、他に對しての他とは、己を除きて、天地間に於ける一切の森羅萬象を意味するなり。

なほ、一層詳しく云へば、神明に對し奉り、君に仕へ奉り、祖先に齋き奉り、親にかしづき、又、夫の婦に對し、婦の夫に仕へ、兄姉の弟妹に對し、弟妹の兄姉に仕へ、又、朋友に對し、少者の老人に對し、老人の少者に對し、また、教師の生徒に對し、生徒の教師に對し、其の他、善人にあれ、惡人にあれ、鰥寡孤獨廢疾者にあれ、普通國民にあれ、外國人にあれ、總て、人間一般に對するの道なり。

獨り人間のみならず、有情無情の鳥獸草木に對するも、其の道を失はざらむは、禮の本意にして、殆ど、禮、即ち、人道なりと解釋するも、少しも撞着する所なし、其の範圍の廣大なる事は、天地と其の量を同うせり。

貝原益軒翁も、五常訓に、

人にして禮を知らざれば人と謂ふ事を得ず。

（大意）

と、いわれしが、如何にも理ある事にて、若し、人にして、此の禮を知らざらむか、人と交るを得ざるのみならず、實に、天地の間に生存する事能はざるなり。實際、人間に禮なかりせば、社會、即ち、世間を形成すべからず。彼の文明と稱し、野蠻と呼ぶも、要するに、此の禮の行はるゝ程度に從つて下すべき名目にして、決して、單に學術の進歩を標準として、直に文明の名譽を與ふべからず。されば、各々注意して、神明に對し奉りては、畏みうやまひ、君に對し奉りては、忠を盡し、祖先に對しては、祭祀をうやうやしうし、親に對しては、孝を致すべきなり。これ、禮の主意にして、人々の本務とこそいふべけれ。さるを、兄弟に友の道を欠き、夫婦相和せず、朋友相信ぜざる如きは、禮を失ひたるの極み、人としての恥辱此の上やあるべき。

不具の人、襤衣を纏ひし人を嗤ひ、或は、乞食、狂者を侮りて石を投げ、或は、雜沓せる間を、無遠慮にも、車をはしらしめて、人を突倒し、或は、鐵道馬車込合の時、老人が、危くも革に携るに、少者は、之を顧みず、悠々座を占むる等は、皆、他に對するの道を失ふ者にて、無禮千萬の擧動と謂はざるべからず。

斯の如く、世間のあらゆる者に對して、其の對する道を失はざる樣にするものなれば、禮は、即ち、己の心を律する者を除けば、一切の所謂倫理道德を含有するなり。今一歩を進めて言へば、他に對して、其の道を失はざらむとするには、先づ、己の心より正すべきが故に、自他を併せて、即ち、

倫理道徳の全部を含むといふも敢て不可なし。されば、若し、禮を委しく述べむとするには、倫理の一般を說くの必要あり。

併し、短期の講習會位にては、到底、十分に說かるゝ者にあらず、殊に、會員の多數は、本校の生徒として、始終、これ等の敎訓を受けつゝあれば、省畧して簡單に述べむ。

さて、世界各國中に、類例なき尊き國體の下に、生長發達せし大日本の國家國民の數千年の歷史は、忠孝一致と稱する他に例なき善良なる敎訓を示せり、即ち、この忠孝一致は我が國の倫理道徳の基礎たるは、既に、人々の認むる處ならむ。

されば、國民たるものは、皆、其の身を修め、行を正ふして、君父を安んじ、學問を勵みて、國光を發揮すべし。

また、農工諸般の事業を盛にして、國威を墜さゞらんとするも、善をすゝめ、惡を矯めて、等しく樂ましめんとするも、鰥寡孤獨を助けて、血族の親を全ふせんとするも、忠孝のためには、我が身の當然の任務なり。

言葉をかへて言へば、忠孝一致を基礎とせる我が國の倫理道徳には、所謂、社會道徳も、公徳も、博愛慈善も、慈悲忍辱も、總べて、皆、完全に含蓄せらるゝなり。故に、用意周到に實踐躬行する時は、世界に於けるあらゆる倫理道徳は、一として缺くる事なし。

されば、忠孝一致の敎を以て、誠に、よく、其の心を鍛鍊し、而して、天地の萬物に對せば、其の禮の發揚せし者、即ち、其の作法は、或は、威儀堂々となり、或は、和氣洋々となり、實に、文質彬々たる者ならむ。上來述べし如く、禮は、天地の萬象に對する道なるが故に、其の形態たる作法

も、千態萬狀殆ど窮りなきは、自然の理なり。單に、座作進退の一事につきて言はむにも、手のおき所、頭の位置、目のすゑ所、臂のはりやう、脊のぐあひ、足のおき方等、中々、復雜なる者にして、如何にも困難に聞ゆるなり。而も、一切の事を、一々丁寧に説明し、敎授せんには、恐らくは、幾十年の年月を費すとも、終る事を得まじ。況て、三週間の講習會にては、その萬分の一をも敎ゆる能はざるべし。

然しながら、實際、世上にて、作法の敎授講習する者は、先づ、普通の事を習得し、之を種々に應用して、日常一般の事に遺憾なからしめ、而して、餘は、各自の働きに任するなり、もとより、作法萬般の事を委しく習ひ敎ふるは、不可能の事に屬し、また、無用に終る事もあるなり。

畢竟、本會にては、日常緊急の作法一般は、必ず、この期間にて敎授せんとする者なれば、よく課業を勉め、さて、前述の禮の大本を考へ、始終、その鍛錬工夫を怠らず、而して、習ひ得たる作法を世間萬般の事に活用せむ、恐らくは、總てに於て、無禮不作法の譏りを受けざるまでに進歩するは、余り困難ならざる事なるべしと信ず。

たゞ、幾重にも希望するは、この禮の大本（主意目的）を忘れざるやうにするにあり。

勿論、禮の形態即ち作法にも、よく〳〵熟せざるべからずと雖も、若し、十分に禮の大本を知らざる時は、眞實恭敬の意をあらはすを得ず、畢竟、其の作法は、意味なき者となり、無作法と同一となる、されば、作法を習ふにつけて、先づ禮の大本につきて注意せん事を、希望に堪へざるなり

こは、西日本女學校長の、同校夏期講習會に於ける禮法部講習のために、演說されたるものを、筆記せしなり。いまだ、同校長の訂正を經ざるを以て、或は、其の意の違へるもあらむ。讀者之を諒せよ。（編輯者識）

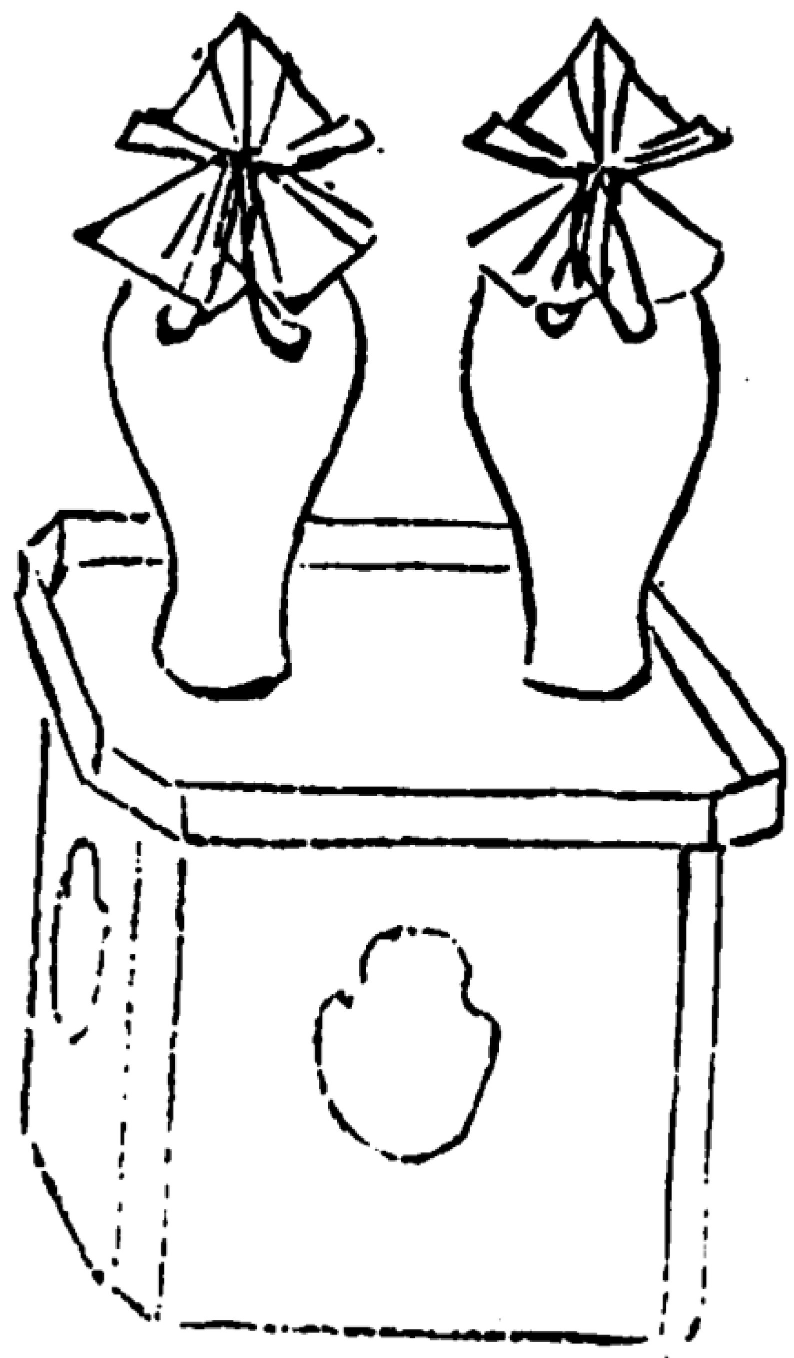
女禮式

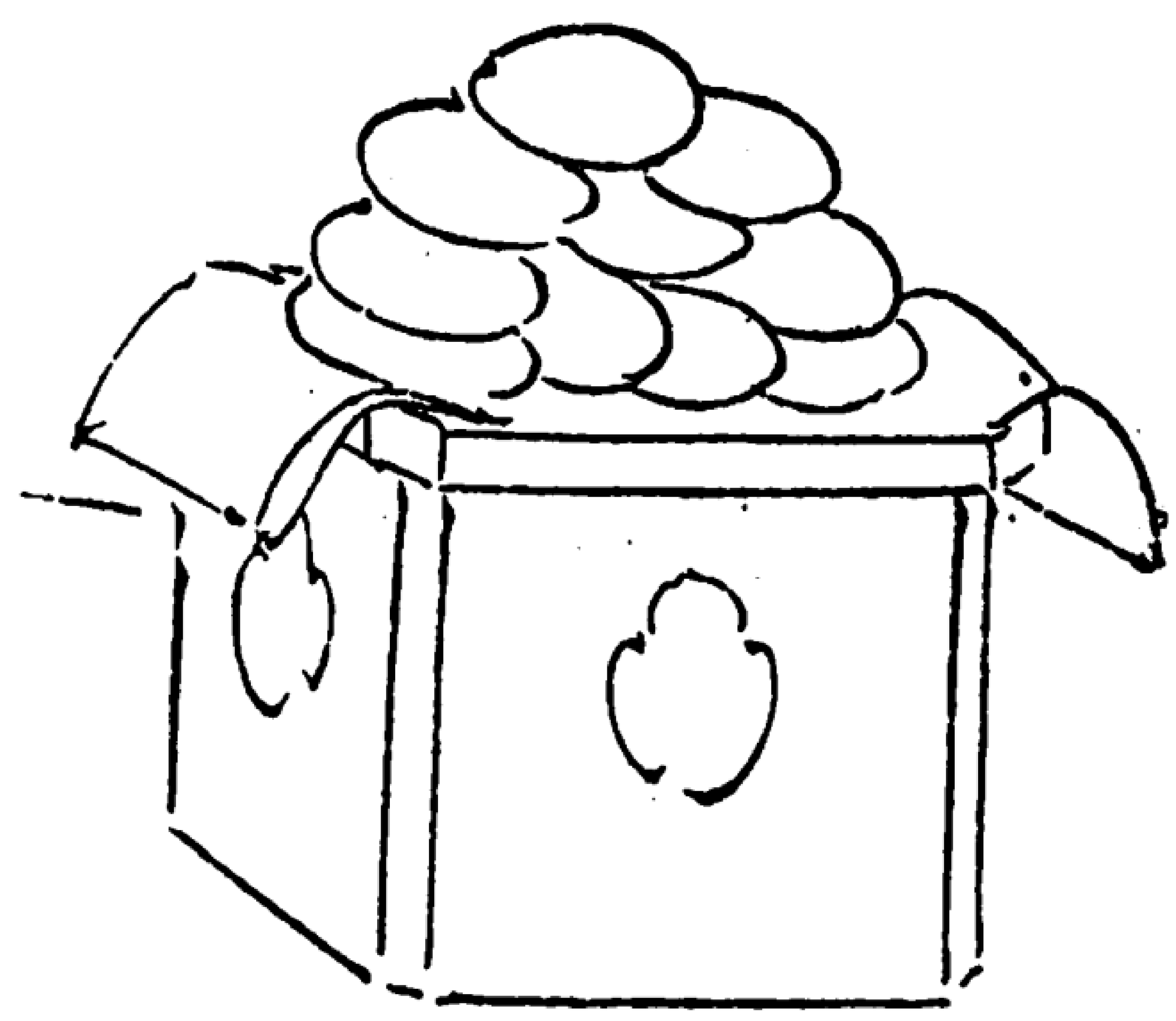
產所式着帶床飾

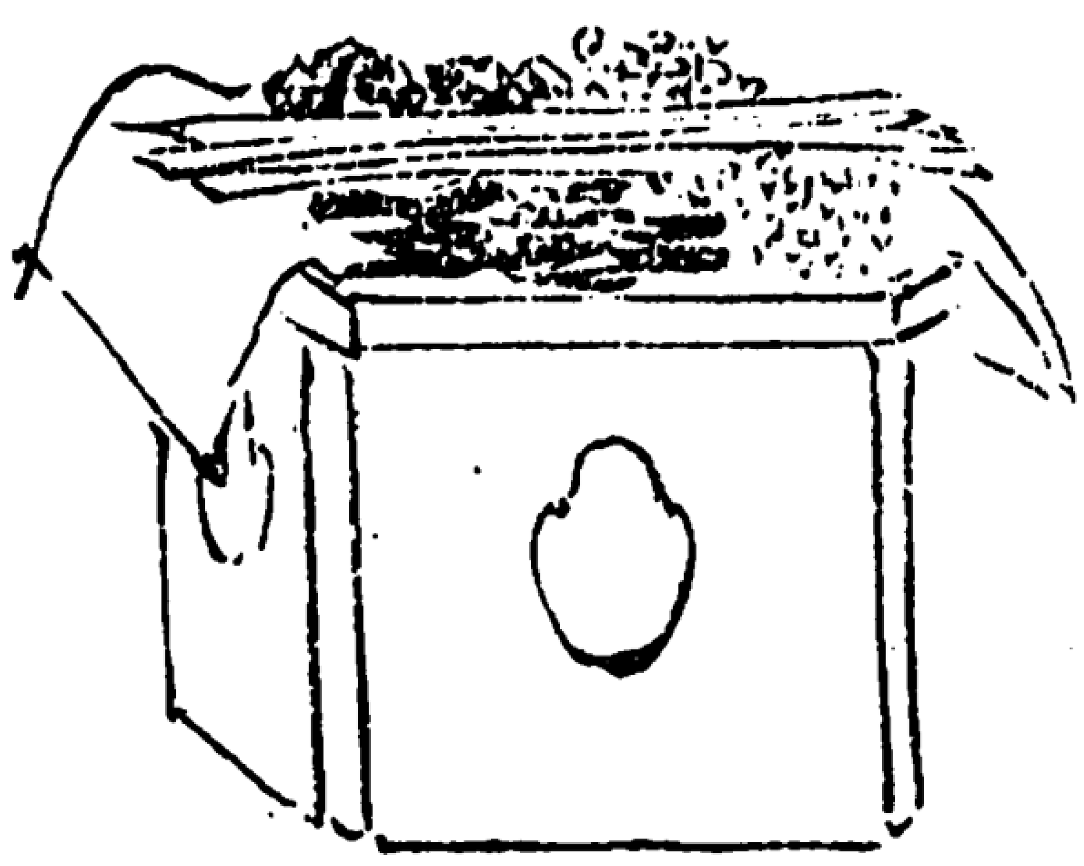
有住常子

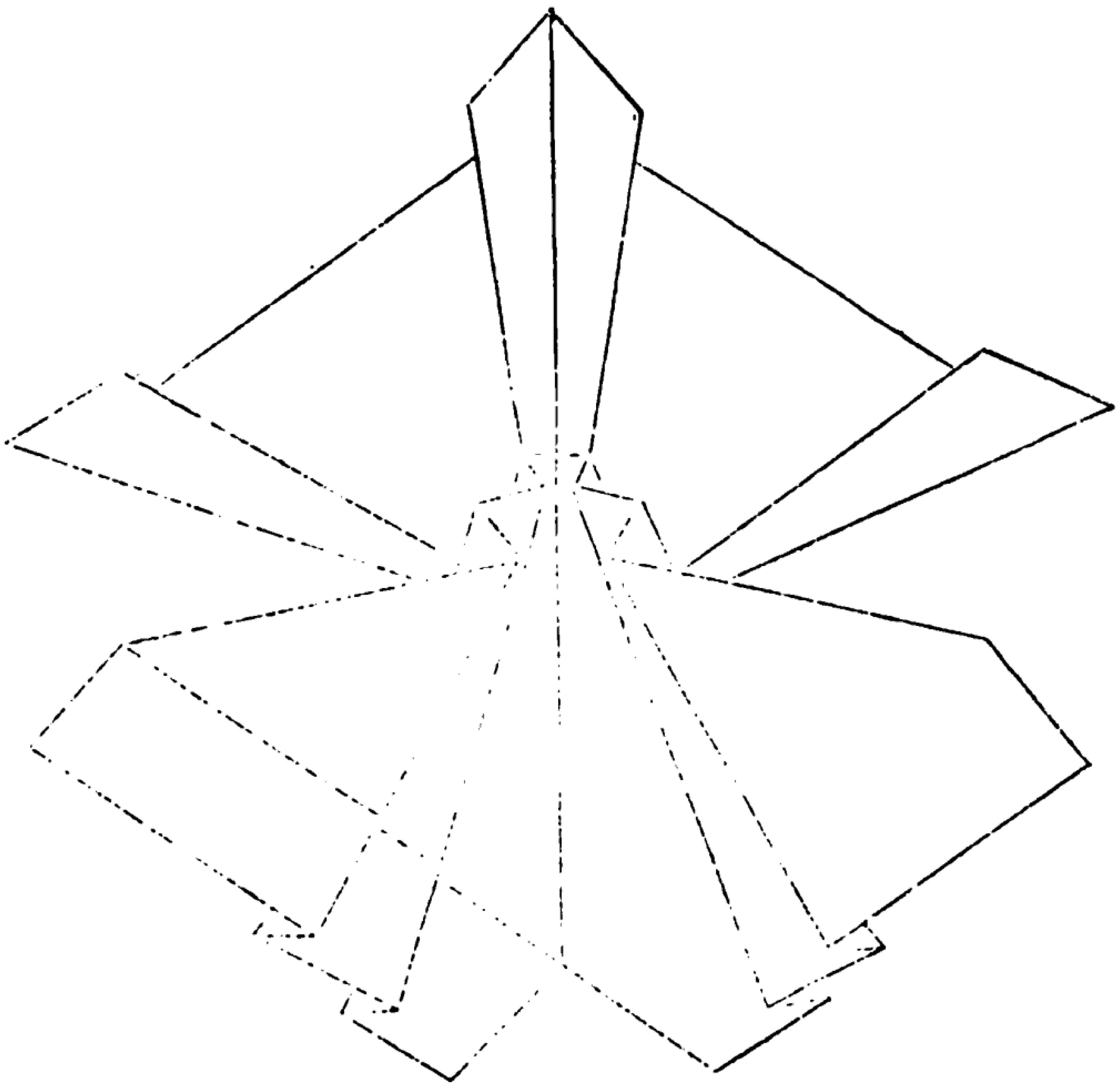
先づ、吉日良辰を撰び、五ヶ月目に、纐帶の祝ぎ有るべし。この時、蟇目篦の役人、取わげの老女等をも定むるなり。祝の法、夫婦にも要す、公卿にも、鳥子餅一重、上に、熨斗蚫を置き、据るなり。其の後、式、三献を出すべし。蟇目篦の役人、取わげの老女等へも、吸物冷酒を出し、いはゝすべし。此の後祝の膳を出すべし。

着帶床飾


御酒
蝶花形


餅十
改敷南天


熨斗
栗
昆布
米
山椒



衛生上に於ける看護法の一斑（承前）

久我西英

（ワ）氷嚢冷罨法　氷嚢には、護謨製嚢、或は、牛

の膀胱等を以てすべし。而して、嚢中には、氷塊を細く砕きて、之に充て、醫士の指定せる部位に載置すべし。氷嚢は、必ず、布片にて包むを要す。是れ、其の外面に、水蒸氣沈降して、患者を煩すを以てなり。頭部に、氷嚢を載置するが如き場合には、索を以て、之れを天井等に固定し、以て、頭部を強く壓することなからしむべし、氷嚢なきときは、之に換ゆるに、冷罨法を以てすべし、其の法は、手拭、又は、布を幾重に疊み、氷上に置き、或は、氷水中に投じ、輕く絞りて、之を冷却すべき部位に載置するあり。而して、此の布は、皮膚の温熱を感受し易きものあれば、屢々、此れに交換すべし。場合に依りては、一分時毎に、之を交換せざる可からざることなり。

（カ）寒冷摩擦法及包圍法　此の法は、寒冷のため、

一時、皮膚より驅逐せられたる血液の、後ち、再び、其の部に還流するを以て、之が目的の一となす。之に由りて、皮膚腎臓等の、排泄機能を促がし、且つ、身體快活を覺え、暖温となるものあり。併し、醫士の命令の下にのみ之を施すことなるべし。

(ヨ)沐浴　發汗療法　沐浴は、廣く、看護に用ひらるゝ法にして、全身浴、半身浴、腕浴、手浴、足浴等の局處浴あり。沐浴には、熱湯、(攝氏三十七度乃至四十二度)温湯(攝氏三十三度乃至三十六度)微温湯(攝氏二十八度乃至三十二度)冷水(攝氏二十一度乃至二十七度)及び、寒水(攝氏十六度乃至二十一度)を使用す、之に普通の水を用ゆるも、或は、鑛泉を用ゆるも、又、鹽、或は、其の他の物質を混和するも、或は、入浴の長短方法、其の他同時に施すべき灌漑等は、總て、醫士の指揮の下に於て、之を施すべし。又、時として、熱空氣浴(羅馬浴)及び、熱蒸氣浴(魯西亞浴)を要することあり、重病者を浴せしむるには、浴場に於て、時としては、虚脱を發することあるが故に、強き葡萄酒を携帶すべし。而して、浴後は、速かに、身體を拭ひて、着衣就蓐せしむべし。傳染病者の沐したる浴槽は、必ず、消毒するを要す。

浴後、發汗を要する場合には、入浴後、直に、全身を裹み、十分に夜具を被ひ、發汗せしむべし。又、時としては、熱飲料を與へて、發汗を促すことあり。

だいどころ

鹽鳥煎鳥のしたか

鹽鳥を、いかにも、鹽をよく出して、大にきり、煎べし、鍋に、鳥の油をすこしいれ、煎はしらかし、酒を多分いれ、醤油すこしいれ、煎やし、右の鹽鳥いれて、煎べし。此の内へ、赤貝やき麩をいれ、わり山椒、かやの小口切いれて、はなはだよろしきものなり。

鳥飯南蠻料理のしかた

鷄の毛を、引き毛やきして、羽をうち、腹の雜物をとりいだし、あとをよくあらひて、右のなかへ、餅米の粉一盃、粳米の粉一盃、酒一ばい、醤油一ぱい、味噌一ばい、酢半盃、都て、六色、外に、大根、花かつををいれ、水は、常の、めしたきかげんにして、右の鳥をいれ、もつとも、手をいれ、手の甲の上へ、水の上りしがよし、鳥飯の、右の水、みなになるまで、右、飯を、ごと〳〵たきて、右、煎つまりてのち、つかいてよし、右、鴨にて

も、雁にても宜し、これは、だし汁は、すこし、甘めにすべし、加藥は、前段のごとく、見合せよし、外に、鳥飯わりといへども、たいがい庖丁人のしるところゆゑ、爰にしるさず。

雁の料理のしかた

本二の汁味噌、または、淸し、一、大具小具ともに、もちゆ生鹽とももちゆ、具は、時節のものをもちゆ、吸口は、いつも、柚のるゐ、一雁の膾肉をうすくつくり、薄折敷にかいしきて、重ね盛にし、生姜酢をいれて、いだすべし。また、雁のももをほそくつくり、湯をにやし、ざつと色をとり、針せうがをいれ、よく〳〵まぜて、酢を一遍かえ、また、酢にて、茹、また、けしか、くるみか、さんせうか、かけるもよし。右、もゝきは、料理の方にて、もゝ毛といふはこれなり。

鳥の部の中このところに、○鮭の燒膾のしかたを

いれじは、右、雁の膾と、しかた同様なるがゆゑなり。

鮭の皮の方を、すこし焼て、すぐに、つくるなり。これにいるものは、針柚、はりぐり、生姜、右、一所にかんそう膾のごとく、一、焼ぐり、一、はじめ、一、ねばり、一、かや栗、ひひくりといふ名あり。これは、みな〳〵、法式事なり。

鶉の鹽辛の仕方

八月彼岸より、大鶉小鶉を、皮をむき、一、夜酒に漬て、翌日、そのまゝあげて、爼の上にて、すこしたゝきて、また、腸をいれ、ともに、よく〳〵たゝきて、焼鹽にて、壺へしこみて、三四日ほどして、とりいだし、鹽、すこしいるべし。また、ひさしく、たばいたきには、鹽つよくして、生姜をおろして、すこしいれをしつけ、漬けをくべし。一段と香りよくからばし。

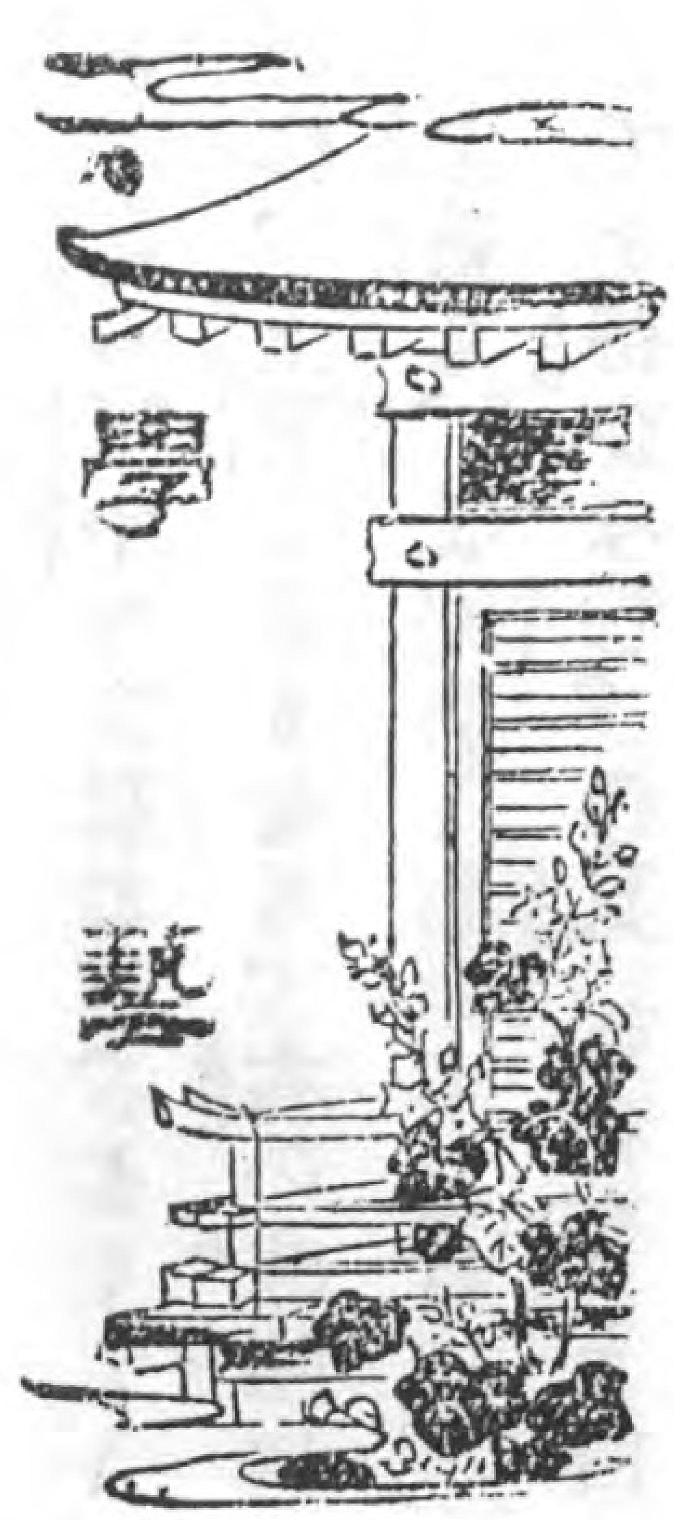
鳥味噌漬のしかた

雁か、鳩か、うづらか、雲雀か、鴨か、鴫か、白鷺か、右、いづれも、毛をさり、腹の中の雜物をとり、よく〳〵洗ひ、しばらく水氣をかわかし、右の味噌の中へいれ、よく〳〵押つけて、五六日もして、取いだし、つかひやうは、一、焼とりか、一、こくせう、一、吸ものか、一、平皿ものか、一、臺引ものか、庖丁人の心にまかすべし。さしこみにも、つかふべし。但し、汁わめをいれるよし、○大鴨雄の毛をとり、右前段のごとく、腹の中を、よくあらひ、水氣なきやうに、しばらくかわかし、白みそと、赤みそとを、半分まぜにしてとくと、鳥の腹中へさしこみ、よく〳〵、詰て、鉢にいれ、上下くるりをも、右の味噌にて、おし付て、上蓋も、よく〳〵しめてをけば、一年經て六月までを持つべし。○又、荒和布を、白味噌にま

ぶして、右の鳥の腹へおしこみ、上も、あらめにて、つゝみ、箱へいれ、風ひかぬやうに、たくわへおくべし。これもよろし。生鳥のごとし。

鹽鳥のしかた

雁鴨の肉ばかり、鹽をして、昆布にまき、壺にいれをけば、何時までもかわかず、生鳥のごとし。右の骨は、はじめにとるべし、さて、鹽鳥を料理するとき、鉢に、半温湯をいれ、そのまゝにて、鳥を溺して、右、皮のくつろぎたるを、とり上げて、生鳥のごとく、毛をとる、また、熱湯は、よろしからず、右、鳥のつくりやうは、厚くつくりて、半温湯の中へ、鹽をすこしいるれば、はやく鳥の鹽いで丶よし、あまり、かきまわせば、鳥、くだけてあし丶、右、これにて、鳥の料理のしかたは、まだ、ほかにしかたありといへども、人のしるところなれば、これを畧す、右廿八色



國文學講義

紫式部日記講義（廿一）

井上頼文

御いたゞきの、御ぐしおろしたてまつり、御いむこと、うけさせ奉り給ふほど、くれまどひたるこゝちに、こはいかなることゝ、あさましうかなしきに、たひらかにせさせ給ひて、のちのこと、まだしきほど、さばかりひろきもやの、南のひさし、かうらんのほどまで、たちこみたる僧もぞくも、いまひとよりとゝ、よみて、ぬかをつく。

釋義

○御いたゞきの御ぐし　中宮の御頂の御頭髮なり。

○おろしたてまつり　御受戒のしるしに、御頭髮を少々、そり落させ給ふなり

○御いむことうけさせ給ふ　いむことうけさせは、御受戒し給ふ事なり。佛道に人をいましめて、惡事をなさしめざる敎を戒といふ、五戒、十戒などいふは、即ちこれなり。故に佛道に入る者は、皆、この戒を受くるなり。こゝは、佛道に入り、佛の弟子となり給へる意にて、佛の弟子となれば、一切の苦患をまぬかるゝ事を得るものなりと、當時は堅く信ぜしなり。源氏物語、下の若菜の卷に、紫上のなやみ給ふところに

御ぐしおろしてん、と、せちに、おぼしたれば、いむことの、ちからにもや、とて、御いたゞき、しるしばかりはさみて、五かいはかりてうけさせ奉り給ふ

と、かけるも、こゝのさまなり。榮花物語、うたがひの卷に

三歸五戒を受くる人さへ、三十六部の善神、恒河沙眷屬ども護る者なり、いはんや、實の出家をや

など見ゆ

○くれまどひたるこゝちに　如何にせんと、惑ひて途方にくれたる心地にの意

○こは　此は如何にと、御髮などおろし給ふ狀を見て驚けるなり

○いかなることゝ　俗に、ナンタルコト、ドウナサルコト、など、いふにおなじ

○あさましう　俗に、アキレタ、キモガツブレタ、ビツクリスル、などいふ意にて、甚しくな

げきたるさま
○かなしきに、　悲しく思ひ居たるに、の意
○のちのこと　御胞衣なり、俗に後產といふ
○まだしきほど　未しき程にて、御胞衣のとゞこほりて、マダ下リヌ間の意
○さばかり　俗に、アノヤウに、アレホどといふにおなじ
○もや　母屋にて、俗にいふ、おもやなり
○南のひさし　南方の廂の間なり
○かうらん　高欄とは、椽側の端などにある欄干をいふ
○いまひとより　こゝは、俗に、今一層、モウスコシノコトなどいふにおなじ、藤井高尚翁の說に、いまひとより、は、狩にいふ詞なり。こゝは、ものゝけを、かりよするを、狩になぞらへていへるなり、と

○ぬかをつく　額にて、地を突くことにて、禮拜する狀なり。高尚翁の說に、いまひとよりと讀てぬかをつくは、經をよみて、と、いふことなり、と、よむにはあらず、ものゝけを、今ひとより、かりよせん、と、經をよみて、ぬかをつくなりと、いはれたり。實にこの說のごとし

譯解

いかに、いのりても、御子うまれたまはざるゆゑに、中宮の御頂の、御頭髮を、御受戒のしるしまでに、少々そり落させ奉り、佛の戒を受けさせ給ふほど、目もくれ、心も迷ひたる人々の心地には、これは、ナンタ御いたはしきことゝ、肝のつぶるゝまでなさけなく、悲しく思ひ居たるに、御受戒のしるしにやあらん、やす〳〵と御產あそばされて、御後產の、まだ、とゞこほりて下りざるほど、かなたを見れば、あれほど廣きおも屋の、

南のかたの廂の間や、椽側の欄干の端の方までイ、ッパイに立込みたる、僧侶も、俗人も、物怪をかりよするは、今此時ぞ、モウスコシのことと、いよいよ經を讀て、額を地に突き禮拜す。

家計簿記講義

磯部武者五郎

(十) 決算

毎月、月末にありますと、元帳、及、其の他帳簿を締めますが、殊に、元帳の科目々々を悉く締めまして、其の月の收支を決算しますのは、最も、肝要のことであります。此の元帳の決算は、元帳決算表といふ、一つの表を作りまして、明瞭に、記載します。此の決算と共に、財産一覽表といふを作りまして、財産の增減を、明瞭に謄記し、一家財産の額を、明にすることを同時に爲すを、最も必要と致します。財産一覽表と元帳とは、關係が離れません、たとへば、元帳に、公債證書を買入れたとか、其の他、備品を買入れたとか、記入にありますと、其の公債證書、又、備品即ち道具類は、財産とありて、存するものですから、是非共、財産の增加を、記入する爲に、財産一覽表を作りまして、之を知る必要があります、財産の減じたときも、同樣です。

元帳、決算表、及び、財産一覽表は、每月、作りますが、更に、年末即ち、十二月晦日迄の收入、及、財産を決算しまして、一ケ年中の、家計の有樣を、明瞭にしまするが、又、必要です。これは、每月の決算が、出來て居れば、何の苦もなく、只、毎月の分を合せて、式の如く、記入しませば出來ます。

以上にて、家計簿記法に關する說明は、概畧終りました、六ヶ敷理窟を說明しませば、限りがありませんが、左樣のことは、家計簿記に入用がなき故に、省きます。

これよりは、例題を掲げまして、各帳簿へ、記入すること、及、決算の方法等を示します、即ち、これからが實地のことになりますから、閲覽の諸孃、幸に、帳簿の書式に、留意し給はらんことを望みます。

附言

一、帳簿は、西洋紙、日本紙、何れにてもよろしくありますが、西洋紙なら、罫のある丈夫の紙、日本紙なら、美濃紙、又は、石州半紙を用ゐること、但し日本紙には、簿記に用ゐる程の、罫引の紙なき故、罫なきを、却てよしとします。

一、日本紙、西洋紙、何れの帳簿にても、西洋式帳簿の、綴方にしまして、横書にします。

一、日本紙の帳簿なら、筆を用ゐ、西洋紙の帳簿なら、ペンを用ゐまして、鉛筆は、跡が消え易くして、計算を、誤ることがありてならぬゆえ、用ひません。

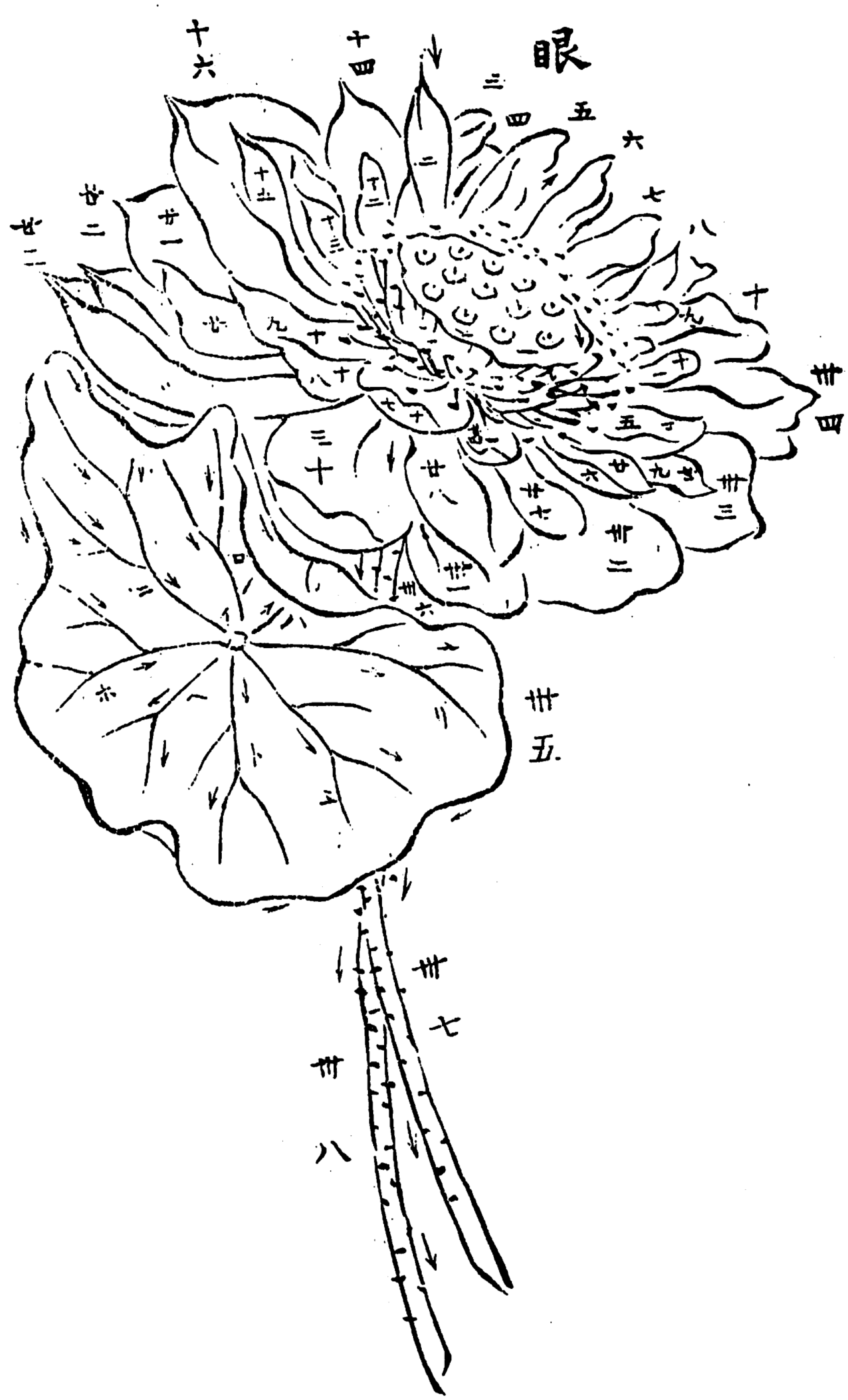
一、簿記用の、圓き定木が入用です。此の圓き定木にて、周圍の輪廓や、其の他の、線を引きます。

（以下次出）

和畫通信講義（第十七回）

山崎彩峨

蓮は、通常、紅白の二種あれども、往々、黄色等異色のものあり。今、こゝに、寫生したるは、白色の花なり。こを、墨にて畫かむとならば、淡墨


眼
十六
十四
三
四
五
六
七
八
十
廿四
廿二
廿二
三十
廿三
廿五
廿七
廿八

にて、花の輪廓をとり、やゝ、濃き墨にて、花粉を畫き、後ち、淡墨の先へ、濃き墨を附して、葉を畫き、次に、渇筆にて、幹莖を畫き、乾きて、後ち、花瓣子房へ、淡墨にて隈を施し、(前回木闌の條を參照すべし)濃き墨にて、果實、莖幹等の點を打ち、葉脈を入るゝなり。

顔料あれば、白色の花は、胡粉にて畫き、黄がち青色の隈を入る、他色のものは、胡粉を含めし筆先へ、其の畫かむとする花色を、附し、其の筆先を外方になして畫き、後ち、胡粉にて、花線を入るゝは、何色にても同じ、子房は、黄がちの青色へ赭墨を附して畫く、果實の頭部は、濃き墨にて、點を打ち、花粉は淡墨にて線を畫き、黄色を塗り、乾きて後ち、岱赭に濃淡をつくるか、又は、最初より、直ちに、胡粉を黄色にてとき、花粉を入るゝか、いづれかにすべきなり。葉は、表は藍か、藍に少量の墨を和したるものかにて畫き、裏は、黄がちの青色にて畫く、莖幹は、黄がち青色を含めし渇筆を、狹墨となして畫き、濃き墨にて、葉脈並に、莖幹の點を入るゝなり。



暮れ行く空に月出てたり　　東久世通禧

ともし火の影にそむきてこの夕へ
　くまなきうらの月をみるかな

松上秋風　　鍋島直大

もみち葉のふく秋風にちるなへに
　松のみとりそいろまさりける

月明らかなる夜友きたり

津輕承昭

琴の音にひかれて友もとひつらん
　むくらがやども月すめる夜は

窓中月　　竹屋光昭

秋寒くそらすみわたるつきかげは
　まどの中よりみるべかりける

橋邊鴈　　水野忠敬

わたりゆく橋のむかひに聞ゆなり
　川かみとをきはつかりのこゑ

島霧　　長谷信成

さくら島はるのかすみに立かへて
　もみぢにふかきあきのゆふ霧

ねさめに虫をきく　　宮地巖夫

物思ふよはのねさめをなぐさめで
　なくかかきねのまつ虫のこゑ

夕虫　　北郷久政

くれわたる野べの萩はら露みえて
　虫のねしげくありにけるかな

海邊秋風　　坂正臣

つねきてもさびしかりける荒磯の
　あまのとまやに秋かぜぞふく

庭上月　　鎌田正夫

大ぞらの月にむかへはわかやどの
　にはもせはしと思はさりけり

蟹　　本居直臣

あしといふ草のしげみに育ちてや
　よこしまにのみ蟹はやくらん

萩ちらんとす　　蜂須賀隨子

わかそでをふれなばちらん小萩原
　朝きよめせでつゆながらみん

野萩　　鍋島榮子

秋の野にみちはあれどもまはぎ原

ふみわけがたく露そおきける

霧中草花　南郷柳子

露にふすのへの草はあふみやせん
きり立こめてみちもわかねば

庭秋草　西田辻茂子

いつのまに夏すぎぬらんわか宿の
庭のあきはぎはあさきにけり

海上雁　柳原愛子

はりまがたあきかせさむき夕暮に
雁あきわたるすまのうみづら

雁横月　北島以登子

薄霧のかゝれるそらにみえにけり
つきをよこぎる雁のひとつら

孤雁　伊達秦子

狩人のつゝのおとにやみだれけん
つらをはあれてわたる雁かね

山家雁　小川直子

雲にとふ雁もうきよやいとふらん
やまざとさして鳴わたるあり

湖上雁　服部磯子

さゞ浪のおともきこえす霧こめて
まのゝいり江に雁かねぞする

川月　宮地小東洋子

打ちまねく尾花の影のうつまゝて
すめる野川のあきのよのつき

心のはな

井上頼文選

山岸光徹

三十三年の秋、支那と戦闘のをり白河水かれて、皇軍苦しめる由きゝ侍りて

ひさかたの天の鳥船くたしてよ
かれし白河にさかのぼるべく

支那國民が倫理にそむける由きゝて

世の中のみちにそむけるし國を
ひじりの國となどあふぎけん

おなじをり月を見て

つゝとりていかなる月かながむらん
血しほしたゝる草のむしろに

おなじをり虫の音をきゝて

軍人しなのあら野にかりねして
いかなる虫の聲をきくらん

寄月述懐

うき雲のくまなす月のかげみても
すむこと難きよにこそありけれ
大空のくもれば曇りすめばすむ
月こそよゝの姿なりけれ

人の世のみつればかくることわりを
そらゆく月のかげにみるかな

海人のつりたるゝ書に

やすからぬ浮世のなみやかこつらし
つりのいとまもなみの上なる

讀書の四季

大宮兵馬

春

霞へだつる春の野邊
ふみ見る道の果ぞなき
すゝむ心し撓まずば
花の色香も認め出でむ

夏

暑さ忘れて讀む文の
こゝろ涼しき宿の軒

ふみわけがたく露そおきける

霧中草花　南郷柳子

露にふすのへの草はあふみやせん
きり立こめてみちもわかねば

庭秋草　西田辻茂子

いつのまに夏すきぬらんわか宿の
庭のあきはぎはあさきにけり

海上雁　柳原愛子

はりまがたあきかせさむき夕暮に
雁あきわたるすまのうみづら

雁横月　北島以登子

澌霧のかゝれるそらにみえにけり
つきをよこぎる雁のひとつら

孤雁　伊達秦子

狩人のつゝのおとにやみだれけん
つらをはあれてわたる雁かね

山家雁　小川直子

雲にとふ雁もうきよやいとふらん
やまざとさして鳴わたるあり

湖上雁　服部磯子

さゝ浪のおともきこえす霧こめて
まのゝいり江に雁かねぞする

川月　宮地小東洋子

打ちまねく尾花の影のうつまゝて
すめる野川のあきのよのつき

心のはな

井上頼文選

山岸光徹

三十三年の秋、支那と戦闘のをり白河水かれて、皇軍苦しめる由きゝ侍りて

ひさかたの天の鳥船くたしてよ
　かれし白河にさかのほるべく

世の中のみちにそむける由きゝて
　支那國民が倫理にそむけるしこ國を
　　ひじりの國となどあふぎけん

おなじをり目を見て
つゝとりていかなる月かながむらん
　　血しほしたゝる草のむしろに

おなしをり虫の音をきゝて
軍人しなのあら野にかりねして
　　いかなる虫の聲をきくらん

寄月述懐
うき雲のくまなす月のかげみても
　すむこと難きよにこそありけれ
大空のくもれば曇りすめばすむ
　月こそよゝの姿なりけれ

人の世のみつればかくることわりを
　そらゆく月のかげにみるかな
　海人のつりたるゝ書に
やすからぬ浮世のなみやかこつらし
　　つりのいとまもなみの上なる

讀書の四季

大宮兵馬

春
霞へだつる春の野邊
　ふみ見る道の果ぞなき
すゝむ心し撓まずば
　花の色香も認め出でむ

夏
暑さ忘れて讀む文の
　こゝろ涼しき宿の軒

はたる飛びかふ夕には、
　思ひやらるゝ身の光

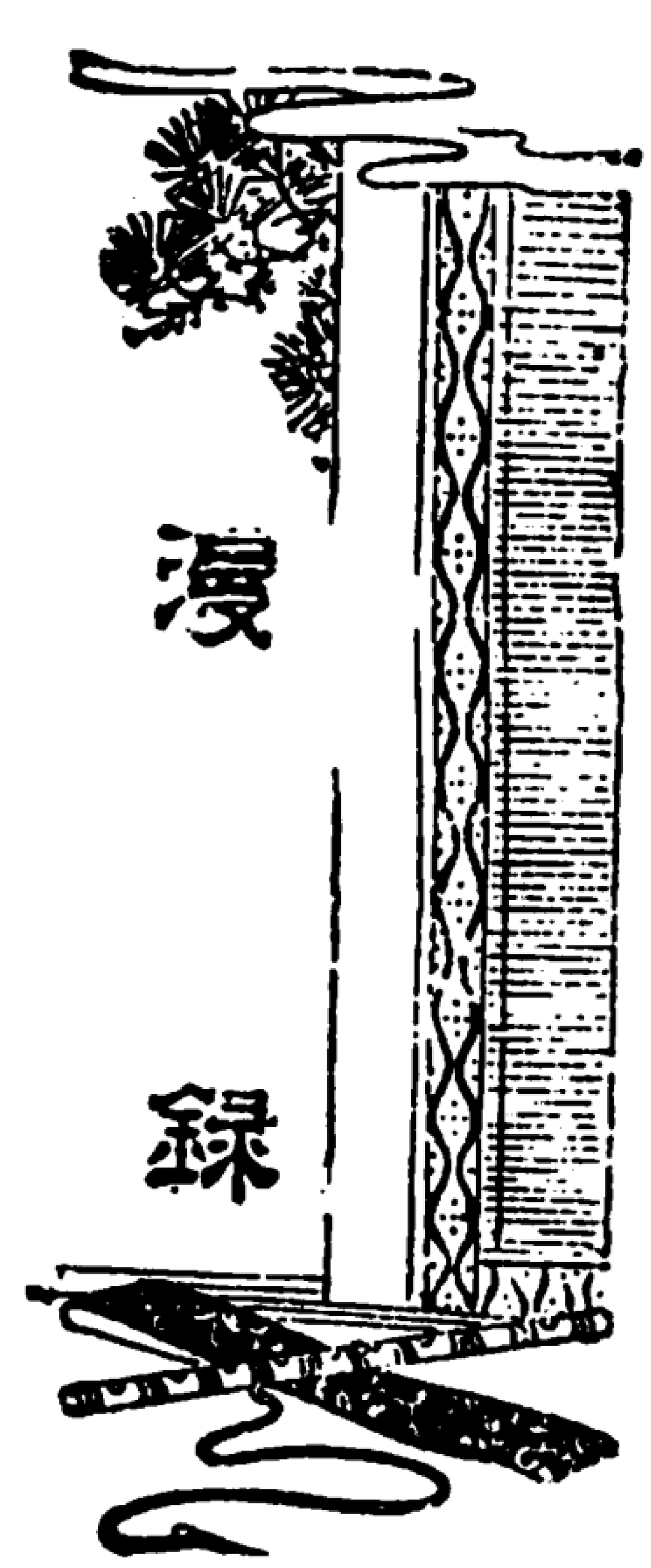
秋

ふけゆく夜半の月見れば
　讀みとく文の數ぞます
昔の人も今こゝに
　我とかたらふ心ちして

冬

嵐ふく日も書よめば
　こゝろのどけき窓の中
降りつむ雪の曉は
　ふかきさとりもひらけつゝ





漫録

あそびぐさ

著者不詳

一　いつれをか、ふかくもとめむ。きよきこゝろなり。なにをか、つねにやしなはむ。きよきこゝろのみ。こゝろきよきを、たのしきことのいたりとす。うち、おのづから、とみあつうして、ふるるところやすらかなり。たのしむべきにあらざらむや。

一　あへること、ふたつあり。ときと、みちとをいふめり。みちにあふことを、たのしまざるべけむや。うまひとは、みちにあはざるをみて、これ

をあはれみ、おのれ、みちにうときところあれぞ。これをうれふ。ときにあはざることを、うれへず。みちにあはずして、ときにあへるは、ひとのはづべきところなり。また、みちにあへるものは、ときかぬることあり。ときにあはむとするものは、みちをかぬることなくして、ときにみちあれば、ふたつながら、はなる。

二　もの丶あやしきにまとへるは、あやしからぬものありとおもふがゆゑなり。ちかくなる丶は、つねなり。とほくうときは、あやしきなり。なるれば、あやしきにあらず。はるかにたづぬれば、つねのことも、みな、あやしきものとなれり。

一　こ丶ろのためにものをつかふ、みちなり。もの丶ためにこ丶ろをつかふ、みちにあらず。

一　こ丶ろきよかるものは、おもふことあはくして、おのづから、あきらかなり。くりかへして、おもふことなきのみにはあらねど、あながちに、わづらはず。うち、すこやかなるがゆゑに、おもひ、おのづから、かせくもにのれり。

一　しるしとして、かみをよせつるは、か丶みにしくはなきなり。

一　たましひを、かみといふ。これ、そのもの丶なかの、あきらかなるものなり。かみのみちとはみこ丶ろ、いたりてきよき、かみのみちなり。なべて、いふにはあらず。

一　ひとりのみありても、こ丶ろを、うつくしみおもふものは、さう／＼しきことをしらず。あしたより、これをきよめ、これをしづかにし、これをた丶し、また、あるときは、みちのつねのほかにはあらで、ありし、ありぬべき、かず／＼をおもひいで丶、これを、きよらに、うこがむことをおもひなぐさむがゆゑなり。うるときは、よ

ろこびたのしみ、えざるときは、いきどほりうれふ。うまれながらに、えて、また、そのよはひ、ひさしからむも、うるにあかず、たれりとせず。あるゝのかぎりなきことをしれらば、あに、こゝろのいとまあらむや。

秋天感あり

三輪田眞佐子

天高く、秋涼しき好季節でありまするから、此の機を失はで、人事を勉勵せねばならぬてふ、例の主義で、殊の外、忙はしきため、編輯部より責められまして、原稿を送くることが出來ず、其の上、當日は、愛國婦人會の評議等もあり、迚も、原稿を作る暇がありませぬ、就ては、秋風の襲ひ來る燈火の下にて、所感の一二を述べ、これを、書生に筆記せしめ、讀者と共に、秋天の感を同じうしたく存じます。

自分が、師の夫人、紅蘭女史の詩に

明蟾高挂古松枝
影落寒波夜轉奇
逝水不留人易老
莫辭霜露賞多時

と、言ふてあります、これに就きても、思ひ出すことは人間は、年々歳々老に傾きます、丁度、逝水のやうなものであるも、これを見て、直ちに、厭世様の考を起すものは、天地自然の道理に背くばかりでなく、自ら、不幸を醸する結果となります、故に、短き命ですから、永くまで、朽ちぬ功績を殘す覺悟をするか、或は、時期を失はぬ中に、人事を勤勞し、精神上の、快樂を得ねばなりませぬ、此は、單に、一個人として、幸なる

のみあらず、國家の隆盛に趣く上に於て、缺ぐべからざるものであります、實に、霜露を辭することなくして、賞すること多時せよとの主義は、文學上の價値が、多きに止まらず、道德上國家のため、必要と信じます、希くは讀者は、老い易き世だからと言いて、失望落膽するよりも、老い易き世だから、精勵奮起するやう願ひたく存じます。

元來日本の國民は、厭世樣の氣風ではありませなかつたのですが、佛教の渡來以來其の良き所のみを取らずして反りて、其の短所ある憂世を、かこつものも多く、文學上に顯はれました、これは國家のため、惜むべきことゝ存じます、自分は、佛教の良き所のみを、取れよかしと祈ります。

概ね、女子は、男子よりも、感情が強いから、楊柳の色を見ても、落葉の聲を聞きても、或は、菊の白露に觸れても、能く、感じ、能く、涙を催します、然るに、人によると、其は、女子の欠點であるから、教育にて、男子らしく、冷靜せねばならぬと言ひます。自分の考にては、人情に戻り、天則に違ふ論でありましようと思ふ、恰も、火は熱し、水は冷かなる、其の天然とするものを、若し、人ありて、火の冷かきを欲し、水の熱するを欲するときは、場合に由ると、必要ではあらうが、兎に角、自然の理法ではありませぬ、女子は、感情に富むのが、自然であります、即ち、其の自然の性徳に由りて、慈母となり、貞婦となり、若しくは、孝女となることが出來ます、決して、其の特質を擯斥してはありませぬ、寧ろ、獎勵せねばなりませぬ。

併し、物は、程度あるものです、一朝その程度を越ゆると、大に、害となります、女子は、感情に富むからとて、専ら、感情のみを養ひ、熱する餘

り、狂するばかりの人となりては、良くはありませぬ、之れ故、教育は、道理を教へて、熱し易い亦、狂し易い、感情を、適當に導かねばありませぬ、今、女學校の教材より、例を取りますると、文學は、感情を養成するも、化學物理學數學等は道理を知らしむるものであります、而して、修身は、其の中を執りて、圓滿なる人物を作るのであります。

あゝ、秋のことより、秋扇と言ふ句を、聯想致しました、これは、東洋の婦人が懷く、閨怨に多く用ゐられます、されど、此は、婦人のみの、特に、男女間にのみ用いずも、良い句であります、如何とあれば、女には、隨分非道い人があります、即ち、都合のよい間のみ利用して、既に、用をなさざるやうに至ると、すげなくも、之を見棄てゝ、顧ざるものがあります、されど、其れでは、人情の厚い人は、忍びざるものでしよう、彼の創業の際これを利用して、一朝、成効の端に附くと、漸々、遠くる例は、歷史上のみならず、今日も少くはありませぬ、これは、恰も糟糠の妻を堂より下し、慈母、恩父の老病を厭い、若しくは、國家に盡すべき大義を忘れたると一樣で、君子の耻づべきものでありましよう、今后、世に輕薄者の增加するに從ひて、秋扇の歎を發するものも増加するを免れませぬ、實に、いやなことであります。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は資て我が短を補ふべし他の短は以て反省の料とすべし

▲たゞ我が長をすてゝ他の長短をあはせるの愚をなすべからず

第五章　露西亜婦人

（其の一）　露國婦人の氣質

大國の民は、悠揚にして、寒國の動物は、沈靜ありと云へる語の、若し適用さるゝあらば、露國婦人は、其の標本として見るべきものあらむ乎。

露國は、最も、專制ある君主政體の國柄にして、婦人の權力も、いたく、制壓を蒙れり、而して、婦人は、驚くべき程の忍耐力に富み、而も、活潑の氣象を包含して、奮勵休まざるの槪あり、近時露國も、其の國力大に富み、文化熾に開かるゝと共に、中流以上の社會にあつては、婦人にして巴里留學をなし、或は、歐州漫游の途に上るもの頗る多し、爲に、巴里流行等は、漸々に輸入せられ、質朴にして泊然たる露國婦人も、漸々に驕奢に陷り、浮華に流るゝの風なきにあらず、而も、こは、都會一部の弊習に過ぎずして、又、婦人の外國行より、露國の婦人界を益せしものは、決して、少からず、蓋し勤勉質朴にして、悠揚ある露國婦人獨特の氣質は、却て、都會の地よりも、西比利亞、其の他僻陬の地に於いて見ることを得べし。此等の僻地にあつては、窮民甚だ多く衣食且夕を支えざるものあるも、婦人は、毫も苦とせず孜々として其の業に餘念なく、皞々として、其の良人に事へ、其の兒女を撫育しつゝあり。夫の恐るべき虛無党の、妻たり母たるものゝ如きも亦、極めて、温良貞淑にして、其の子や良人は、何故に斯る過激の人あるかを疑はしむる位なりとす。露國婦人に、以上の如き特質を持するを以て、或場合には、寧ろ男勝りとも云ふべき點多し。而も此等の婦人中より、マソー、バシカアトセッフ出で、コヴアブレスキー夫人出で、遂に、カザリン大女帝の如き英明の女主を出だしたり。

（其の二）露國婦人と教育

彼得帝が、歐州の文明を輸入することを力め、一時、獨逸より、種々の學者を招聘して、人智を開發せしより、女帝カザリン二世に至り、更に、人智の開發、即ち、教育事業に熱注し、先づ、其の以前まで、露西亞婦人は、殆んど、無教育にして智識卑く、品位乏しく、甚だ憐むべき境遇なりき然るに、女帝は、帝室財産中より、多額の金を支出して、女學校を建設し、六七歳より十七八歳迄の貴族の女兒を入學せしめ、女子必須の教育を施せり、其の全學期は十二ヶ年にして、一たび、此に入學せしものは、卒業する迄は、家に歸るを許さず、之れ、頗る、嚴酷の所爲ながら當時の露國人は、未開蒙昧にして、女兒の其の父母兄弟のために、偶、誤らるゝを恐るゝが爲めなりし。

アレキサンダー二世の皇后、マリーの世に至り、女子教育も、漸く進歩し來り、嘗て、行はれし十二年間女學生が、構内生活の制も廢せられ、各地方到る處に、女學校の設立さるゝを見るに至れり。且つ、此の頃より英佛獨の三國語は、高等なる女學校生徒の必修課目となり、今は、極めて高尚にして、交際巧みの婦人を續出す。

最近二三十年前迄は、一般の歐州人をして、露國婦人の無教育を笑はしめし程なりしも、三十年後は、既に、大學を卒たる婦人少からず。蓋し、之あるは、曩時、聖明なる女帝の教育奬勵に基づくと雖も、抑、亦、露國婦人が、自から奮起熱中せしに由らずんばあらず。

初め、露國婦人の無學無識にして、兒童養育の任に耐えず、交際の道に通せず、良人輔佐の法を知らざるが如き、續々として、時の新聞雜誌等に於いて、識者の鞭韃を受けしかば、氣慨ある婦人等

は爲めに大に奮起し、其の舊慣を破らんと欲して相競ふて、學に就くに至りぬ。而も、頑迷なる父兄等の之を拒むもの多かりき、殊に、クリミヤ戰爭以前迄は、露國は、一般に奴隷制度の實行されしを以て、農民等は、其の生活頗る裕なりしも戰爭以後、之が廢せられしと共に、遽に、窮苦を告げ、婦人等は、止むを得ず、高等教育を受け、高等なる職業を得て、田舍貴婦人たるの面目を保たざる可からざるに至れり。且つ、當時の露西亞婦人は、全く、男子の膝下に屈服せしめられて、隨分、亂暴なる男子の意を甘受するの止むを得ざるに至りぬ。然れ共、元來氣象旺なる露西亞婦人の、如何ぞ永く之を忍ぶべき、遂に凡ゆる困難を凌いで、女子高等學校の建設を政府に促し、遂に、千八百五十七年之を開かしむ。而して、此の時より婦人も、殆んど男子と同等の教育を施さるゝに至れり。之を英佛等が、此の種の學校を遍く開設せしに比すれば、猶二三十年後れたりき。斯くて、中學程度の女學校は、續々として勃興し今は、既に、其の數四百に達し、十餘萬の生徒を見るに至れり、猶、私立に、官立に、其の數は年年增加し、舊弊を受けし學校も、漸々に其の面目を革め、文壇上に、技術上に、嶄然頭角を拔くの婦人輩出すると共に、其の位置も大に增進せり。露國に於ける婦人高等教育は、既に斯の如し、即ち、其の普通教育が、如何に洽布されつゝあるか亦、此に贅するを要せじ。

（其の三）露國婦人の風俗

何の國も、前世紀頃より、著しく婦人の權力高まり、其の元氣の振來れると共に、曾ては、男子の事とのみ限られし範圍内に、婦人の其の足を容るゝに至りぬ、蓋し、亦、文明の餘澤ならむ、今

進歩せる其の風俗の一端を擧ぐれば、露國の西南地方にては夏日になれば、男子は多く境を隔て、、出稼に赴くを以て、村落に殘れるは、唯、老少のものと、婦人のみなることあり、此の如き地にあつては、婦人は、皆、其の良人兄弟に代りて、諸般の事業と、時務に從事するあり、而して、或嚴しき短銃と、劍を腰にせる巡査となりて、竊盜の拿捕等に任ずることあり、而も、之れ當初は夏期のみなりしも、今は、之を以て、常職とするものありと云ふ。

婦人の軍人として隊伍に加はり、戰鬪に從ふが如きものは之なきも、歐州には、貴婦人にして、名義だけの軍人たるもの少なからず。現に、露皇の如きは、一隊の指揮たるの位置にありと。

(其の四)　露亞西婦人の模範

(一)　露國皇太后

露國皇太后は、クリスチアン親王の第二女にして、親王若かりし時、極めて貧困に陷られ、丁抹の都城コーペンヘーゲンにて、一家七人、質素淡泊の生活をなしたりき。

然れ共、後に、親王は、丁抹國王となられ、一子は希臘王となり、長女は、英國皇太子の妃となり、季女は、英のカムバルランド公爵夫人となり、第二女は、即ち、大帝國露西亞の皇太母と仰がれぬ。皇太后は、斯く、貧窶の内に長ぜられしが故なるか、万事甚だ節約にして、露帝室の費用も、陛下の入御ありし以來、大に減少せし位なりと云ふ。初め、ニコラス太子に(先帝の兄君)嫁せらるべき約ありしに、太子は、落馬のために、非命を遂げられたりしかば、遂に、先帝に嫁しられたるなり。而も、情交甚だ睦まじく、宮廷の内、常に春の海の如かりき。

また、特に、慈善の心に富まれ、地方の災變禍害ある毎に、必ず、自家の經常費等を節減して、之を下賜し、又、學校其の他婦人會等には、屢々行啓せられて、大に仁惠を施されしが、上下共に、其の德風に靡き、流石に兇暴なる虛無黨も、陛下に對しては、只管、欣仰恭順の意を表せりと云ふ。

(二)　家庭の明星トルストイ夫人

露國に於けるトルストイ家は、家庭の明星を以て世に仰がる。即ち、伯爵トルストイ氏の美談は云はずもがな、茲には、トルストイ夫人が行爲の一般を叙して、明星の光をして、更に、炳耀たらしめし所以を觀んと欲す。

夫人は、莫斯科なる一醫師の令孃にして、ソフィア、アンドゥーヴナ是なり、十八歲の時、トルストイ伯に嫁せり、曾て、大學に教師の試驗を受けて、之に及第す、幼より、書畵文學を嗜み、小說紀行文等を草せしことありしが、畵は、最も巧とする所なり。性質は、極めて嚴正眞摯にして、毫も虛僞虛飾なし。

夫人の嗜好性質は、不思議にも、其の良人と一致す、されば、伯が有名なる小說戰爭と平和を物しゝ時の如きは、前後八年夫人は、原稿の淨寫より校正を事とし、決して、之を他人に爲さしめず、此の他伯が斷簡零墨悉く、蒐集して、之を秩序正しく整備し、伯が注ぎし丹忱をして長に朽ちざらしむ故に、伯が雄篇大作をなす、常に、其の夫人の力を待つこと少からず。

伯が、夫人を視ると、次官の如くなれば、夫人の伯に於ける大臣の如く、恭讓温良、一庭、恰も春風駘蕩の中にあるに異ならず、特に、伯夫妻の最も力を傾けしは、子女の家庭敎育にして、敎育

方針は、伯之を立て、夫人之を遵守す。其の子女、總べて十有餘人、決して、保姆を雇はず、私宅敎師に任せず、一々夫人の手に掛けて、養育指導し、平生、決して、虚僞、折檻、恐嚇等のことをなさず、若し、子女の、惡戲其の他過失ある時は、之を罰するに、自然法の如きものを用ゐて、子女の如何なることをなすも、之を顧みず、遂に、眞正に悔悟の色現はるゝを待つて、初めて之を許す。子女の初等敎育、即ち、語學音樂等は、兩親に、各分擔して之を敎え、稍長ずるに及んで、適當の學校に學ばしむ、而も、子女の好む所に從つて、其の方向を定めしめ、敢て制裁を加へず、蓋し、可成的其の天稟の性格を述べしめんとするにあり、夫の育兒の際に、無敎育のはじめに、保姆を任せざるが如き、亦、其の天然を枉ぐるを恐るゝに出づ。

露國貴族社會の風習として、夏は、田舍の別莊に暑を避け、其の他は、都會生活をなすを常とす。然るに、伯夫妻は、都會を厭ひて田舍に常住し、極冬、僅に莫斯科に出づ。伯夫妻は、虚奢虚僞を惡むこと甚だしければ、他の俗流と伍して、交際場裡に翺翔するを忌み、又、叨りに、功名富貴を貪るを恥ぢ、唯、最も健全なる家庭を形づくるを希ひて、之を得たり。即ち、伯を家庭の明星として渇仰すると共に、夫人の光榮や亦大なりと謂ふべし。

(三)　ノヴヰコッフ夫人

夫人は、露國の貴紳キーレッフ家の女にして、陸軍中將ノヴヰコッフ氏の妻なり。其の青春時代は、家の富裕なるに任せ、文學宗敎等の信仰と研究とに身を任ね、政治界の事には、曾て、其の嘴を容れざりき。

然るに、露士戰爭の際、愛弟キーレッフ大佐が、名譽の戰死をなしゝより、非痛の餘、慨然として起ちなばれ、我身も、國家に盡瘁して、芳名を博せんと決心せり。

此時、露國が土耳其を伐つに方り、眼邊の巨瘤となり、妨害を與ふるは英國なり。而も、英國は、恰も露英聯合を唱へし自由黨は、野に下り、ビーコンスフィールド伯、保守黨を率ゐて、內閣に入れり。故に、英國の輿論を動かすは、最も困難なる時なるにも拘はらず、夫人は、自由黨の首領、グラットストーンに一面識あるは幸とし、土耳其の暴を訴へ、英露連衡の利を說き、以て、輿論を一變せんことを求めぬ。而して、具翁は、之に同情を表するの返信をなせり。

既にして、夫人は、飽くまで英露兩國の間に介立して大に露國の利益を計らんと欲し、其の良人と離れて、決然英京龍動に赴き、兎ある旅館に其の本據を搆へ、日々に自由黨の諸名士を說き、或は、其の持說を新聞雜誌に投書し、或は、著作に、或は、演說に、縱橫奮鬪到らざる所なし。されば其の熱心の結果、漸く世論を動かし、人をして謂はしめき。夫人が三寸の舌と、八寸の筆は、優に、十萬の精兵をして顏色なからしむと。

斯くて、前後十八年、絕えて英露兩國間を往復し、兩國間の問題には、一として夫の干與せざるなし。而も、多年研究精查の効は、夫人をして、兩國に錚々たる知名の士に、常は、其の奇警卓拔の稱賛を止むる能はざらしめにき。

夫人は、實に、萬金の資あるにあらず。高官貴位あるにあらず。而して、能く、敵の中堅に孤軍奮鬪して、間接に直接に、露國の鴻益を計りしは、大胆とや云はむ、活達とや云はむ。宜なり、後人

の無冠の露國全權大使として、長く、欣仰措く能はざるや。

斯れば、カーライル、スコベルックの如き人も、常に、夫人の行爲を賞揚し、グラットストーオンの如きは、殊に、夫人の著ある（露國と英國）には、親しく筆を執つて、評論を試みし程なりき。

はきよせ 一

松竹莊主人

予が友は、きよせと題したる隨筆をもてり。何人の著あるを知らず、たゞ、彥根藩士の手になりしものあることは、その記事によりて、しらる。嘉永より、安政頃まで、見るもの、きくものにつきて、うつしもし、書きもしたるが如し、原は、百卷に近かりけむが、今は、纔、二十八

卷を存せり、そが中に、婦女にかゝれることにて、やゝ、おもしろしとおもはるゝを、一つ二つぬき出で次々に、おくりまつらむとす。

在近江　松竹莊主人しるす

矢部正子は、初め、名、久子、美濃國芝原の鄕、北方の人、歲十六にして、同國結の里大原氏に嫁して、女をまうく、十九といふ歲に其の夫の、忍び妻の故を以て、彼の娘をつれて、母の許に歸れり、後、再嫁せず、母兄ともに、京に住めり、歌をよみ、手をかくことを、小澤蘆庵に學び、其の外茶香の風流を始め、女禮長刀の業まで、學ぶ事多かりき、此の間、かりそめに、故鄕にくだりたる時、もとの夫、後の妻もあり、子も出來たるに、野中の淸水忘れがたくやありけむ、媒をもて、とかく、いひあびけむとし、文さへおくりしに、然ながら、かへすとて、一首の歌を添ふ。

秋に逢ひて枯にしものを今更に何おとろかす荻の上風』　娘の爲に、己は、宮仕の志ありしかば、二十六といふ歳に、某の國の守の姫君のかしづきに參りしが、名を吳と賜ひて、江戸に仕ふ。才あるからに、類なく時めきしに、傍輩のねたみに逢ひて、退けり。さて、江戸に在ること一年あまり、しる人の勸むるにより、歌の道を敎へけるが、學ぶ人、百に及ぶ。思はざるに、火の災にあひて、此處彼處逃まよひ、かろうじて、身一つ全くして、京へ歸らむとするに、母に預け置きたる娘、先に死し、終に、母もうせにし時、歸りつきて、悲しみに堪へず、こし方の幸無きことをあつめて、やらむ方なく、尼になりて惠靜と名付く。時に歲二十八なり。其の時、親しき人に止めしかば、口ずさみし歌、

淺からずいさむる言にそむかめやおは方に世をうしと思はゞ』　やつかりも、常に、交り人あるに、このをりは、近江に侍りしかば、云ひやりける、『かはく間も涙に袖のくち果てゝ衣かへぬときくはまことか

思ふにもたかひのみゆく世のうきや誠の道のしるべなるらむ

かへし

墨染に衣の色はかへしかとかはらぬものは袖の上のつゆ

思ふ事げにたがはずば世の中のあたなる道に迷ひはてまし』　思ひのつもりけるにや。明る年の秋長月、病みて終りにけり。

遺詠のうちに、雁をよめる

鳴雁の聲も遙に隔りて翅さえゆく秋霧の空

題しらず

水底に沈める月も入りはてば何をうき身のたく

ひにはせむ

瀬によせて思を述ぶ

世の中はあすかの川とき〻しかと身のうき瀬こそかはらさりけり

女子要書解題（やけの部）

三浦千畝

大和小學　六巻五冊

尾崎雅嘉の群書一覽には、辻原元甫の著としあれど、いかゞあらん（此の人の傳の詳らかならぬことは、女四書の解題に云へり）。自らの跋文には、左の如く見えたり。

倭小學之一書、爲二兒女愚蒙一而作也。若夫鉤玄探幽、則別需二諸家之註解一而可也。庶乎後之覽者、質二正其矛盾一云爾。時明暦四戊戌年夷則吉辰。辻原隱士沙木子謹誌

沙木子とは、一時の號なるべし。されど、果して、名を元甫と云へりしや否かは、未だ確證を得ず。

此の書、朱子の小學を假名文に和譯し、婦女童蒙をして、解し易からしめたること、書名の如し。又山崎闇齋の著書にも、大和小學と云ふがあり。同名異書あり。まがふべからず。

大和女誡　一巻

林道彰撰す。天保十五年の刊行あり。此の書は、曹大家の女誡を、假名文に書きやわらげ、兒女子をして、讀み易く、解し易からしめたるものなること、その書名の如し。女誡は、女四書の内にあり。又、女誡俚言といふもありて、同じく、曹大家の女誡を、譯したるものあり。

倭教訓　一巻

大高坂芝山の妻、成瀬氏の著なり。成瀬氏の傳は、唐錦の解題に云へり。自序に、假名の文字つかふ法あり。やまとぶみかく道あり。やまと歌なかむるさまあり。これ、しかながら、我が日の本の風にして、いにしへより、今の代まで、すたれざる事あり。そのほか、をとめ子の、まなびならふべき道において、せちなることを、あらましあつめて、此の卷とし、倭敎訓と名付く。いはゆる、手ならふはじめ、物よみそむる便なるべし、と見ゆ。此の書、續女則第三卷に收めたり。續女則の解題を看るべし。

賢女物語　五卷

自序に、『つれづれなるまゝに、つくづくと、世の風俗をおもひみるに、こゝもとの男をうなは、なべて、無禮になりもてゆくなれど、ひとの國の人は、さやはある。(中略)今樣の女は、無下にものいひきたなく、作法みだりにして、父母に、孝行をつくし奉る心なく、舅姑に、つかうまつるすべしらず。夫をあなどり、内を亂り、外にさし出、萬につけて、女の道に、たがへることのみぞ多かる。已れ、もとより女の身なれば、かつはおこがましけれど、大方他のうへは、言葉にもいひやすく、わがほどしらぬは、よの常の習ひなれば、見る人、つみゆるしてよ。(中略)われ、ひとりの娘をもてり。もとより愚なれば、漢の倭の草子を見て、道をこゝろむることをしらねば、況して、身におこなふすべをしらず。しかあるを、さもなく、おふしたてんも、心うきことにおもひとりて、ふるき書のそこそこ、又、わかきより、耳なれしよしなしごと、かたはしかきあつめて、賢女物語となづけて、

むすめに敎訓す。『洛下芳菊軒某母滿書焉』と見えて、作者は、女子なる趣あれど、その傳は、未だ詳かならず。著作年代も、さだかならねど、決して、新しきものにはあらず。

此の書、第一卷第二卷には、父母に事ふる道を說き、第三卷には、舅姑に事ふる道を說き、第四卷第五卷には、夫に事ふる道を說き、每卷多く、和漢賢女の事跡を擧げて、證とせり。

衝口漫言（六）

白松苑主人

○第二の耶馬溪

賴山陽は、九州の耶馬溪を指して、天下第一の奇勝と云つたが、余もこゝに、我が山口縣下に、第二の耶馬溪を發見したのである。否、余は未だ九州の耶馬溪を見たことがないから、實は天下第一の奇峯とか奇勝とか云ひたいのであるが、一方を見ぬうちからそういふのは、少し早計の嫌があるので、一步讓つて、假りに、第二の耶馬溪と名づけたのである。こういふ事は、樂園欄で紹介するのが當然かもしらぬが、此の漫言も段々と四角張つてきたし、時節がら、殘暑を洗ふにも適するであらうと思つて、殊更に文章も口語體に據つたのである。どうも殘念なことには、元來文章が拙劣であるから、實景を描寫して、紙上に飛躍せしむることが出來ない。それゆゑ第一と云ひたいほどの絕勝も、第二の位置すら保たれないやうになつてしまうかも知れぬが、それは筆者の罪で、景の罪では決してない、だから景の趣味を補ふに、畫を以てしたならばと思ふけれど、これも元來の不得手ときてをるから、なほさら殘念な次第で、

此の處は、是非、本誌の高橋松亭君に御依賴申して、一層の光彩を添へて貰ひたい者と思ふけれど、同君の諾否のほどは、なんとも云へない。あまり前口上が長くなつて濟まないが、

處は、長門國大津郡靑海島と云ふ島で、此の島は、今より一二年前までは、瀨戶崎浦と合して、仙崎通村と呼んだのであるが、今は獨立して、通村と云ふのである。此島の沖磯で、海水に臨める一角と云ふ者は、實に、數千萬仞の斷岸絕壁であつて、支那人にでも云はせたならば、すさぐま崗巒の勢を刀削す、とか、崖岸の形を鑿穿すとか出る處であるが、なかなかそれどころでは、ない數百丈の屛風を建てたるが如き岩石の、その嶮峻な事といふたら非常な者で、或は、怒つて角だちたるあり、或は彫られて、洞となれる者があつて、之を北齋にでも書かせう者なら、得意の大斧劈皴でやる處である。その麓は、轟々たる激浪渦卷來つて、絕えず之を洗ふのであるから、その根軸は、たまらない、大いなる洞穴となつて、浪靜かなる時は、其の中を小舟に乘つて、自由に往來が出來る位である。また、これと相對して、海上に、非常なる奇峯がある。その形を云はうなら、突兀たる岩石が直立數千仞、遙に天に冲してをる。さてこの周圍は、僅か八疊敷位で、仰ぎ見れば、遙の絕頂に、磯馴松の面白く曲りたるが、二株三株枝を垂れて、その松に大なる鷲が、巣を食ひて、折々魚を啄み來りては、そのあたりを翺翔する、有樣が、甚だ雄壯でいかにも處得貌に、安心ぢやといふやうである。此の如き奇峯が、一つ二つばかりでない、すべては十五六もありて、小々の高低はあるが、形は、悉く同樣で、さながら劍を植ゑたがやうに、其の風致の奇拔なこと〳〵いふたら、

これはくとばかり、別に云ひ盡すべき語は出ぬのである。之ればかりですら、迚も得難い天然の壯觀であるに、右の靑海島には、多くの猿が棲んで居て、彼の如上の島の一角なる斷岸絕壁の中央に、突出してをる巖の上に、無數の猿が遊んでをる。此の處は實に峻嶮な處で、飛鳥も翅を收めて近付かぬほどであるから、況して、人などが近よらうといふのは、魯般が雲の梯や、墨氏が飛鳶あらばいざしらず、と云ひたいが、それも覺束ないだから鐵砲も何も屆かない。猿どもは遙に舟中の人どもを、瞰しながら、此の如き危險な所を、走り步き、戲れて居て、人が、若し鐵砲を擬する時は、それでも念の爲めにといふ意味であらう、悉く、巖下の穴に這入つてしまふ。

ひとゝせの夏、余等は兩三人の友と、小舟に乘つて此の處に遊んだ、此の日、淸風徐ろに來つて、水波興らずといふ好天氣で、客に、洞簫を吹く者もなければ、明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふたわけでもないが、獨立羽化して、登仙する思ひがしたのは、赤壁の景に勝ること萬々であつた。寫眞器なりと携へて來たならばと、至極殘念に思つたが止むを得ない、小銃だけは持つて來た、暫くは、彼の並立して居る奇峯の間で、釣を垂れた、黑鯛、鱸などいくらでも釣れる。友の一人は、岩の間に章魚が頭を出してをるのを見付けて、忽ち生捕にした。船頭は海水に躍り入つて、頻りに鮑を捕りてはあがるので、船中は潑剌たる鮮魚で埋められた。最早釣にも飽いたから、銃獵と出かけやうと、今度は彼の、壯觀極まる巉岸千尺の下を廻つて、船の寄らるゝ岸にあがり、皆諸共に高い山の上に登つた。樹木鬱蒼として荊棘路を遮ぎるといふ有樣である。そこで空砲をヅドンと一つ發

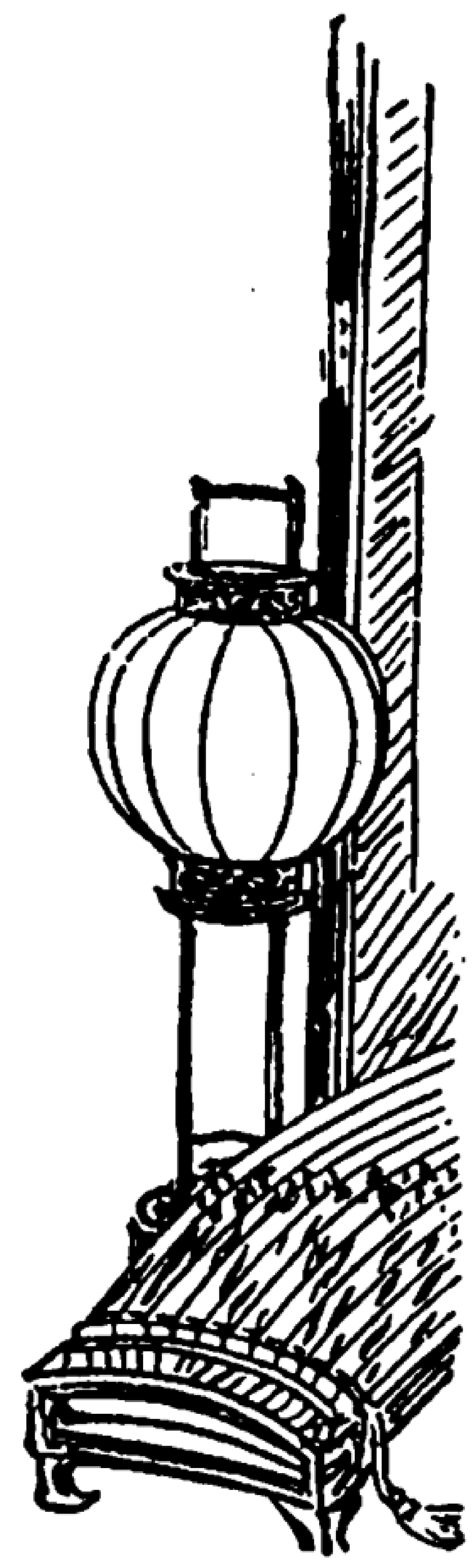
すると、キィ〳〵と云ふ聲が谷を一つ隔てゝ、向ふの山に聞えたので、さては山上にも猿がゐるわいと、手分をして、二人を向ふの山へまはして、二人は木陰に隱れ、筒先を揃へて待つてをる、向ふへ行つた二人の者は、嶮岨を凌いで、遠廻をしながら、猿のゐると思はれるうしろに出て、追ひ初めた、すると猿どもは大に恐れたと見えて、ドサ〳〵と足音しながら、此方へ逃げて來た、スハヤと二人は息を殺して居るとも、知らずして、猿は土手のやうに小高くなつてる向ふに、夥しく集まつた。其の數は五六十も居るらしい。中なる大猿四五疋は、松に手を掛けて、立ち上りながら、その下に、人の居にも氣が付かぬと見え、キョロキョロと向ふを眺めて居る、その貌のいかにも罪もなく愛らしう見えたから、中てるに何の苦もない處だが、どうも討つ氣になれない。友はこんな處で、惻隱の情を出すでないと思つたか、ヅドンうしろから、切つて放ッた。丸は確に命中せり、猿どもは、狼狽へまいことか、キィ〳〵〳〵〳〵と叫びながら、雲を霞と逃げ出した、その樣が甚だおかしい、子猿はキィ〳〵と貌をしからめながら、親猿の脊や、手足に取り付きて、引きずられながら行くのである。ソシテ、ドヤ〳〵と逃げる足音は、恰ど數多の人の足音の變らない、スハしめたといふので、急にそこへ行つて見るに、確に命中したと思つた猿は、影も形もないのみならず、血の一滴も落ちて居られぬ。これは不思議だといふので、あとを追つて見ると、猿どもは人のなかなか歩けないやうに、防禦線を張つてをる、それは荊棘枳殼の類や、その他尖刺のある樹木の枝を集めて、自分等の往來の出來る位に、洞道を造つてをる、その中を出入するから、中は至極綺麗に

あつてゐるが、この一條路のほかは、悉く樹木が茂つてゐて、往來は甚だ困難である。暫くすると、向うへ狩り出しに行つた二人も歸つて來て、諸共に、かの洞道を傳つて、それに添うて追掛けたが、遙かの山の頂に音がしたので、之を慕うて尋ぬるに、亦もやドヤ〳〵と非常な速力をもつて逃げ出した。こゝまで尋ねたが、矢張、血も落ちてゐなければ、猿も仆れてゐない、之によりて見れば、中つたと見えたはひが目で、中らなかつたのであらう、殘念なことをしたなど話してをつたが、ふと見上げた松の梢が少し動いたアラと、思つたからよく〳〵見ると、果して一疋の猿が樹につかまつてゐるのが、松の葉越に見えた、すはこそ、キヤツに相違ないといふので、友の一人は、急ぎ鐵砲を構へながら、一二間かの松にのぼりて、尻のあたりを目がけて散彈を發した、すると上から猿は驀然におりてきた、すは大變と、友は大に恐れ、狼狽て、松の上から鐵砲も投げ捨て、身も辷りおちたのは、一興であつた、定めて猿は、躍りかゝり嚙み付くであらうと思つたに、それどころではない。猿は全く絶息してをるのであつた。余程大きな牝猿で、六七貫目ばかりあるらしい。思ふに猿は頗る團體を重んずるのであるから、一群の全類中に負傷者がある時は、之を及ぶ丈け助くるのである、だから此の半死半生の猿をすら相助けて、逃げた者である、それにしても、血の一滴も落さぬやうに連れて逃げたのは、猿の巧者といふ者は非常である。同類も今は助け果せぬと思つたから、松の梢に忍ばせて行つた者だ、畜類も、こんな處は感心である。

此の如く奇拔で、此の如く壯觀で、此の如く趣味のある勝地を、まだ山口縣下の人すら、余り知ら

ないのは遺憾である。思ふに、此の所の景と云ふ者は、必ず、耶馬溪にも勝つてをる。余は、耶馬溪に遊んで見た後は、青海島の奇勝を呼んで、天下第二と云ふ積りである、從つて、耶馬溪の如きは、第二の青海島とでも、なつてくるかも知れぬ、強ちに、郷國にひかされての過言ではないと、諸君の御承知を願ひたい。之から次號に、同地の人情風俗を紹介しやうと思ふ。

（つゞく）





敎の庭

十月五日兼題

擣衣

天　神戸市南逆瀬川町　中澤とし子

古さとのむかししのぶのすりころも
　あきのつき夜にうつはたがつま

評　言外余情深し。

地　東京市日本橋區通四丁目　牛山素子

ふせいほの軒もるつきもかげさむき
　あきのしもよにころもうつなり

評　ころもうつ音はさらなり、霜夜の月の影さへ、身にしむここちす。

人　大隅國肝屬郡鹿屋村中名　山田よね子

かぜさむき野末のいほに八千ぐさの
　はなぞめごろもたれかうつらん

評　八千草の花そめころも、ことに匂ひふかし。

甲之部

海士人はつき見がてらの手すさびに
いそのとまやにころもうつあり
埼玉　横田秋子

松かぜのおとにまじりてこのゆふべ
うらのとまやにころもうつなり
和歌山　瀬戸えい子

玉がはのさとのあまかせ身にしめて
うつおとさむししづがさごろも
東京　増戸袖子

乙之部

さらぬだにねさめがちなる老の身の
ゆめぢゆるさぬさよきぬたかな
椎野ぬき子

ねさめしてつきもみかてら賤のめか
ふけゆくよはにころもうつらん
椎野薫子

からころも月のひかりもうちそへて
おとさやかなるさらしなのさと
小池芳子

たかためにころもうつらん月きよき
かつらのさとによをふかしつゝ
吹田たけ子

うなひ子か栗打ちひろひかへりゆく
ふもとのさとにころも打つなり
長谷川靜枝子

おときよく流るゝみつにさらしつゝ
ころもうつらんたまかはのさと
中舘やう子

からころもうつはたか妻さよふけて
つちのひゝきのたゆるまもなし
田村種子

みすゝふくとやまの風のさむき夜に
ころもうつなりあきしのゝさと
荒野たに子

さ夜きぬた音のたゆむはかりかねに
たひなるひとやおもひいてけん
戸賀崎治子

さをしかのなくれわひしき山さとに
うちそへてきくとほきぬたかな
山本梓子

まつ風のたえまにひゝく小夜きぬた
いかなるひとかうちすさふらむ
北島操子

秋ふかき夜さむのつゆにぬれ〳〵て
誰かためにうつきぬたなるらむ
北島功子

ふきすさぶまつかぜさむき秋の夜に
ころもしてうつおとぞきこゆる
丸城さをり子

あきかせにおとろかされて賤の女か
うつおとたかしよはのさころも
河村すゑ子

秋ふけてさひしき野邊のむしの音に
ねさめていもやころもうつらむ
鴻巣とし子

たま川のきよきなかれにひゞきあひて
打つやきぬたのおとそすみゆく
吉川なか子

月きよき外やまのさともさ夜ふけて
おともかすかにころもうつなり
福井茂子

打しきるきぬたのおともさえ〳〵て
つきにふけゆくあきしのゝさと
千葉卓子

なかき夜に百たび千たびまきかへし
たゆむまもなくころも打つなり
宮武てる子

吹きわたるしほ風さむくさよふけて
あまのいそやにころもうつなり
當間みすの子

なくしかの聲も身にしむさ夜なかに　今井たい子
ころもうつなるおとそわひしき

ふけわたる月のひかりにしつの女か　關口きせ子
しもをかされてころも打つらん

月きよきあきのよすからをちかたに　金井ゐき子
あはれきぬたのおとそきこゆる

つきよしと歸さわすれてたまかはの　内田とく子
さとのきぬたをきくそうれしき

あきかせのおとも淋しく小夜ふけて　清水千代子
ころもしてうつたまかはのさと

山さとの夜さむしられてうちかはす　佐々小夢子
きぬたのおとそひまないりける

あきの夜のふけゆくれやのさびしきに　金田とみ子
きぬたのおとそきこえきにける

秋の夜のくまなきつきのかけふけて　木村とめ子
ひとりさひしくころも打つなり

あき風におとろかされてあさころも　濱口ころく子
いつこのさともうちしきるらむ

なかき夜にたゆますうます賤の女か　林美保野子
ころもうつこそあはれなりけれ

虫の音のかれゆくあきはさひしさに　赤尾かつ子
あさころも打つたまかはのさと

こほろきのなく音さひしき秋の夜に　三宅いそ子
ころもうつなりかはそへのさと

風の音におとろかれてやよもすから　小川つる子
ころも打つらむたまかはのさと

妻こふるをしかのこえもとたえして　加藤まさ子
しつかきぬたのおとそさひしき

すみわたる月のひかりにをとめこか　國府田はる子
ころもうつらむたまかわのさと

あきかせの音身にしみてさむき夜の　會田まつ子
ふくろもしらすころもうつなり

夕まくれあはれ身にしむむしの音に　菊地かれ子
おとろかされてころもうつらん

なかきよのふくろもしらて賤かめの　今井りう子
ころもうつおといとあはれなり

ふけゆけと絶えすきぬたの音するは　秋岡れつ子
せのためにうつころもなるらむ

あきよのねさめにひゝく槌のおと　松村あさ子
ふゆのいそきにころもうつらん

すきまもる夜風身にしむしばの戸に　大谷淑みれ子
たかためとてかころもうつらむ

ともし火のみゆる宿にやうつならむ　永井しめ子
きぬたのおとのたえすきこゆる

わかそてに露をかけすはからころも　村上操子
うつをはよそにきかましものを

このころはきぬたになれて中なかに　上原のふ子
うちたえし夜はねられさりけり

秋かせの身にしむころはおちこちの　田村多豆子
さとにきぬたのおとそきこゆる

照るつきのかけさへあやにまきそへて　雨森つる子
ころもうつなりあきしのゝさと

あき風のさてもわひしきさよなかに　川野すえ子
予ゆえにはゝのころもうつらむ

ころもうつ妹か手わさのつちの音
さとをへたてゝせこやきくらん　北島松子

きぬ〳〵のあはれも深しからころも
うつおとたかくつきふけにけり　横山芳子

月にうつそのおもかけもおほろけに
みねてさびしき小夜きぬたかな　中島朔子

虫のねにゆめもむすはてあかす夜を
をちのさとにはころもうつなり　戸賀崎久子

おもしろき月をうしろによもすから
ころもうつなりさとのしつの女　荒井満武子

おきわかすしもよをさむみ里の子の
うつやきぬたのたゆむひまなし　大瀧みさを子

賤のめかれぬ夜かされてうつころも
いかなるひとにきせんとすらむ　内田さた子

れさめしてしつかにきけはをち里に
おともさひしきころもうつなり　藤田緑子

ありあけの月かけさむきはつしもを
たれかかされてころもうつらむ　横田音羽子

を鹿鳴くあきのなかよをれもやらて
かなたこなたにころもうつなり　川中子てつ子

さらぬたに老はれられぬこのころに
よすからころもうつはたかつま　白石信子

からころもうつ音さむくなりにけり
くもいをめくろつきをみしまに　山田稲子

手まくらの夢ちへたてゝなとめ子か
ころもしてうつあきしのゝさと　安居みし子

すみわたる月にあはれをそふるかな　安居きやう子
さとをあまたにころもうつおと

秋かせのみにしむよはにしつのめか
ころもうつなるおとそきこゆる　永田ます子

月ふけてうつやきぬたのおとさむし
ふゆをとなりのあきしのゝさと　桝田益子

賤の女か子らのためとてよもすから
わかむらきのころもうつなり　青木たま子

うちしきる槌の音そするさとひとの
わか子のためにいそくころもを　中村磯子

こすゑふく松のあらしのたね〳〵に
さくらにひゝくさ夜きぬたかな　穗積稔子

ひさかたのみそらに月のすめる夜は
きぬたのおとそたかくきこゆる　飯村あき子

すみのほるしもよの月によもしから
いそくきぬたのおとそさひしき　桃田満智子

風さむみふけゆく夜はにしつのめか
いそくきぬたのおとをきくかな　八尾家子

あきの夜のれ覺にきけはをちこちに
たゆむまもなくころもうつなり　岩田春子

月さねてさむさみにしむあきのよに
おとさひしくもころもうつなり　重原波留子

月かけのふくろもしらてうちしきろ
おとも身にしむ小夜きぬたかな　日高かす子

かけきよみぬるも惜しとや秋のよの
ふけゆくつきにころもうつらむ　竹村貞子

日にそへてさむくなるをの浦ひとも
しほやきころも夜たゝうつなり　篠田圓子

かりかれのひゝく夜すから賤の女は　今西綱子
おとさひしくもころもうつなり

露しものあきふけぬらんよもすから　松尾せい子
たちのさとわにころもうつなり

しつのめかなかき夜すからつゆ霜を　岡田美喜子
そてにかされてころもうつらむ

寐さめして聞たひたひに小夜きぬた　永井さい子
うつおとさむくなりまさるかな

きりきりす聞つゝあかすまくらへに　溝口貞子
なくねとゝむる小夜きぬたかな

ころも打おとさひしくもきこゆけり　佐々有隣子
つままちかれのやまのしたいほ

風さむみはきのした葉もうつろひて　徳氷識子
ころもうつなりさとのしつの女

ふく風の身にしむあきの夜もすから　徳永廣子
ころもうつなり木野のやまさと

世のひとの聲しつまりてわきも子か　三木ふさ子
うつはよさむのころもなるらん

吹あるゝかせのおとたにさひしきに　山崎かめよ子
ころもうつなりあしのやのさと

たかさとか聲さいたかくしつのめか　推野鋭子
あきのよさむにころもうつらん

しつのめはさむけき秋のこのころを　推野清子
ひとよもおちすころもうつかな

さよきぬたうつ音するなり我ならて　推野秀子
なかきよあかすひともありけり

しづのめか打やきぬたのおとたかく　竹村竹里子
身にしみわたるあかつきのころ

うちしきるきぬたの音に目さまして　伊勢村花子
きくもさひしきあきの夜はかな

なきしきる虫のこゑさへさひしきに　伊勢村春子
ゆめおとろかすさよきぬたかな

いとゞしく身にしむ風にころもうつ　大坂谷榮子
おとさへあきはものうかりけり

よそにきくきぬたの音もあきの夜は　大坂谷信子
いとゝ身にしむこゝちこそすれ

月きよみしかもねになくさよなかに　鏡山増代子
さひしさそへてうつきぬたかな

さよふけてねさめの里におとつるゝ　武田龜子
きぬたはたひのともとこそなれ

まつ君はおとつれもせて夜もすから　坂本てい子
きぬたのおとをきゝあかしけり

秋かせの身にしみそむるこのゆふへ　福原菖子
あはれたかくも打つきぬたかな

うたゝ寐の我か手まくらに音つれて　諸井くら子
きぬたときくもうれしかりけり

晝の間は田かりうすひきしづの女の　舘脇ます子
くるれはつきにころも打つなり

寐覺するまくらになれてうれしきは　戸塚てつ子
さとことにうつきぬたなりけり

我ためにうつとなけれと小夜きぬた　片山あや子
ねさめてきけはさひしかりけり

野邊になく虫の音しけくなりぬれは　片山あや子
いやうちいそく小夜きぬたかな

あきのよは虫のなく音もさひしきに
　しつかさゝやにころもうつなり　佐藤わき子

小夜ふけてさひしき里にしつのめか
　衣うつこそあはれなりけれ　松山かめ子

まつかせの音もさひしきあきのよは
　をちのさとわにころもうつなり　小野はま子

秋の夜のつきも更けゆく眞夜中に
　あはれきぬたのおとそきこゆる　仁村きみ子

あきの夜のさひしき庭にをとめ子か
　つきを見つゝやころも打つらむ　岡田まち子

さと遠みとふひどやなきゝまかけに
　誰かため夜たゝころもうつらむ　林きみ子

さらぬだにものあはれなる秋の夜に
　まくらへちかくころもうつなり　永井あき子

さらてたにさひしきあきの夕くれに
　ころもうつなりさとのしつの女　柴田のぶ子

絶ゆまなく更け行く夜半におとするは
　しつかふせやのきぬたなるらむ　藤波たま子

ふく風のおともわひしきあきの夜に
　しつこゝろなくころもうつなり　高山みゑ子

さよふけて山路のつゆをわけくれは
　しつかふせやにころも打つなり　田口すみ子

つゆ深きくさはをてらすつきかけに
　いくよかされてころもうつらむ　向山まき子

長き夜をゆめもむすはてしつの女か
　たかために打つころもなゝらむ　中村よつ子

さ夜ふけてかたむく月をなかめつゝ　柏木すゐ子

あきかせの音たにこゝろさひしきに
　ひとりわひしくころもうつなり　沼井あひ子

秋の夜のふくろも知らてあはれたか
　ころもうつこそあはれなりけれ　篠塚たけ子

すみわたる月のひかりをともとして
　ひとりおきゐてころもうつらん　足立幸子

さ夜ふけてころもうつなりしつのめの
　ころもうつなりたまかはのさと　太田のぶ子

松むしの聲もかなしく小夜ふけて
　夜ざむは身にもしみわたるらん　關口きれ子

ほのかにもおとそきこゆるからころも
　たかためにとかころもうつらむ　森脇さゑ子

草まくらひとりぬる夜のあきかせに
　夜ふけて打てとは誰かをしへけん　岩田よれ子

賤の女か秋の夜さむみからころも
　打つおとさむしあさのさころも　杉山君代子

物おもふ夜はことさらにしつかうつ
　うつおとたかしあさちふのやと　近津和子

ふけゆけはおともさひしくあきのよの
　きぬたのおとそあはれ身にしむ　正木たゑ子

虫の音のかれゆくあきのさひしきに
　つきをよすがにころもうつらん　田川みさほ子

小夜ふけてうつ音たかきつちのおと
　あはれかすかに打つころもかな　芳泉ますみ子

よはり行く虫のなく音に一しほの
　寢さめにきくもあはれなりける
　あはれをそふるとほききぬたかな　飯塚まつ子

ひとさとなはなれししつか伏家には　なにおもひつゝころもうつらん　清水てふ子

さびしさもきぬたの音になくさめて　あきは田ぶせのいほもすみよし　吾妻ちか子

ころもうつつちの音さへ小夜ふけて　みにしむあきは駭られさりけり　平尾あさ子

とほくなりちかくきこゑてころもうつ　おとはかせこそはこふなりけれ　川村松子

十月五日兼題

秋

天

浅草區花川戸町十二番地福島方　長谷川靜枝子

花に歌ひしのどけき春も、緑涼しき木蔭に親みし夏も、あなやといふが間に、月日によどみなく、はや、一とせの半は、空しく打過しつ。いつしか、秋とはなりぬ。四つの時の内にて、いともあはれなるは、秋にこそ。秋風吹きそめては、野路のしげみが草も、打しほれ、荻の上葉を渡れるも、いと身にしみ、吹かぬに、桐の葉の、ひら〳〵と、舞くるも、いひしらず、哀れさを覺ゆめり。浪かと見ゆるしの薄の、風に打靡き、或は、女郎花のやさしげなる、さを鹿の、立馴らしけん、糸萩の亂れて、露重げなる風情、哀れ深しや。おどろがもとに、深うこほろぎの打なけるに、そゞろ、庭におりたてば、木の間をもるゝ月影の、さやけさよ。心の奥迄、すみ渡りたる折しも、前をかすめて、雁がねの、袖を連ねて鳴渡る。さと身にしむ風の音はなけれど、桔梗の露を亂したる。池水もゆらぎて、月影千々に砕けつ。誰が爲に、衣うつらん、あはれ、あの音は、よな〳〵聞ゆる賤が砧。あなたの山の麓よりぞ、田の面は、黄金のむしろ、打しきたる。柿の實の赤う、枝も撓む許りなるが、軒のほとりにては、やからうから打集ひ、かたみに、ゆたかなる今年のみのりを、歌ひつゝ、哀れの秋の様をゝ、知らず顔なるめり。野菊の匂へるあたり、つがひ離れし胡蝶の、淋しげなる、彼方此方とさまよひて、里のうなゐに、なとらはれそ。やう〳〵秋も、深うなり行くまゝに、遠近に、錦をりなせるもみぢ葉や。あはれ、きさらぎの花より紅なりと、古へ人の歌ひけんも、理ぞかし。さはれ、秋は、いと空打はれて、夜も長うあれば、あはれ、ことしの半ば、むなしうせしと、おもは

へず、いかで、机の塵うち拂ひ、ともしびになん、したしまでやは。

地

肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

宗良親王、千首の立秋天といふ題に、秋風の身にしむからにながむれば空さへかはる雲のいろかな。暮秋雨の題にては、曇れかし夕の雨にことよせてこよひばかりの秋をとゞめん。と、詠たまひしも、うべなりけりな。文月のはじめより、長月のすゑかけて、庭の萩の、風の音には、心もみだれ日影うつろふ、小野の萩が花は、手折もをしきにはひ、風にのみなびく女郎花、心もつらく、白妙のゆきゝの岡の、花すゝきは、たれまねくらん。さゝかにの糸の葉末にかゝる刈萱は、風にみだれ、藤袴の露は、紫玉のごとく、霧のまがきの、あやしきいろは、朝顔の花なり。在明の月を、まつむしきりぎりす、夕ぐれの雁は、なみだにむせび。谷風のふくまゝに、みねより落るさをしかのこゑ。野風をさむみ、夜もすがら、啼なる鶉。曉の鳴の羽音は、夢路をやぶり、里の擣衣は、霜とおきゐて、ひまなく打かはし、野分の風は、色うすき、みねの葛の葉をふきかへし、かれはてんのちのためにと、植おきし淺ぢにまじる霜しら菊は、山かつが、かきほの紅葉かさねの袖に、にほひあらそひて、秋のあはれをそへぬるも、心さびしくなん。

人

東京淺草區橋場町十　増戸そで子

日にそへて、衣手さむくなり行けば、見るものきくものにつけて、あはれと思ふ心言葉多くぞなり行ける。野末には、よそほひたてるをみなへし、たがぬぎかけしふじばかま、錦おりなす萩の花、露のまゝなる花すゝき、いつれ目出からさるはなく、かゝる時こそ、野守がいほもしのばるゝなれ。かかるけしきを、ひとしほ美しく、はた、ひとしほ、あはれに見する物こそあれ。そは、千草に置けるしら露にこそ。こを、みるひとのこゝろによりていはんに、やむごとなきわたりにて見だまはむには、玉とこそ見られぬらめ。されども、いやしき賤にいたりては、はかなき世をかこちぬらん、さらぬもしげき袖のつゆ、あはれ、いくたびしぼるらん。秋の夜ながに、またしも思はするは、雁なりけり。月くまなくてりわたり、萩のした露さら〳〵しくかゝやくに、くもゐはるかに、雁のひとつらなり

わたるあど、いみじうかあしき物あり。かゝる夜は、去にし昔の忍ばれて、千草におけるしら露あらねど、袖の上は涙の露もしげきぞかし。さま〴〵の夜のありさま思ひめぐらし、ふけ行く月に心うばゝれ、虫の音の、いよゝよはりゆくにおどろき見れば、はや、宵にはあらで、木のはさへねぶるてふ夜半にぞありける。静かなる今よひ思へば、秋ほどあはれに、すが〳〵しきはあらざるべし。

（以下原稿到着順）

篠田圓子

秋の初めになけぬれば今年も半はすぎにけりとは、誰もよく聞き知る唱歌なりけり。まことや、青柳の糸長き春の日は、唯、徒らに、そここゝの花に、あくがれありき、程なく風なつかしき夏ともなりて、已がじゝ名殘惜しげに、ぬぎ更へたる花染衣、さすがに、其のまゝ打捨てもかれつ、いとまみて、ときもし、そゝぎもし、はた、つゞりもせではと思ふ物から、日にそへて暑さ、いやましつるにぞ、つひ〳〵はしたなき身は、それに得堪へて、心ならずも、今日は明日はと、ひき延ばしつる報いは、いかでかのがれはつべき。いつしか、秋めき來たる風の音におどろかされて、あはれ、今年も、既に半過ぎにけるよと、こゝに、初めて、思ひつきたる如く、いそがはしげに、裄裁ちそむる樣、をかしともをかし。

さて、秋とし云へば、足らぬ事なき身なりとも、何となく物かなしきを、況むや、いとしこひしの、たらちねを失ひたる年の秋よ。垣根にすだく虫の聲。さては、落葉の窓うつ音、遠く近くきこゆる砧の音、あはれ誰がためにか、打つらむかしと思へば、いとゞ、秋の露けきを、友にやおくれけむ、親や見失ひけむ、かすかにもるゝ孤雁のこゑ、おのづから涙催されてなむ。さりながら、又、みやびの道に入りて、つら〳〵思ひめぐらせば、秋ばかり、心ゆく時はあらじかし。さきに、悲し淋しと思ひてし事どもは、一つとして歌詠み、文作るよすがとならざるはなく、尚、其の外、山の紅葉狩、其のもみぢに夕日のさす景色などは、春の花にもいやまして、をかしきを、二葉より手をつくせし黄菊白菊の、ことしも、又、庭もせに咲き匂ひたる、いとめでたし。田家にては、秋を最も大切の時とし、秋をすぐさぬうちは、賤の男ら、まこと易き心もあらず、如何にとなれば、若しも野分など吹きて、米麥のみのりあしければ、遂には、國益に妨げあればなりけり。

いかばかりうれしかるらむ賤の男は
けふでき秋のいはひなしつゝ

今西綱子

秋も、まだ、名のみにて、暑さは、夏よりもいみじと思はるゝに、折り〳〵のうつりかはりこそ、げに、しるかりけれ。朝顔の花は、ほそうやせしぼみ、撫子の色あせゆき、綠の色は、かわられど、桐の葉の落つるなど、いとあはれなり。晝は、蜩のまだかしましきに、夕日殊にはなやけなれば、山きは、いとちかうなりて、浮世を離れたる心地せらるゝも、あはれにこそ。琴のしらべかとあやまたるゝ尾の上の松風の音ひゞき、まがきにそひて、さき出でたる萩の花、夜半には、小男鹿のとひもくるらめ。物音しづゞなる庭に、虫の音いと高く、月は、鏡の如くすみて赤し。げに、思ふ所に、身をおきたらましかば、かく、我が心もすみて、世の憂き事を忘れ果てまし。茜さす日も、西山のあなたに落ちて、きこり

の斧の音も、亦やみ、塒もとむる鳥の聲のみ、かまびすしく、時時には、いづこの森よりか、ましらの聲のきこゆるなど、いともちつきの一夜一夜と、やう／＼かげゆきて、影うすき夜半に、ひむがしの山の端を、二ひろ三ひろはなれて、一羽の雁のかげをうつしいでたるさま、秋は夕べとたれかいはざるべきや。の句も思ひ出だされて、心なき身にも、物のあわれはしみわたるなり。

稲原菫子

昨日まで、伊勢地川に螢を狩り、あるは、思ふとち舟をうかべて、涼みせしまに、はや、それもいつしかすぎて、七夕まつりの魂まつりは、いふも更なり、萩の下葉の、色つきそむる秋の始とはなりぬ。なべて、袖のしぐれ、物のあはれを催ほすは、實に、此の時にはあなれど、物まなびするわれらが身には、いともたのしく、心のゆくものなり。されば、文机のちりうち拂ひ、風すゞしき夕窓に、さし入る月を友として、いにしへの忠臣、孝子の文繙かば、心氣おのづからさえて、ふみ分る大道、いとゞ明かに、覺ゆるものなり。なべて、物事をなしとぐるに、最も貴重なる日は、此秋を除きて、いつかはあると、心の駒にむちうちて、一言かくなん。

松尾せい子

軒近き萩の葉音のかわりしより、肌涼しくおぼゆるも、ことわりなりや。木にも草にも、置く露しげくなりて、月の光は澄みわたり、虫の聲さま／＼聞ゆる中に、つゞりさせてふこほろぎの泣音こそ、身にしみてあわれなれ。こがれの色なる田の面には、豐かなる御國の富見えて、農夫の心づくしもしのばるゝよ。おのれ等、務むべき時は來ぬ。ひるの事どもなしはてゝ、しづかなるこの秋の長夜を、燈火にむかひて、文讀み、字習ひ、技をはげみてこそ、夏の間の怠りをつなふべけれ。おのがじゝ務めはげみて、折々は、千草咲く錦の花野に、はらからうちつれ、を鹿鳴く山邊に、へだてぬ友と連れ立ちて、くさ／＼の興を得たらむには、如何に、樂しき秋ならむ。梢も染むる秋の雨、遠里の衣うつ音、よそにのみきくべきか。

椎野秀子

風もほに出ぬさ、いひし、古人の詞も、いつか、きのふにて、此頃は、前栽の萩の上葉に通ふ風、きはたちて、ものさびしく、遣水の影も、やゝ、ひやゝかなる心地すれば、露しげき秋の色、いかに美しかるらむ。父母の君にすゝめて、向島白髭のほとりに、七艸をたづれんと、立出ぬ。吳竹の根岸の里を、北へ山谷にたとりて、玉姫稲荷にもうで、橋場の渡しに便りして、隅田川にこぎいづれは、折しも、日は西に傾むきつゝ、光りを水の面に映し、さながら、こがれをくたきたらんやうなる中を、水上より、さし下す筏のさま、いともの靜に、岸邊に、生茂りたる蘆の、風にそよきて、釣する人の、たね／＼に見ゆるも、をかし。やがて、向島に達しぬれは、白髭の社をめくりて、百花園に入りぬ。門のさま雅やかにして、名高き蜀山人と、詩佛の額は、そゞろにおくゆかしくぞ覺ゆ。園内、萩桔梗女郎花などをはじめ、そのはな、この花と咲みたれて、夕露にひとしほ美しく、その中に、露を命となく、鈴虫、松虫のれもしほらしく、薄の花の、そよふく風になよ／＼と打なびきて、露の玉をぬきとめたるなと、云はんかたなく、心ありけに人招く姿の、いとなつかしく、立ちよれは、白露の袖にこほれて、秋も匂ふはかりに、思はすも、心地よやと聲たかにさけへるも、をかし。なほも、千艸の間を、あちこちとたどり行けば、かたへに、いと風雅なるあつまやあり、奥よりこゝの主とおほゆる人の、あはたゝしく、むかひ出でゝ、いさこなたへあらせ給へとて、みちひきければ、妾も、いたく悦びて、此處にいこ

ひぬ。都のうちながら、山里にある心地して、世のわつらわしさも、しばし忘れたり。やがて茶菓子など持ちきたりて、もてなしぬ。實に、心ずくしのうれしくして、茶吸みかはし、なにくれとかたらひ、更に、時の移りゆくもきつかざりしが、母君におどろかされて、なごり惜くも園内をいて、そこはかとなく隅田堤をたどり行けば、いさ事とはんと、在五中將の詠し給へるに、ちなめる名高き言問のほとりに至りぬ。ほどなく十三夜の月の、はなやかにさし昇りて、川の面にてり輝き、待乳の山のかすめる、岸の高樓にあちこちと燈をかゝげたる、得がたきながめなるに、思はずもこゝにたゝずみて、しばし、あなたこなたをなかしつる程に、ふと、こしかた行末の事のしのばるゝも、秋のならひにや。過ぎつる彌生の春の頃、妾が親しき友とち打つれて、此處らあたり、櫻のもとに、あかぬ一日をくらしたるは、きのふのやふにおもはるゝに、一夜の嵐に散りはてゝは、昔のおもかげもなく、さしも、都人のところせまきまでつどひて、遊ひ狂ひたらんも、今に夢の如く、用ある人のほかは、打過ぐるものだになきは、はかなきものは、花の盛りにこそと、そゞろ昔の忍ばれて、思はずも、涙の催したるに、櫻の葉の、一ひら二ひら、袖に落かゝるも、あわれ深し。ふと、心付きながむれは、秋の夜中の空高く、月も、いよ／＼澄みわたりて、あたりの物靜かなるに、小梅のあたり、賤がうつ砧の音のみ、いと高し。いさかへらんと、母君にうながされて、淺草を經て、家路につきぬ。

福島なを子

春は、花さきいでゝ、四方の木つゑもけしきづき、霞は山のふもとにつゞきて、軒端に、木づたひなく、鶯のこゑもうらゝかに、落る花は春をさそひ顔に、波の上に散りしけり。夏の頃には、暗を照らして、飛ぶほたる、木々の木梢に、二つ三つ、ひかりを放ち、飛ぶほしの、あま下るかと眺むれば、暗路てらすほたるの火の、文よむまどに、飛び來りなどもありしが、今は、早や秋冷の候とはなりぬ。草むらの露、朝毎に、すげく成り行けば、露をよすがに、鳴く蟲の音、夜毎にまして、空飛ぶ雁の羽かぜも、身にしむ心地す。月さし出ぬれば、まばゆき程に、こぎまはす舟の、梶に立騒ぐ飛ぶ鳥のけしき、物ごとに、面白きこと限りなし。日も、稍や、短かくなり行けば、空飛ぶ雁の、一つら二つら、袖をつられて、鳴き渡るかと見る間に、空の色かはりて、あわたゞしき風の、大きなる、木の枝など折るは、いといみじ。山を見れば、織る人なき、錦かとおぼゆるばかり、紅葉の、一ひら三ひら、風のまに／＼散り落るを、枝近くて見るも、あわれになつかしく、庭の垣根に、生ふるひともと菊の、蘭の花に、おくれたる風情、花なき頃なれば、いとゞ、めでまさりぬべし。小萩の、夏におくれて、咲き出でたるも、あわれなり。栗も、早や、おつべし。夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、雨の遠をやみに、かすかなる聲して、枕邊近く鳴きよるもあわれなり。今宵の雨に、木々も、染めなん心地して、物事に心を痛ましむ。野邊の遊びの、いと床しく、秋の哀れ、身にしむ心地になん覺ゆ。かゝる、けわひをば、ゑにかくとも、及びがたかるべし。

中村いそ子

春はたゞ、花の一重に咲くばかり、もののあはれは秋ぞまされる。と詠じ給ひしも、うべなるかな。たゞ、秋とし言へば、人皆の、あはれてふ事ぞ、知らるゝ。折ふしのながめのうちにてもいとゞ、ことかはりて、同じ野べには、生ひ出でながら、八千草は咲きにほふ、花のすがたも、一しほ、みやび心もて、ゆかしうこそあらめ。白つゆの、しげきやどりに、いとも、虫の音の、きそひゆくけはひ、ゐも言はず、をかし。ことに、秋月は、光り

たゆけく、實に、遠き世の人も、しのばるゝこゝちす。つぎ〳〵に、夜寒の風の、木々の葉、さそひゆくに、虫の音の、かれ〳〵に、なりゆくなど、身にすみて、わびしさはまされり。あはれ、世の人々の、心によりて、あるは春、あるは、秋と言ふめれど、それはおのづと、心うきたちて、にぎわしく、これは、古へより、ことに、多くの人々の、歌、文に詠ぜられつゝ、皆、とりどり〳〵に、わびしうぞある、實に、ひとゝせのうちにても、言ひ知らず、身にしみて、あはれなるには、秋こそあらめ。

枡田益子

月ごとにと、のらせ給ひし、望の夜は、更らなり。三日月の影より、有明の入るさの山に、さやけき、光たゝへて、清き汀に、天そゝる高嶺に、玉しきみてれば、八千草の、玉野の露まで、めではやさぬはなし。はた、宇多のみかどの、またの月、十餘り三日の夜の、ことなるをしも、中の秋に、つぎなん物と、見そなはし給ひしより、久方の雲の上より、天さかる鄙のきはみにいたるまで、めであへりしを、尊き御國ぶりは、かた斗りとなり、明皇、貴妃の、ふることを、偲ふにや。ことさやぐ、唐ら國の、手ぶりに、なづみぬるぞ口惜しき。いつはあれど秋の夜は、咲きほこれる、花野の露。なきゝほへる、垣つの虫、あはれならざるはなし。はた時しりかほに、ゑみほころぶる、まがきの菊の、下水を結びては、ちとせの齢をのばへ、露をさゝへしきせ綿に、老をかくし、立田姫の織りなす、木々の梢は、紅のとばり、青地のにしきと見ねて、とり〳〵、あはれおほかゝなれば、菊野の春や、いかでかはと、青きをおきて、もみづを、とりてぞしぬふと、玉のの給ひしも、げに、うべなりけりと。此ごろの空のけしきよ。あはれ、山ぶみも、せまほしうなん。

なつかしき夢野の春も紅葉する

秋のにしきに立ち及はめや
菊の香の薫りも深く秋ふけて
あはれさしそふ後の夜の月

大瀧みさを子

そよ〳〵と、ふく風の、萩の葉に、音づれそめてより、見るもの、きくものにつけ、いづれか、哀にかなしからぬはなきに、中にも、むぐらにしげる、草むらにすだく虫の音の、ゆうべ〳〵に、ほそりゆくこそ、露けき袖の、いとゞ、ぬれまさる心地してなん。まいて、月あかき夜など、ほろ〳〵とちる、眞萩が露の、幾度か、おきかわりけん、つらぬきとめぬ玉かと見るまで、きらめきて、けうらなるが、さや〳〵と、吹くとしもなき風に、ゆらめきたる、いひしらす、哀れに、物かなしうなん。

横山芳子

土焦げ、砂燒くが如き、炎暑も、いつしか、秋氣滿ちて、燈下、親むべき好時節とはなりぬ。怠惰、おく能はざりし身心、共に、壯快を覺ゆ。窓外には、草葉、色づきそめて、松虫、きり〳〵すの音も、聞ゆなる。あはれ、秋立つ、今日よりは、曉の虫の、それならで、朝まだきより、己が所業に、いそしみつゝ、夕月影の、清きあたりに、學の道をたどらざらめや。

北島功子

いつこもおなじといひ。物の哀れをとりあつめたるなど。詠みいでられけむ。實にこそ。秋は、昔より、悲しきものゝ、一つには、かぞへられたるなりけり。きのふのみどりは、けふの夢とや。草も木も、おほかたは、枝葉、黄ばみ落ちて、きり〳〵すの夜毎、やう〳〵に、枯れがれなる音をしぼりつゝ、淺茅が宿の、夜半のつれ〳〵には、はるけくも、すぎにし人の上をしのびつ。はては、おぼつかなき、已が身の行末など、心、千々に亂るれば、

悲しみ、限りもなく、打ちこたれてなん。さはいへ、秋は、照る日の光　又、親しむべく、月すめる夕、氣清らかなる朝、露も匂ひ、千草も笑ふ、おもしろの、ながめはあるべく、まして、心地よき、すゞ風のおとなれひには、人の心も、おのづから、趣を高からしむるなり。おもへは、これぞ、まことの、我が、淸秋の姿とは、いふべけんかな。

大谷津　みれ子

いつしかと、秋風の音づれしより、軒の風鈴の打すてられ、世は、やう〳〵、淋しうなりぬ。木の葉の、ゆふべもまたず、哀果なく散りゆく、あるは、吹きすさぶ野分に、千草の音枯れ〴〵なる、あるは、夜寒の砧の、うら寂しさなど、思無き身も、そゞろに、悲しかるを、まいて、長き夜すがら、思ある身の、思ひめぐらせば、實に、妾程、うれたく、幸なき者は、あらじかし。父君には、妾の、未だ、幼き時より、海山隔りたる所に、おはしまし、親しう、傍に侍りて、事へ奉ることも、かなはず、朝な夕なに、只、恙なく、まさきくあれかしと、いのるのみ。友垣の兩親を見侍れば、先づ、我父君の忍び出られて、かたへにまさば、かくしてんなど、雨の朝、風の夕にも、思はざる日とてはなきを、あはれ、み空ゆく雁よ、かきくらしこ思ひ亂るゝ、我心の片端だに、傳へてよ。憂世とは、實にうべにそ。妾が、幸なきは、只、是のみにはあらじかし。姉君、弟には、桐の一葉と諸共に、先立たれ、世に云ふなる一子となりぬれば、諸人の、なれは一人子故、幸なる身よと云ひ玉はれと、あはれ、何しかも幸あるべき、そも、世に、はらから無き程悲しきはあらじ、つま琴かなでては、姉君まさば、共にうたひ、共に樂しまんを、勇しうよそほひて、遠足にゆく、男の子等を見れば、あはれ、我弟も、世にあらば、彼の如く行きてんを、あはれ、悲しきかも、うれたきかも、長き夜すがら、思ひあかせば、悲しさに、思ひは、いよゝ亂れに亂れ、白露ならぬ涙の露に、枕もしとゞにぬれぬ。あゝ、我ながら云ひ甲斐なし、世をも人をも恨みじ、これ、皆、定りたる運命にこそあらめ。いでや、限なき月にても眺めんと、窓をし開けば、さやかにてり渡る月に、又もや、時雨の誘ひ來て、あはれ、この月を、父君には、いかに見たまへる、一家團欒してゐでなば、其の樂みや、はた、如何にと、限なき月も、中々に、悲しきよすがと成るこそ恨めしけれ。見る物、聞くものにつき、淋しさのみまさり、目は、いよゝさえ、心は、いよゝすみ渡りて、尾の上の鹿のつまこふこゑいと哀なり。

芳泉　ますみ子

秋のはじめになりぬればにやあらん、荻の下風も、秋涼しく、まがきにそひたる朝顏も、花やゝほそり、撫子も色あせ、あれ庭の、草葉にすだく虫の音など、見るもの、聞くもの、あはれならさるざるはなし。

浮世を遠くのがれたる菴に、身をおきたらましかば、心も、いとうすみて、世にうき事も忘れなむ。游さす日も、西山にかたぶきたるほどに、きこりの斧の音も、やみ、塒をもとむる鳥の聲かまびしく、又、いづこの森なるらん、ましらの聲のひゞくも、こよなく寂し。日もいつしかくれ、あたり物靜かなるは、夜更しなるべし。月は、ひとり空にすみわたりて、窓をてらし、虫の音は、いよ〳〵高し。燈火あかしくて、文机にむかひ居たるが、ふと、こしかた行く末の事ども、思ひ出でぬ。さて、われ學に志し、故郷を出でしより、はや、三年の春秋をすごしつるを、今このまゝに、まのあたり、我身の上を思へば、何のしいたしたる事も、なくいたづらに年月をおくりなば、頭に、霜おく年になりぬらん。かくては、いつ問に、父をなぐさめ、母をいたわらむ。今宵も、母は、さため

し、我身の上を安じ給ふらむ、父も、虫の鳴く背にさそわれて、我身を思すらん。思へば、父母の膝下をはなれ、朝夕の勤もせで、旅にさまようは、かへすぐくやしなど、思ひいでられて、いとど、わびしき折柄、何地さして行くらむ、かりの一つら泣きわたるなど、いかで、あはれならざらむ、まして、山近き住居ならましかば、つまこふ鹿の聲、あるは、賤の女が、衣うつ音の、遠く近く聞ゆるなど、心なき身にも、物あはれはしみ渡るらむ。

清水てふ子

秋風身にしみ、肌身、やうく涼しくなる程に、萩にやどれる白露も、いやしげく、月の光に、かゞやき、すすきは、つとめて冬をまねき、苅萱の、しどろに咲きいる有様、あはれにて、まがきにのこる朝がほは、まだひぬ露を命とたのみ、夏のかしがましき虫の聲は、いづくにや、早や、今は、淋しき聲にて、砌にすだき、衰へゆく草草と共に、恨みを帯ぶる風情、實に、一入の淋しさを増せり。かゝる中にも、園の楓は、如何あらんと思ひしに、錦をそむにばあられども、赤と青との入り交り、少しは、興ありて、ゆかし。學びの窓は、秋月さへ入りて、文よみ至る時は、早や、寺々の、初夜の鐘もおさまりて、物静かなるに、人里はなれし賤が家には、はるかに、きこゆる砧のひゞきも、きれぐくなり。實に、浮世の外にやとあやしまる。かゝる中にも、我身を考ふれば、去年の秋より今に至るまで、日の本の、學びの庭にたどりいで、ひたすら物學びする身の、幸こそ限りなけれ。いで、是よりは、一入はげみて、業を終へ、秋の如き、物しづかなる人になりなんこそあらまほしけれ。

杉山君代子

昨日までめでつる花は、過ぎつる名殘ときゑて、吹く風さむく身にしみ木々の梢も、紅にそみ、そこも、せはきばかり落葉して、あたりわさびしき秋は来りぬ。古より秋は、いとさびしく、あれなるものとして、云ひつたへつるが、實に、高根にすめる月を見ては、そゞろに、古のことのしのばれて、或は、古郷の夢思ひつゞけ、小夜風の、はた寒さに驚き、心とりなほすことも、しばくなりける。鈴虫、松虫、とりぐくに、露けき草葉にやどり、又、一しほのあはれをそへたり。秋とし云へば、おしなべてあはれなれ。さはあれ、吾等のためには、いとも、よろこばしき事こそ侍れ、これぞ、農夫が、力によりて成りたる田畑のみり、ある頃なればなりける、都にありては、なかくなれど、半道ほど行きぬれば、田畑まじはり、田には、さながら、黄色なる敷物敷きつめたる様にて、畑には、そばの花さき、たてるかゝしも、年なる秋をよろこぶに似たり。日もおひくかたむけば、賤の男の、家路につかむとて、道をいそぎ、やがて賤が家よりもれくる燈火に、何方ともなく、きぬた打つをとのずるなど取集め、なかしきは秋なりけり。

岩田米子

望月のたらはぬ事なき大御代に生れあひて、歳も物思ひなき身にこそ、秋のながめは、殊に、たのしくもなかしくも、又、あわれにもしぼゆるものにぞありけれ。桐の一葉のおのづから、梢はなれしより、やゝ秋の日數へて、漸の糸を經緯に、機織虫やおり出しけん。野べは、いつしか、ことくく錦となり、立ちこめたる朝霧の、むらくと晴れ行くまゝに、萩の花つま、女郎花など、かさしの玉のつゆに亂たる、朝かほをだにつくろはて、みにありて、たのしみさへあるに、月あからに照り渡る夕に、鈴虫のねもころに、人まつ虫の鳴なるも、いとなつかしうおぼゆる折しも、誰か玉章をやけてきつらむ、初かりかれの、遠山のはに音づる、など、田舎の秋をば、都の人に見せまほしうなん。

栖原まつ子

もの〻のあわれは秋こそまされと、げに、さることにて、庭を流る〻やり水の音、軒端をはらう木枯の音すら、秋は、一しほ身にしみて、あはれになんおぼゆる。あるは、秋の夜に、ひとりともしびかきたて〻、文机ひきよせ、文の林をたどり行くにひろすら秋は、何事にまれ、物あはれなる心地するに、ましてや、ふけゆくにつれ、あはれにものかなしく、たゞ、千艸の露にやとれる月影、夜寒をさわびてなく虫の音のみきこゆ、かかる時こそと、我れとわが心を勵して、文の林をたより行くに、夜ふけたること〻て、四方は、いよ〳〵靜かに、心も、おのづと澄みわたりぬ。か〻る折しも、何處の賤の女が、手業になれるにや、砧の音の風のたよりに、遠く近きこゆるなど、一きは、秋のあわれを增す心地す。

柏木すゑ子

春のけしきとは樣變りて、物さびしく、一しほ見どころ多きは、げに、秋のながめになん。初秋風衣す〻しく、遠き山ざとには、白玉やどす朝の樣など、何にかはたとへん、はた、夕には、夕の名殘、山のはに殘りて、寺々のかねの音のさびしく、心なき身にもあはれを覺ゆるぞかし。やう〳〵、秋もふかくなりぬれば、吹く風だに身にしむに、ましてや、月清き夜な〳〵、雲井になのるかりかれ、下には、野べの草分けて、あけれふかき虫のこゑ聞ゆるにぞ、こしかた行末のあらまし、遠くへだ〻れる友の上の事などしのばれて、いとわびしまた、四方山に、にしき織なせし紅葉の色にもうつろいて、落葉にちりしく庭の面に、ゆかしく匂ふ白菊の、花にやとれる操のたのにしくぞおぼゆなる。げに〳〵、古よりめてはやせし秋の風情を見れば、如何に情なき人とても、おのづから、物のあはれを知る時にこそ。

鷲山かゑ子

よものけしき變りなく軒端を、ふきつたふ風のおとさへ、さすがに身にしみて、秋を告ぐるにやあらん。朝な〳〵、しげくなりゆく草葉の白露、萩の下葉にうろほひて、ゆかしくにほふ、あはれなり。よひすこしすぐる頃より、月あかくすみわたりて、三ッ四ッ二ッと紅葉のちりゆくに、小男鹿の聲のみに耳を澄して、しはし風月のさゐなきに、いとうらめしく、はた、いとゞ故鄕の事しのばれて、空渡り來る雁がねの消息を待ちけるに、折しも、松風にかよふ聲の音も、いとあはれに、夜もやう〳〵ふけぬれば、何所の誰が業ならん、衣うつ音のかなしさに、千々に物こそしのばれてうら淋しく覺ゆる物から、ともしび暗うなして、褥につきぬ。夜も、いたく更け渡りし、物から、先きつほどまで、かしがましかりし鈴虫の音も、いと細うなりて、物のかなしさも、一しほなるま〻に、あはれ、一年のはかなさをしのばれてなん。春のあした秋の夕の、たのしさくるしさも、昨日ど過ぎ、今日と暮らしぬれば、年月のよどみなくなが〻る〻と〻もに、あはれ、このま〻にて、苔の下にくちはてんこそいかにくちをしき極みならめ。いかで〳〵。秋の蛩さと等しく、いつかは、さかゐゆく御代にあはざらん。勉めよばげめよ、我が親しき友君よ。

柴田のぶ子

雁がそよ〳〵と吹きくる風も、なんとなう身にしむ秋の夕暮に、いづこよれの二ッ三ッ泣き渡る聲、如何にもあはれなるに、いづこよりとも知らず、遠く近く砧の音の、松風にひゞきて聞ゆるなど、泣きなか〳〵に、あはれなり。七草千草咲き亂れたる野邊には、泣きしきる虫の音、誰かあはれと聞ざらん。君子の風情ありとて、めであふがる〻菊花、時を得顏に咲き匂へるに、くまなく照らす月影のさしそひたる、春のながめにもまして、あはれゆかしくぞ見

ゆる。實に、秋は、物のあはれを知るとかや。殊に、遠く故山をはなれて、他郷に、物淋びしつゝある身には、ひとしほかなしう感じられぬ。あなあはれ。

小野はま子

秋は、四季のうちにて、いとさびしく、物あはれなる時節なり。春とはことなりて、見るものきくもの、皆、あはれなり。野邊を見渡せば、千草は、おひ／＼かれはてゝ、すがたをかくし、月は、物思はしげに、さびしうひかりをはなちける有樣などは、じつに、あはれなり。されば、ふるさとをしたふ心も出でゝ、涙のかわく時もなし。あゝかなしき事のみ多きは秋なり。

向山まき子

秋は夕ぐれ、入日はなかやに、かりなど打連りて、とび行くさま、父母こひしうてにや。いとあはれなり。又、垣に殘る朝がをも、いつしか黄色をおび、そよ吹く秋風に誘はれて、とび散るなど、心もみだるゝばかりなり。まして、夜に入りて、さやけき月になき明す、松虫の聲も、何となく物うき心地して、さびしさいやまさりけり。げに、秋は、勉强の好時節とかや、吾にも、此の松虫におとらず、寸時の間も、學びの道をたどり行かむと、淋しきことも君ひ知られずなん。

田口すみ子

ふみ分けて、こし跡だにもなき庭の萩原、ことゝふものは、風のみにて、いとゞ身にしみつゝ、いろみはゆ心は、木の葉とともに、うつろひゆく、秋の夜のさびしさは、今さらまつとはなきものから、打しほれたる末の、露のちうより、心ぼそうなき出たる松虫もたれをかととへは、人わろく涙のこぼるゝばかりになん。

今井たい子

あふきの風にのみたよりし夏のあつさも、いつかたへかさりて、松ふく風の音だに、いと、物さびしくおぼゆる秋とはなりぬ。秋の野に、七草千草のさきにほへる樣も、長閑なる春のけしきにもまさりて、いとゆかしくおほゆ。その中にも、女郎花のなまめかしき風情なるは、いとおかし。秋とは名をきゝても、いとものさびしくおほゆるを、ましてや、夜もすから、奥山になく鹿のこゑ、はた、かつきかけになく虫の音も、あはれなり。さて、秋も最中となりぬれば、明かにさしのぼる月の、くまなくてり渡りて、尚きいやしきけじめなく、めではやすめる滿月の、今宵此月こそは、神代よりかはる事なく、世のあらむかきりは、かくさし出づと思へは、おのづから、古昔の事どもおもひやられていとめでたし。かくて、夜も半すきぬれば、木々の梢は、あかばとかはり、そが中にも、かへでの紅葉せしは一しほにて、見ごとなり。秋もやう／＼ふけぬれば、花はいふべきにもあらず、紅葉もいつかは霜かれとなりて、いと見くるしき樣になりたるに、獨りきくのみ、百花におくれてにほひ出で、霜雪にもおちずして、巳がみさをゝ全ふせるは、いとも目出度事になむ。

正木たね子

夏のけわひの立つまゝに、又、おく露の深きにはあらざれど、月日の小車は、流るゝ水よりも早く、去る頃までは、殘暑たゑかたかりしも、いつしか秋風そよふきて、桐の一葉はら／＼とおちるなど、實に、秋のしるしにて、野には、桔梗苅萱女郎花、われをかちに咲きみだるゝもをかし。秋は、いと人の心も淋しく、おのづから、物の哀れを感ずる頃しも、何とのう時候和らかに、學びの道をはげむ時になむ。いざゝらば、今日よりは、なほ學の庭にわけ入らん。實に、光陰はおしむべき事にこそ。

中村せつ子

秋とし云へば、誰かあはれをもよほさざらん。春は、吹く風さへ

いと靜かなれど、秋は、荒〳〵しゆう身にしみぬ。げに、春のゝどけき景色とはことかわり、梢の木葉落ちみだれ、野邊の千草は風になびき、さやけくすめる月の夜に、遠くきぬたの音のきこゆるなど、見る物きく物、皆、あはれをそふるならん。春は、野山のけしきにあくがれて、文机は、おこたりがちなれば、ものゝ文などひもとくには、秋ばかりよき時ぞなし。

林　きみ子

四季のうち、秋ほど、もの淋しく、あはれなるはなし。吹き來る風は、身にしみ渡り、降來る時雨は、あわたゞしく、千ぐさの色も、いと、あはれなりや。

歸り行く雁の聲、草の根に、夜寒をつげて、絶ゆまなく、かなしみすだく虫の音、遠ちかたにうつ砧の音などを聞けば、重なれるくもの、古里を思ひ出し、照り渡る月をながむれば、なき人のこともゞも思ひ出らる。又、寐覺の床に、遠く、鹿のこゑをきゝ、近くは、松吹くかぜに、木の葉ちり、柴の戸扉を、音のふるなとを聞けば、心なき身にも、いとゞ、哀ぞ催さる。あら、物うきは、秋にこそ。あゝ、哀れなるは、秋にこそ。

依田くに子

過ぎ行く駒の、足がき早く、早や、物淋しき秋とはなれり。秋ほど、哀に淋しきものは、あらじかし。雲井を渡る雁の音、いと哀れに、庭の千草は、かれしぼみ、かきねにすだく、虫の音の、いと、あはれに思はすれば、なんとなう、人の心も、沈みがちとはなれり。夜に入ては、淋しさいとまさりて、人々もひろのつかれにや、早く、戸をとぢて、臥どに付きぬれば、只、水音のみ聞いて、何如にも淋しうなん。或日、淋しき心ちも、忘れもやらんと、野べに、そゝろ歩きしつゝ、眺むれば、昨日迄、緑の色、深かりし木々の梢は、いつしか、紅色とかはりてなん。

たれかは、此れを賞せざらんや。中に、たゞ獨り、われのみは、青々として、緑の色かへざる操のほど見れば、我ながら、はづかしき心ちしてなん。又、我身の、をろかさを思出せば、かなしうなん。哀に、かなしき心ちするは、かよはき、女の心にやあらんかと、我から心とりなをして、四方を眺むれば、きばみたる稻ははや苅り、ほをれてけり。我國は、水ほの國とは云ながら、本年も、ひではいて、ほに出で、畑の蕎麥、いと、みのりぬれば、御國の富と思へば、いとうれし。かくあるも、皆、君の、めぐみなれば、かゝるたつとき、月日を、たゞ、すべもなく、いたづらに、日を送ること、心なき虫にも及ばぬど、いと、口惜けれ。

松澤まつ子

野山の木の葉は、いつしか、錦とかはり、身にしむ風の、吹くまに〳〵、幾葉ともなく、さそはれ行く、いみじう、あはれなり。黄ばみたる稻田、蕎麥畠の、花の白き、いづれ、あはれに、見ゆるものゆゑ、御國の富を、思ひては、いとゞ、嬉しくおぼゆになん。咲きほこりたる、千草の花も、やう〳〵、おとろへはてたるに、獨り、菊のみ、秋知りがほに、匂ひゆかしく、咲き出でたる、さては、女郎花の、なよやかに、桔梗の、やさしき、たれかはあはれに、なづかしと、思はざらんや。鳴き渡るかりがね、かすかに、すだく虫の音も、ねられぬ夜はの、枕上には、わきて、あはれに聞へ、涙に、まくらひたさるゝは、かよはき女の、心からのみにもあらじかし。





樂園

谷中に遊ぶ

秋風庵

過ぎつる年、初秋風の吹き初めて、庭の荻原萩が花、亂がちなる頃、我ひとり、過ぎにし人々を弔はんとて、谷中の里に遊べることありき。杉の木立の小暗きに、啼く鳥の音も幽かにて、都近き所ともおもはえず、こゝは、名だたる人々の奥津城も、多く手入も行き届きて、いと清らかなれば、生ひ茂げれる薄をわけ、落ち積る木の葉をかきわけて苔に埋もたれる碑を尋ねるなどにはあらず、されども、北邙山上訪ふ人まれにして、唯、松柏の聲をきくのみ、何處ともいはずわけ入りて彫りたる文どもよみてゆくに、見も聞きも知らぬ、人のみ多かれば何となくあはれに覺えて、中には、此の人にして今の世に在りせば、かゝる事をも聞かばや、此事をや問はまし、或はその、門をも敲きて、志の程をも告げなむものをなど、そゞろに思ひ出だされて、涙止めがたし。

あはれ、此處に眠りて、長しなへに覺めざる人々の中には、あるは、才あり學ありて、人にも知られ世にも惜まれし身の、年若くしてみかりぬるもあり。あるは、白刄の下に、刑場の露と消え、あるは、瘴癘にかゝりて、異域の鬼となる、いづれかあはれなるざるべき。そが中にも、何がしてとかや、年若くして、醫科大學に學びの業を修へ、外つ國に遊びて、博士の名をも得、めでたく御國にかへりて、いでや其の術を施さんとせしに、忽ちに、

肺患にかゝりて、二十の上を二つ三つといふに、俄に、朝の露、夕の烟と消えけるなどいふ。人の病を癒す術にはいたれる身の、己が死を救ふによしなく、可惜學と術とを身にそへて、空しくこゝに埋もれにしことの悲しさよ。

そが中にも、葎生のいやしき宿に生いたちて、浮世の波にたゞよひし身のはては、學成り功遂げて高き位貴き官に昇り、豐かに、天命を終へて、數多の人々に送られてこゝに葬られて、今も、尚、朝夕に、香花の絶えぬ人もあり。

また、世にありし時は、互に、敵となり仇となりて、爭ひきそひし人々も、今は、怨も憤りも打忘れて、靜かに、同じ木蔭に籬をへだて隣りせるもあり。黄泉の下にては、浮世の昔を語らひて、笑やしぬらんと覺えてあはれなり。

かく見もてゆくに、詩歌俳句などの刻まれたるあり、その人々の生前の嗜もしのばれて、いとあはれなり。そが中に、百年は誰も生きたし花に風といふは、直鏡とかやいふ人の句にして、攝州道中の作とて、一詩を記るせるは、德山某の碑あり。其詩にいふ。一枝湘管又黄昏、腸斷春風浦上村、餘恨于今消不得、綠波芳草吊王孫。

一壇小高き處に、年ふりたる樹木の十はかり茂れる中に、いと大きなる自然石に、井上正鐵大人之墓としるせるあり。こは、御禊教祖として、數多の人々に尊崇せらるゝ神道家にして、嘗て、伊豆の島に流されて、荒磯の沖の小島に釣たれて、神世のまゝの秋の夕暮の歌を詠せし人なり。おのれそが履歴を詳しく知りにければ、ゆかしく覺えて墓前にぬかづやきぬ。それより佐藤尚中、小中村清矩、坂谷朗盧など、諸先輩の碑を拜しつゝ、雲井龍雄ぬしの墓表に詣れば、磨りとる人の多かり

きと見えて、文字も半ば消えなんとせり。廻りくて、馬場辰猪君の墓に詣る、無名の施主が立てたりといふ小碑は、そが前に立ちてあり。君の世を去りたまひしは齢僅かに三十九、稀有の雄才を抱きながら、轗軻不遇、志を得ずして逝かれしことの悲しさよ。君が友なる東海散士が祭文に曰く、

日本奇傑の名士、辰猪馬場君は米國費府の大學病院に卒す、嗚呼、哀哉、聞く、蘭は芳を以摧け、玉は貞を以て折れ、物は堅芳を忌み、人は明潔を諱むと、君の如き峯猛嚴肅節を砥き道を直し、辭を正し傑操明達、困て彌堅く彼の松柏の霜を抱き、雪を負ふが如く、凋まずして、而して、折るもの非か、と、又曰く君、幼より、志節を負ひ、氣高く、志遠く研磨砥礪、學識深遠、舌鋒火の燃ゆるが如く、人敢て其鋒に嬰るなし、君、此有爲の利器を懷抱し、未だ、其鋭利を試みず、中年にして冥然世を辭す、嗚呼哀哉、君、高潔自ら持し、危に在て撓まず、貧に迫て憂ひす、家に妻子なく、居に僕童なく、古の烈士と雖も過ぐる能はずと、

以て、君の人となりを知るべし。聞く、米國前大統領グランド氏、嘗て、我國に遊び、ことの序に外務の官吏に問ふて曰く、馬場辰猪君は近頃、何をなしつゝありやと、時に、省中君の消息を知れるものなし、漸くにして、神田の下宿屋樓上に、起居せるを聞きて、其の趣を告げゝれば、氏は驚きて、貴國はかの、人を要せぬ迄に進歩したるかと、いとも不審の顔色なりきといふ。かゝることとも今更の如く思ひいでられて、打ち歎かるゝに、いつしか來島恒喜氏の墓前に來りぬ。弔らふ人の

在りつるにや、線香の煙かすかに昇れり、折しも、羽織袴をつけたる年若き四人の書生體の人出で來りて、やゝ暫し碑前にぬかつきけるが、我は何心なく四五間も行きすぎつるに、忽ち轟然たる音しつれは、驚きて見返へれば、かの人々は打ゑみつゝ、さゝやき居たりさては恒喜の氣節を慕ひて、こゝを吊ひ、手向けの爆烈藥を投せしならんと思ひしりぬ。世には、かゝる人もあるものよとながむるうちにかの人々は、いづちゆきけむ木立にかくれて見えずなりぬ。

折しも、群れ鳥梢になきて、寺の鐘、入相を告げゝれば、今はとて家路に向ひけり。

都を出でにしより、はや二年三年になりぬれど、今、尙、其の折からの忍ばるれば、思ひいづるまゝにかくはしるしぬ。明治三十四年八月某の日

河内八尾にて。

飛鳥川（上）

鸚鵡女史

妾、此の家へ、嫁ぎしより算ふれば、早や、八年になりぬ。身體も、いと健かなるに、如何なる故にや、子といふもの更になければ、良人は、わけくれ、此の事を憂ひ玉ひて、誰は、最早三人をまふけたり、彼は、四人の子を擧げたり、いかなれば、予は、かく幸なきことよと、のたまふ事のいとつらく、かの七去の戒もあれば、さすがに胸安からで、さらば、心優しく、健かなる女を召仕ひ玉ひなば、或は、獲玉ふ事もあらむと、いへば、否、予は、世の紳士、紳商てふものに異なり、苟も、身、敎育を以て自ら任ずる者、いかで、さる賤しき者を近づけむやと、のたまふに、尙更、深く罪獲たる心地して、是のみ、いと憂き事に思ひき。

一日、妾を媒せし人の來りて、汝も知れる某は、數多の子を持ちたりしに、今度、復た、女をあげたり、養ひ取り玉ひなむや、女にては、あきたらずと思すべけれど、そは、只、敎育にこそよれといふに、良人も、いかにと妾にはかり玉ふに、元來望みし事なれば、喜びて諾べなひぬ。

稚兒、名は、波子、生れ出でゝより、やう〳〵十月ばかり、色白く豐かなる頰、黑く艶やかなる髮、涼しき眼にこやかに、這ひかゝれる其のさまには、如何なる惡魔も笑みぬべきを、況して、子煩惱の我等夫婦、いかに嬉しとかしづきけむ。

これより、我家は、俄に、春風吹き渡りて、明け、暮れ、此の兒のかしづきに日もたらず、殊に、妾は、かゝる可愛きもの、人の手に托ねむ事の覺束なくて、自ら、牛乳もて育みければ、牛乳よ襁褓よとて、ひるは終日、夜は終夜、更に休らふ暇もなけれど、只、月にも花にも、此の兒の笑顏にますものなく、疾く立てよ、速く歩めよと、思ふにつけても、あはれ優れし女となし、よき婿がねをやむかへむなど、はかなき事を樂しみて、月日の過ぐるも知らざりき。かゝりし程に、或日、彼女が實家より、久しく見ぬ事の覺束なければ、今日は、波子を貸し玉ひと、言ひ越しゝかば、暫時、離つもつらけれど、否まんすべもなければ、日も傾きなば、風や引かむ、必ず〳〵、暖き中歸し玉へと、操返しつゝ、心ならずも出しやりぬ。

今日は、物忘れたらむやうにて、只、時計の針の遲きを恨み、晝過る頃よりは、今や歸らむ、いかにしけむと待わぶるに、黄昏になりぬれど、歸り來べきさまも見えねば、こは如何せし事にや、今朝早かりし故、風やひきけむ、はた、はしかもありしときゝしを、おぞくも出しやりつるよなど、さ

まざま思ひ煩ふ折しも、車の音の響くに、嬉しと馳せ出づれば、あらぬ實家よりの使なりけり。彼女には、少しの障りもなけれど、今宵は、我が方へ泊むれば、心安かれとなり、わびしけれど、日も暮れたれば、せん方なく、明日は、必ず疾く歸し玉はれと答へつ。此の夜は、いと寢ねがとう懷淋しきに、あはれ明けがたき夜半かなと、良人のつぶやき玉ふも、同じ想ひにおはすらむ。

夜も明けはてたれば、今日は、早や、心も空に、立つ居つ、出つ入りつ今や歸ると待ちわぶれど、影だに見へねば、今は耐へかねて、心利きたる者にいひふくめ、必々ともなひてよとて、出しやりしが、今日こそはと、待ちこがるゝほどに、使は、空しく歸り來て、今二日三日とゞめむとて、強てともなはむといへば、思ふよしあればと、すげなふ答へ玉ふに、せんすべなくてといふ、こはいかにせし事ぞと、腹立しけれど、すべなくて、只管に待わびつゝ、一日二日と過ぐれども、更に音信さへなければ、今はえたえで、彼の媒がり赴きて、ありし事ども委にかたり、是非に彼女を歸らせ玉へと、ひたぶるに打頼めば、こは不審しき彼女のはからひかな、諸吾行きて正さんと、言はるゝ事の頼もしく、今や〳〵と待ちわびしに、夜に入りて、かの人は、良人の親しき友と打ち連れて、歸り來ませし顏色の、いと氣の毒げなるに、胸騒げば、彼の人、やう〳〵かたるには、彼女の父は、我が良人の、富貴利達に念なきを、うるはしからず思ふなれば、かゝるものゝ子養ひしとて、後のもつれの種とこそならめ、今思ひ捨て玉ふ方、反りて末の幸ならむ、人の子を養はむには、彼女にかぎる事かいと、のたまふ言の恨めしきに、良人は、さすがに心つよく、位祿を望まず、富貴

を貪らず、一身を輕むじ、道義を重むずるは、我が多年の素志なるを、いかで私情に溺れて、志を翻さんや、とてもかくても、子なきは天命なり、其方も我が妻なれば、とく思ひあきらめよと、のたまふ聲も打くもれば、我はえたへでむせび入りぬ

（下）

かゝりし後は、只、うつ〳〵と夢のごと、明し暮すにも、只、かの愛らしかりし笑顏、まはらぬ舌にて、ムマ〳〵と、這ひよりしさまの身にそひて、夢にも、幻にも、忘れやらず、朝夕の食も、すゝみかね、想ひに沈む折しもあれ、郵便との聲に驚かされ、立ち出で見れば、古郷なる、我が父母よりの玉章ありき。我が子の上を思ふにつけてか今更に、深き御惠の身にしみて、推し戴きつゝ開き見れば、良人には、父君より、母上よりは、妾へ、あり、讀みもてゆくに

この程の御ふみにて、いとしき稚兒えさせ玉ひし由、嬉しさたとふべき方もなくてなむ。初孫の事にしあれば、初着も直に命じ置候、染も出來候はゞ、齡にもあやかれかしとて、祖母樣、御手づから仕立玉はむと仰せられ候、汝も知らるゝごと、祖母樣には、もはや、八十路にあまり玉へど、いと健かにおはして、今に針をはなち玉はねば、目出度衣服と覺して、稚兒の生ひ出で玉はむ後まで、裁縫の節の鑑ともなし玉へ。今陽暦は過ぎぬれど、陰暦は三月にも近ければ、初の雛も送り申候、こは、女に、家庭のわざを、敎ふるはじめなれば、必ず、祝ひ玉へかし。申すまでも候はねども、おんみ、久しくさる氣色おはさぬを、祖母樣父君、われらとも、深く心をいため侍りしに、かく他人の子を養ひ玉ふ

事、いはん方なく嬉し、くれ〴〵も、良人君の御情を、忘れ玉ふな、世に側室妾も候ものぞ。なさぬ中は、殊更、大切に、朝夕にも、心をつけて、必ず風ばし引かせ玉ふな、風は萬病のもと丶申して候。自ら牛乳にて、育み玉ふ由、元よりさるべき事に候、牛乳の取あつかひに心をつけて、腹をそこなはぬやうにし玉へ、病は口より入ると申し候、おさなきものは、只、乳こそ、命にて候へ。

われらも、女子とては、汝一人なれば、初孫をえし事の嬉しさにも、相見たさは、いやまし候へども、隔りし身は、容易ならず、必ず〳〵、寫眞を送り玉へ待ち侍るになむ。

持ちつけ玉はぬ稚兒に、さこそいそがしうおはすらめ、わづらはぬやう心し玉へ、子ある母の、病を穫るは、此の上なき一家の不幸に候ぞ。

猶、申上度御事は、山々ながら、又のたよりにまかせ申候、くれ〴〵大切に、取あつかひ玉へかし。

返す〳〵良人君へは、父君より、御祝ひも御禮ども申され候、稚兒の御實家方へも、御禮のふみさし上置候、

とあり。いかに、應答まゐらせんかと、思へば、いとゞ胸つぶれて、是さへ、涙の種となりぬ。

花をし見ればと、いふなるを、などかく、垂れ籠めてのみおはすらむと、親しき友のそゝのかすに、心は、更に進まねど、人の眞情の默止がたくて、いはるゝまゝに從へば、實に咲きも殘らず、散りもはじめぬ、今を盛りの向島に、われもじゞと打ちつどふ、若き老たる、おのがじゞ樂しみ暮す今日の日も、妾は、ひとり、花の盛りのはかなさとのみ、思はれて、稚兒携へし人のみ、心にとまり、

今日しも、彼女をともなはゞ、われも亦、いかに樂しとながめむと、思へばいつか胸せまり、ひそかに、眼おし拭ふを、さても、女は愚痴なるものよ、とてもかくてもなき緣を、いつまで思ひ煩ふにやと、たしなめらるゝもいとつらし。

斯くてのみあるべきならねば、一日、さりがたき事のついで、彼女が實家ちかくいたりしにぞ、いとせめて、聲にても聞かむやと、ひそかに、うかがひよる折しもあれ、彼女は、見知らぬ乳母に抱かれて、門邊に出で、居たりしかば、我れを忘れて馳せよれば、彼女も、亦、いといたう嬉しげに、我れにしつかとしがみつき、顔すりつくるいとしさに、我れは覺へず抱きしめ、其の儘其處へ伏沈めば、理由知らぬ乳母は、驚きて、こは和子をいかにかし給ふいふ、とく、此方へと、手を出せど、イヤイヤと首打ちふり、我が胸へ手をさし入れて、ムマムマと甘ゆる可愛さ、我れは、聲さへ咽喉につまり、只、打ちまもりて、涙せきあへぬを、無情なき乳母は、つとかい取りて、門内へ馳せ入れば、わつと泣き入る彼女が聲は、我が胸をつんざきぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

今幾年をや經たりけむ、妾は不意男兒をさへまふけしかば、花の朝月の夕はさらなり、あら金もとけなむ暑き日も、骨にもとほる寒き夜も、親子三人が、睦しう打ち團欒つゝ、かたる樂しさ富貴利達はものかは、いかなる王侯貴人にても、かばかりの愉快は、實に之易からじと思ふにも、何か常なる飛鳥川、きのふの淵は今日の瀬と變りゆく世も、我が子の上に幸あれと、願ふ心は彼方ある、波子も共に榮えよかしと、旦夕に思ひやるも、假初ながら親となり、子とありし恩愛のきづな、斷ちがたくてなむ。

石狩紀行

扇唐

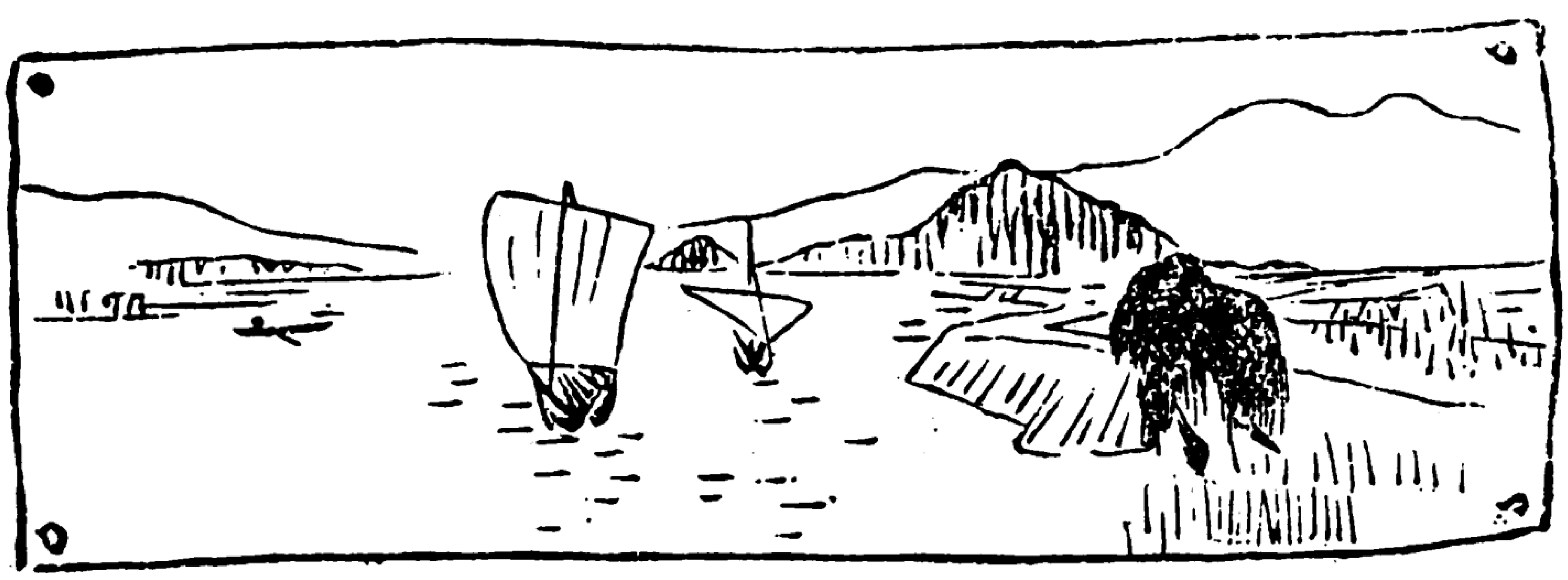
私の札幌に居たのは今年の一月と二月であります、それで話は冬の事で……、何程か寒いだらうと想つて行きましたが、そんなに寒い事はありません、道路の雪は三尺位なもので、室内へは大抵薪を焚く暖爐を据ゑて、それを持たぬ家でも竈くばかり炭を澤山燈して置きますから、東京よりは遙かに凌ぎ易く感じました、それも、其の筈、夏安い時で薪は一敷これは、札幌の方語で長さ一間の場所へ五尺位の高さに積んだもの、一圓五拾錢炭は拾貫匁參拾錢位なものですもの、其頃雪が降りますから、寒國に於ける服裝風俗がありさうなものだが、それは無いのです、下へ何を着るでもなく寒國に得意な藁靴も見當りません、男も、女も、多くは革或は護謨靴を、穿いて、裾も端折らず雪の積んだ路をずる／＼と行きます、まことに贅澤なもので……。

又幾ら雪が降つても戸毎に道路を踏む事をしません、繁華な部分は區役所で馬を追うてつけますけれど、少し片隅の町にあるとそれを仕ませんから何時も路は無い勝ちです、庭前の雪を拂ふ道具なども亦不完全なもので、小さい箆でちよい／＼と行つて居ます、諸國の人が寄集つて新開地を成した中に、暖國の人が多いからでせう、

二月十一日の紀元節でした、札幌區から七里ばかりの石狩といふ町へ雪中散步をして、初めて異つたものを見ました、いざ其の散步錄をいと簡單に綴つて見ませう。

札幌から滊車へ乘つて、琴似といふ停車場を通り輕川といふ停車場で下りました、よく／＼の村落

ですけれど、光風館といふ温泉場があるので有名な處です、それより東へ向つて進む大原野は、所謂石狩平原で、雲と陸と境をなした細路は、一直線に四里あります、路の左右に處々雪の堀上つてゐるのは田舍の人家で、釘や鑿を用ゐて造つたものではなく、草や何かの屋根が、雪の中から見えてる樣子は非人の小屋もこれよりはと思はれる位、いやはや、實に驚いたもので、疊なども元より敷いては無いでせう、北海道の極田舍にあると、屯田兵の家屋をのぞく外は、大抵其の通の人家ですから、洪水で家が流れるのを何とも思はぬ、只、農作物を害されるのを非常に怖がつて居るとの事でござります。



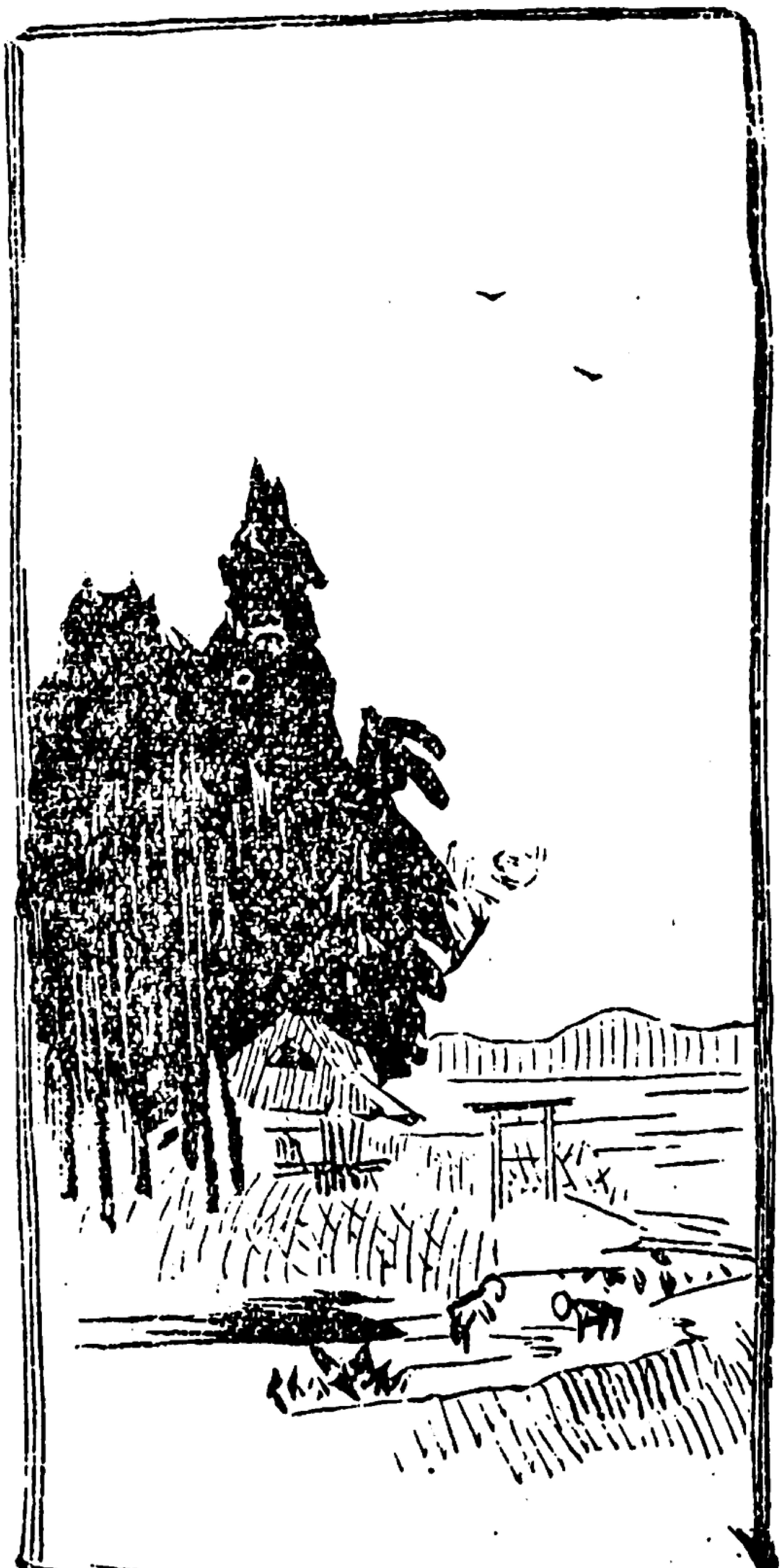
路の傍に、黒くなつた木の伐株が幾個ともなく。雪の上から面を出して居ます。

これは、元は此邊は、一面の大森林であつたのを、開墾の際火をつけて燒拂つた、其の株がまだ遺つて居るのださうで、處處に、前田利爲所有地と記された新しい標杭が建つて居ました。

二里行くと花畔といふ村落へ出ました、此處には、木造の普通の人家があります、丁度正午ですから、辨當を使ふやうな家を搜したけれど見當りません、仕方がないので、構店の家へ這入つて、店頭を貸して呉れと賴んだら、田舍の心安さ、大層欣んで許しました、店の大きな爐の緣へ腰を掛け、携へて行つた酒を出して傾けると、家の主人が、御肴

にあれを上げろと取り出させた物は、筋子と、もう一つは眞黒などろ〳〵した、未だ曾て見た事のないものです、これはと尋ねたらミフンといふ物で、鮭の脊綿の鹽辛で、大層養生物といひます、食べてみたら、烏賊や松魚の鹽辛の段でないおいしいもので、生鮭を割いて見ると、脊に極少量しか這入つて居ぬものださうです、

其の家を出ると、海は見えませんが、路は、海岸の方へ寄つて、路傍の家で、駄菓子などを賣つて居ました、逢ふ人の多くはゲードルを箝め、左樣な妙な靴を穿いて居ます、連れに問うたら、それは鮭の皮で造つた靴で、それへ雪の這入らぬ樣長く布をつけたもので、濕れば濕る程穿きよくなる物のさうです、鮭のは如彼皮柔かな物だに、そんな役に立つものかとこれには大分驚きました、』



尚、二里行くと愈々石狩へ出ました、商家軒を並べて一つの町を成し、小學校、警察署、宿屋、飲食店、劇場、遊廓などのある、一寸繁華な地で、石狩河を背負つて海へ向つて居ます、早速河岸へ行つて見ますと、

日本一の長流といふから、何程か廣い河だらうと想ひましたが、何狹いもので、隅田川よりは少々廣い位なものです、岸から三間ばかりは水で埋つて居るけれども、流の眞中は薄氷半碎けて、白い沫が浮いて居ました、見た處は、流が緩ひ樣だが一皮下は大層急激で、這入れば容易に上られない、大雨下れば、水を增すのが害で、十月十一月の頃鮭の捕れるのが利で、其の節になると鮭が群をなして、上つて來て、流が爲めに逆卷く事があるといひます。

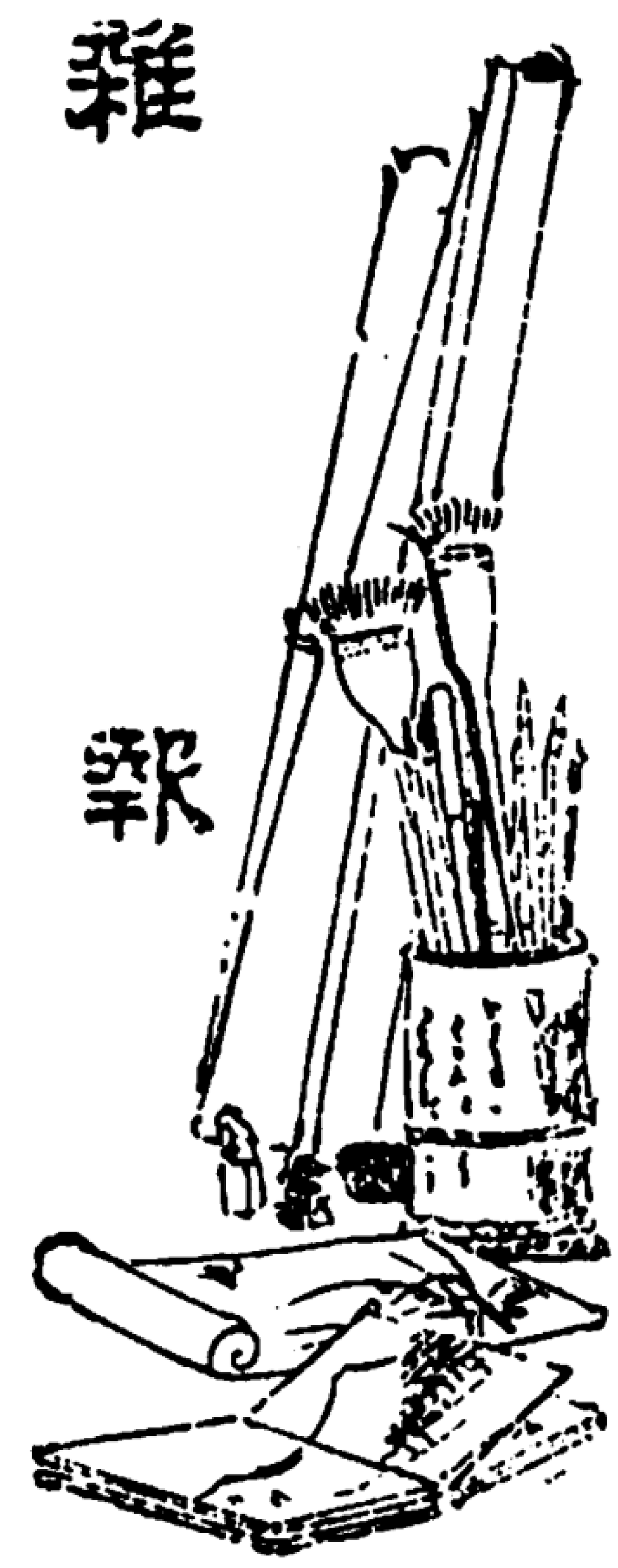
岸に丸木船が上げてありました、丸木船とは、太い丸木其の儘のを椀つて船の形に拵へたので、巾が狹く細長の、身體を動かすものなら、忽ち船は左右に動きます、乘馴れぬ者の危さ加減たらない、實に寒氣が立つのです、それを、漕ぐ術も中々難しいもので、並な人には出來ず、愛乃人が大層上手なさうです、

河口に燈明臺があります、海の面は銀を溶かした如く青く、寄せては返す荒浪は、露西亞の果てに續いて居りませう、彼方の海岸へ出た山々は斷立つて、其の巖角から一種の風が身に染む樣覺えて景色が何となく物凄く、長く見て居るに忍びぬ樣な思がしました。

其夜は知る人の許へ泊り、翌朝歸るとき、愛乃の女を見ました、口の周圍へ、環を掛けた樣に入墨をして居ます、それは、夫を持つた證で、夫が亡くなると額へ入墨します、男よりは女が長命する傾があるので、年老いた女は、大抵額に入墨がある、一度、夫を持つたしるしを刻んで、決して再婚せぬさうです、貞操なものではありませんか。

其他色々ありますけれど、先づこれだけに致します。

雜報



雲井のかりがね

○秋季皇靈殿並神殿祭　去月廿四日は、秋季皇靈祭の御當日なりしを以て、午前八時より、朝の御次第を行はせられ、九條、藏田、宮地、園池各掌典及西郷、恩地、松井、稻葉、伊達、松平各式部官等出仕御殿の御粧飾を奉仕し、間もなく、奏樂中に、皇靈殿の御扉を開き、神饌を供し、岩倉掌典長祝詞を奏し、畢りて、奏樂中、撤饌閉扉、各員一先づ退出し、同十時三十分より、御親祭を行はせられたり、掌典長以下の出仕前の如く、奏樂中、皇靈殿神殿開扉、神饌及御幣物を供し、出御を待ち奉る、天皇陛下には、德大寺侍從長の奏請に依り、正十時出御、先づ、皇靈殿に御玉串を捧げ、御告文を奏し給ひ、神殿には、同樣の御式ありて、入御、次に、皇后陛下には、香川大夫を從へさせられ、兩御殿へ御玉串を奉り、御拜畢りて入御次に、皇太子殿下にも、同樣の御式ありて御退下、次に、各皇族殿下以下、著床、諸員の禮拜ありて、御親祭の式を終り、尚、東遊の式あり、正午十二時よりは、在京伯子男爵、從二位以下の參拜者を許し、夕の御次第は、午後四時より行はせられ、同五十分を以て全く當日の式を終はらせられたり。御親祭の參拜者は、有栖川宮威仁親王、閑院宮載仁親王、梨本宮守正王、三殿下を始め、左の諸氏ありといふ。

桂總理大臣、德大寺内大臣、田中宮内大臣、兒玉陸軍大臣、内海内務大臣、菊池文部大臣、曾禰大藏大臣、小村外務大臣松方伯、榎本海軍中將、伊東同大將、東久世樞密院副議長、

佐々木、田中、中牟田、杉、伊東、林の各樞密顧問官、松岡行政裁判所長官、柴山司令長官、近衛、徳川、島津各公鍋島宮中顧問官、花房帝室會計審査局長、岡澤侍從武官長、安保海軍中將、三宮式部長、三浦宮中顧問官、乃木陸軍中將、相浦海軍中將、石黒軍醫總監、淺田遞信總務長官、中山東宮大夫、川口宮内次官、實吉軍醫總監、波多野司法、中村陸軍、阪谷大藏各總務長官、股野博物館總長、戸田宮中顧問官、木戸侯爵、山内侯爵、土岐軍醫監、山内憲兵司令官、黒岡、肝付、松永、瓜生各海軍少將、武田、有阪、兒玉各陸軍少將、花房統計局長、杉村通商局長、田中鑛山局長、村木東宮武官長、

○東宮殿下御參内　皇太子殿下には、宮中御親祭御參列の爲め、去月廿四日午前九時三十分東宮御所御出門、高辻侍從長、村木武官長の供奉にて東御車寄より御參内、皇靈殿神殿御參拜の上、十一時三十分御退出相成りたり、妃殿下は、御都合により御代拜を立てられたりと承りぬ。

○親書並に紀念章御贈進●●●●●●●　獨逸皇帝ウヰルヘルム第二世より、北清事件に關し、我が陛下に御贈進の鄭重なる親書に、征清紀念章は、此程、同國公使館に到達したるを以て、フオン、アルエー、ワルレイ伯は、去月二十七日午前十時三十分參内鳳凰の間に於て、天皇陛下に謁見、該親書並に紀念章を捧呈せられたりといふ。

○佛國司令長官の謁見●●●●●●●　佛國東洋艦隊司令長官海軍中將ボッチエー氏は、今回來航に付き敬意を表する爲め、去月二十八日午前十分三十時、同國代理公使ジヨルジユ、ヂユバイ氏同伴、海軍大佐ネニー、海軍主計總監ブリバル、海軍中佐ヴヰオー、海軍大尉グラレクレモン、海軍大尉ラミトの五氏を從へ、坂下門より東御車寄を經て參内、鳳凰の間に於て　天皇陛下に謁見仰付られたりとぞ。

○謝罪使那桐の謁見●●●●●●●　さきに清國事變の時、我が杉山書記生を慘殺したるにつき、清國皇帝の遣

されたる謝罪使那桐は、正當の者と認められ、愈、去月十二日午前十時三十分宮中に參內し、鳳凰の間に於て、我が　天皇陛下に謁見し、奉り、謝罪書を捧呈したり、是に就ての宮中の取扱ひ、頗る鄭重にて、初め、恩地式部官馬車を以て帝國ホテルに之を迎へ、同伴して參內し、控所に於て、曾禰外相、三宮式部長之に接し、式部長の案內にて、鳳凰の間に進みたるなりとぞ。猶、謝罪書捧呈終りし後、那桐の隨員顧肇親、葵源深、張德彝、陶大均、誠璋の五人も、御序を以て、謁見仰付けられたり。

かくて、清國謝罪使那桐が、捧呈したる清國皇帝の謝罪に關する親書は、左の如し。

大淸國大皇帝　啓んで書を、大日本大皇帝陛下に致す朕惟ふに淸國と貴國とは同じく亞洲にあり海程密邇、双方使を遣はし駐劄せしめて以來誠信相孚情誼摯れり然るに昨年五月京師俄に拳匪の亂に遭ひ兵民交訌し貴國公使館書記生杉山彬遂に戕せられて命を殞すに至る該書記生は公使に隨ひ清國に來れり應に保護の益を受くべきに惟はざりき變倉卒に生じ遽爾軀を捐つ朕自ら惟、薄德にして事に先んじ豫防する能はず友邦の官員をして不足に慘遭せしめ穆誼を傷くるあるを致せり彌よ切に心を疚ましむ既に大臣を派して祭を致し並に內帑を頒發して以て優卹を示せり茲に頭本頂戴戸部左侍郎那桐を派して欽差專使大臣となし、親しく國書を齎し貴國に前往して遞呈せし該大臣は忠誠素より著はる朕が深く信ずる所あり特に令して敬謹事を將ひ惋惜の懷を表明せしめ藉りて優榮の與を達せしむ今回　大皇帝師を使はして遠く涉り京に到るの日首として先づ民を安んじ又和義の要端に於て

力を盡して維持し特に公論を伸べられ東方の大局賴つて以て保全し義聞仁聲遐邇に昭布せり朕が心尤も欣歎を爲す依て並に該大臣をして代りて謝忱を達せしむ惟望む　大皇帝　悉く前嫌を棄て益す夙好を厚ふせられんことを、辰齒輔車の義誼久しきを經て愈よ親しみ時より海宇乂安昇平同じく享けん惟、大皇帝鑒察せよ焉

光緒廿七年六月廿日

皇帝之寶

右に掲げし清國皇帝の親書に對する　天皇陛下の勅語左の如し

客歲の變公使館書記生杉山彬貴國官兵の爲めに慘殺の否運に會す貴國、大皇帝深く惋惜し卿を特派して國書を齎し陳謝せしめられ朕之を諒す朕は嗣後兩國の交誼益す敦厚を加ふべきを信じ惟希くは貴國、大皇帝維新の丕圖速に其緒に就き東亞の和局恒久に維持せられんことを、尚大皇帝の福祉無窮を禱る旨併せて傳奏を望む

而して、謝罪書捧呈の際、那桐が言上したる所、左の如し。

使臣欽んで我大皇帝の特派を承け使を貴邦に奉ず恭しく惟みるに我大皇帝治功に丕著はれ德化維れ新なり使臣光義を敬仰し益す深く慶幸とす伏して念ふに日清兩國は同しく亞州にあり唇齒相依り至親極密なり然るに客歲夏間清國變倉卒に生じ禍貴國書記生杉山彬に及び悲命に慘遭す我大皇帝實に深く惋惜せらる是を以て使臣を特派し來て國書を奉じ面り歉衷を達せしめ幷びに自から杉山彬の墳墓に行ひて祭を致し祭葬料を齎交し以て優榮の典を表せしむ惟希冀くば大皇帝同州の誼を念ひ今後交際益親睦を維持し東亞を振興せしめられば誠實に貴我兩國の福

たり使臣茲に敬み大皇帝の萬壽無疆國運隆盛を祝す頌禱の至に勝へず

道のしるべ

●**貞婦みさ子**　栃木縣芳賀郡逆川村大字木幡彌平次、妻、小森みさ子は、貞操の譽れ高き女にして、夫が疾病の爲め、四肢其の用をなさゞる久しき其の間、湯藥看護至らざるなく、此の大患者をして、一も不快の念あらしめず、屢々感涙に咽ばしめしことあり、加ふるに、家計困乏、醫藥の資に窮するも、傍ら、兒孫と共に、家業を勵み、且つ、兒孫の文盲に終らんを憂へ、窮乏の中にも通學せしめて、忠孝人倫の大道を聞かしむる等、其の篤行貞實、皆肺肝より出づ、斯くの如きこと、二十七年間一日の如く、毫も倦色なく、聞くもの歎賞して、之を鑑むるもの多しと、此の事同縣知事の聞く所となり、賞金を下賜せられ、同村長も、亦、村會の協賛を經て、之を賞揚し、此の程、同地高等小學校にて、吉屋芳賀郡長　知事代理として出張し、其の他村長、議員、警察官、學校職員生徒一同參列して、賞品授與式を擧行せしが、之れ、獨りみさ子の名譽のみならず、又同村の名譽にして、中にも、生徒一同は、日々學校にて習得せし修身の訓誨を、實地に目擊して、只管感動したりとぞ。貞婦みさ子の力、實に大なりと云ふべし。

●**死後の光榮**　伏見宮家に老女として、仕へたりし菊枝といへるは、京都醒ヶ井花屋町上る本派本願寺の末寺なる正恩寺の住職、故花山義敎師の息女にして、天保十年、十八才の時、伏見宮に召され、故一品邦家親王妃、景子殿下に仕へ、三保浦と稱し、後、老女の職に上りて瀧山と改め、貞

敬邦家兩親王、並に、御當主貞愛親王の御三代に歴仕し、前後六十三年間一日の如く怠らず、誠心誠意をもて仕へ、老女の鑑とまで賞揚されしが、去る二月十日東京にて卒去せしより、同宮家にても、いたく惜ませられしが、遺骸は、遺言によりて、京都に送り、花山に茶毗せしを、今度、相國寺内に在る、故景子殿下御兆域内に、分骨陪埋する事を許され、去月十九日其の式を擧げたりとは死後の光榮にこそ。

●哀れなる一家と小僧の忠義　横濱本牧町六十六番地、餅菓子商水野米吉は、久しく僂痲質斯を患ひ、昨今は、餘程重態に陷り、歩行さへ不自由となれるより、女房タツ(二十五)は、日頃厚く天理教會を信じて、服せしめたる金米糖は、モルヒネ入りと聞き、夫の斯くなれるも、さては其の爲めにてなりけるかと、今更の如く驚き惑ひ、殆と狂氣の有様となり行きしが、茲に、菓子製造見習として、去る七月上旬より住み込みたる、牛込佐内坂町原禮一郎(十四)は、米吉の就褥以來、タツを扶けて營業を勵み居りしに、タツも、今の有様となりて、其の日の糊口にも窮するに至りたれば、禮一郎は、子供ながらも、大いに心を痛め、毎日看護の傍、魚釣りに行きては、それを賣り歩き、辛くも主人夫婦の命を繋ぎ居りしが、それも細腕にて、醫藥の資に供すべくもあらず、日夜悲嘆にくれ居るを、同町阿部川清次郎外數名は、見るに見兼ね、タツをば、市救護所に保護を願ひ、米吉をば、根岸の慈善病院に治療を乞ふ事に取計ひ、何れも去月廿六日送り入れたりと。

○清國●●●使故杉山氏の墓を祭る　清國謝罪使那桐氏は、青山墓地なる、故杉山書記生の墓前に參詣し、叮重なる祭典を擧げたるが、同墓處に參集せるは、

那桐氏一行隨員五名、及、內田總務長官、加藤辯理公使、石井書記官、小林飜譯官、故杉山氏の遺族母堂夫人、令息二人、令弟二人幷に、親族總代大審院檢事岩野新平氏等にして、墓前の淸掃を調へ、大卓の上には黃布を蔽ひ、供ふるに、山海の珍味を盛りたる小皿四百餘種を以てし、左右には、龍紋美麗なる赤蠟一對を立てゝ火を點し、中央には、香爐を置き、線香及び香木、山の如く堆積せらる、既にして、那桐氏は、先づ一揖三本の線香を炷し、更に、香木三本を香爐に爇し、其の一本を爇する每に禮拜をなし、次で、五名の隨行員又之れに倣ふて禮拜あり、夫れより、內田長官を始め參詣者一同の禮拜あり、玆に祭典の式を終れり。因に記す、淸國皇帝より、故杉山書記生遺族に贈られたる吊慰金五千兩は、那桐氏より、外務省を經て、贈與せられたりと云ふ。

○女子國文講習會　今回、帝國教育會に於て、內藤恥叟、松下大三郎、三輪田眞佐子、渡邊文雄、國分操子、大川茂雄、佐々木信綱等の諸氏を聘して、女子のために、國文の講習を開き、本月六日始業式、同十五日より授業、會期六ヶ月間の由。

○日本弘道會支部聯合會　同會にては、去月二十八九兩日、千葉縣八日市場に於て、匝瑳外、三支會聯合大會を催し、本部より、南摩副會長、池田幹事長、指原商議員の三氏出張して講演せし由、又、文學博士西村茂樹氏は、同會員の爲め、每日曜、向島長命寺に於て、儒經、諸子、心理、論理、倫理、佛經、因明學を講演すべしといふ。

○愛國婦人會相談會　同婦人會にては、本月六日、第一回報告會を開くに付き、準備の爲め、去月廿三日午後一時より、九段牛ヶ淵同會事務所に於て、打合會を開けり。出席者は、會長岩倉

久子、理事近衛貞子、島津田鶴子、評議員松前藤子、松平須摩子、千家俊子、濱尾作子、棚橋絢子、相馬睦子、津田梅子、佐方鎭子、島田信子、三輪田眞佐子、同會主唱者奥村五百子女史の諸氏にして、報告會、開會の順序、及び、同日の諸準備に就き打合せをなし、午後五時頃散會せり。

○古墳發見　宮崎縣西臼杵郡田原大字河内の獵師、佐藤有也と云ふ人、今回、古墳を發見し、宮崎縣廳へ報告して、取調を受けしが、こは、古墳中最も古く、神武天皇時代のもの丶由なれば、尙は、篤と調査を遂ぐる筈にて、周圍に垣を結ひ廻ぐらして取締をなしおりといふ。

○米國大統領の訃　合衆國大統領マッキンレー氏は、去月四日、バッフハロー博覧會に於て、來賓接見の際兇漢ザルゴルッのために銃擊せられ、直に、入院治療中なるよし傳へられしかば、天皇陛下は、曾根外相をして弔電を發せしめ給ひぬ。かくて、其の後の經過もや丶好望ありしに、病症急變して、同十三日午後二時五十分を以て長逝せられ、同十九日の木曜日を以て、オハイオ州カントン市に於て葬儀を行はれたり。其の後任をば規により副大統領たりしルーズベルト氏之を襲ぎ、定葬送の日は、國中一般に服裝祈禱をなすべき旨宣言せりといふ。

○黑奴婦人會の誓約　米國ニユーオーレアンスには黑奴の婦人を以て、組織せる黑奴婦人會あるものある由なるが、入會者は、必ず「一生涯白人に生れざりし事を恨まざるべし」との誓約を爲す定めありと云ふ。

○鷄卵の効用　芥にて膏を造るとき、玉子の白蛋を混ずれば、發胞することなく、咽喉に魚の骨の立ちたるとき、生玉子を飲めば、直ちに拔けて、

下るべし。又、玉子の殼の內側に在る白き皮は、瘍腫を癒すの効あり、嗄聲を治すには、玉子の白蛋に、砂糖とレモンとを混じて、飲用するを可とす、尙、又、毎朝珈琲を飲用すると同時に、玉子一個を食するときは、好個の强壯劑たるべしと云ふ。

●●●●●●●

○身長九呎の大男　佛國のルーエンには、大男の競爭會ある由にて、度外なる體格の人、續々現はれ來る中に、八月八日佛國の南部より、同會に赴くの途、巴里に立寄りたる二十二歲の靑年は、身長九呎二吋、體量五十五貫ありたり、此男は、目下、伊國に存る米國の一女子と結婚の約ありて、其の女は、身長八呎三吋ありと云ふ。珍らしき男女といふべしといふ。

●●●●●●

○貧しき國王の生活　英のチットヒッツ雜誌は曰く、富と權力とは常に相伴ふ能はざるが如し。そは、兎に角、諸國の國王中には、市役所の書記より少なき收入を得るものあり。葡萄牙の國王は、歐洲の主權者中、最も貧しきものなり。國王は、年々八十二萬圓を、王室費として得らるゝ筈なれども、國帑缺乏のため、久しき以前より、更に收入なく、王室費は、總て手形を以て支辨し居らる。サモア王は、毎週、僅に二十二圓半の俸給を得らる、こは、千八百八十九年の伯林條約に依りて、定められたる所なりとは憫むべきことなり。ダホメイ王は、曾て、佛國政府の爲に追放せられて、毎週、十圓の手當を受け居たることあり。ルクセンブルク王は、十五萬圓の歲入を有せらるゝ筈なれども、時としては、千圓の歲入を得る能はざることありとぞ。

●●●●●

○文學者の豫言　往時、英の文豪マコーレイが、ニユージーランドの人の事に就きて記したる中

に、「多年の後、ニユージーランド人は、倫敦橋の敗壞せる橋杭の上に立ちて、聖ポール伽藍墟址を寫す時あるべし」、との語は、屢、世人に引用せられて、名高き句となり居ることなるが、頃日、英のヒツバートと云ふ人は、切りに、ホレース、ワルボールの文書の蒐集に從事し居りしに、其の際、右に似たる句を見出したり。曰く、「次のオーガスチーンにスキヂデス、（古代希臘の歴史家）紐育に、セノフオン（古代希臘の歴史家にして軍人）メキシコに、ウアージル（代古羅馬の詩人）ベリユーにホレース（同上）の如き人出づる事あるべく、又、リマより旅人來りて、聖ポールの墟址に就きて、バールベツク、（古代シリアの都府）及び、パルミラ（同上の旅行記の如きものを作る時あるべし）と、文學者あれはこそ、かく文學的の觀察を爲したるあれと、他日、英國の衰微して、米國繁盛を來すの時あるべしとは、此等の人の脳中にも存したりと見ゆ。

○六哩の空中に達したる人　獨逸のバルツン及びスエリングの兩博士が、輕氣球に依りて、高さ四萬四千四百呎（六哩半餘）の空中に達したることなるが、尚、其の詳報をきくに、兩博士は、三萬二千六百呎の高さに達したる時より、凡そ、四十五分間人事不省となり、其の後、輕氣球は、益上昇したり。三萬四千四百呎は、器械の示す所なれども、實際は、之よりも更に高き處に昇りたるあらん。兩博士の言に、三千二百八十呎の高さに於ては、なほ、鷙鳥及牛馬のなく聲をきくを得たり、又、機關車のひゞきは、二萬呎の高さに於て聞かれたるが、其の後、何等の音聲も耳に入らざりし、一萬二千四百呎にありては、氷點に達し、二萬呎の處にて、毛皮を纏は（夏の最中なるに）ざ

るべからざるに至り、三萬呎の高さに於ては、吸収法を要したり、此の場合新發明のセルモホルは、体熱の温暖を保つに、好結果を奏せり、輕氣球は、伯林の氣象臺をはなれてより、八時間の後、コッツスに下れりといふ。

○世界最富の國民　こは、無數のトラストを有する米國民にあらず、又、英國の國民にもあらずして、其の殖民地ある濠洲聯合國なり。即ち、濠洲民の富を平均したる一人の額は、世界各國々民の富の平均額よりも多し、實に、本年に於ける同殖民地の生産總額は、十一億圓にして、その內、牧畜業の生産額三億圓、農業の生産額二億八千萬圓、鑛業の生産額二億圓、其の他の生産額三億二千萬圓なり。濠洲は、農業及牧畜に適するのみならず、殆んど、無限の鑛地を有し、金屬は更なり、ダイヤモンド、及、ルービーをも産出し、又、眞珠の産地としても名を知らる、白人の所有となりし以來、僅に百年にして、既に、此の如く最富國たり將來の發達は米國に比して更に驚くべきものあるべしとぞ。

○百年間に於ける歐洲人口の増加　近刊のヒューブネル統計表に據れば、百年前に於ける歐洲諸國、及、米國の人口左の如し

露國	三八八〇戸	佛國	二六九〇
獨逸	二四五〇	墺國	二四三〇
伊太利	一六八〇	英國	一六二〇
西班牙	一一五〇	土耳古	七三〇
米國	五三〇		

かくて、昨千九百年の人口は、左の如くなりといふ

露國	一〇六二〇戸	米國	七六一〇
獨逸	五六三〇	墺匈國	四七〇〇
英國	四一〇〇	佛國	三八七〇
伊太利	三二四〇	西班牙	一七七〇
土耳古	九八〇		

即ち、露國の人口は、百年間に二倍餘の增加をなし、米國は、諸國中の最下位より第二位に進み、佛國は第二位よりかへりて、第六位に下りたるものなり

○氣候と長命との關係　ある醫學者は、氣候暖き土地に、百歲以上の長命者多き事を發見したる由なり。最近の調査によれば、獨逸は、五千六百萬の人口を有して、百歲以上の人、七十八人あるのみなれども、佛國は、四千萬に足らざる人口を以て、二百十三人あり、英國には、百四十六人あれども、蘇格蘭には四十六人のみなり、愛蘭には、實に五百七十八人を有せり、瑞典には十八人、諸威には二十三人、白耳義には五人、丁抹には二人、瑞西には一人もなし。西班牙は、一千八百人に足らざる人口にて、四百一人を有す、セルヴィアは、二百廿五萬人中、五百七十五人あり。而して、世界中の最年長者は阿弗利加に生れ、リオゲヤネロに住居するブルノ、コトリムと、いふ人にて百五十歲なりといふ。

○珍らしく大なる顏の人　香港デイリブイ、レツス新聞の報によれば、此の程香港政廳に出頭したる一人の男は、恐らくは、世界中顏の最大なるものならんといふ、此の男は、支那人にて、體格は普通なれども、顏の大さは、少なくとも、普通人の四倍程あり而も、頭は、尋常なる爲め、恰も、假面を蒙りたる如き容貌なる由なり。

筆のすさび

唱歌と俗謠

去年の頃より、今年にかけて、大和田氏の鐵道唱歌、落合氏の楠公の詠歌、大に流行して、小學校

は更なり、やゝ、坊間にも傳はりしが、之と前後して、磯節ストライキ節等の俗謠、また、非常の勢力を極め、殆ど之を口にせざる者なかりき。而して、其等の唱歌によりては、多少地理思想、忠孝の元氣を養ひ得たらむも、此等の俗謠が、實際道德を破壞し、風紀を攪亂したるに若かざる也。蓋し、唱歌は尤も内容に注意し、敎訓模範となるべき者、さては、敎育上有益なるべき者のみを撰べども、俗謠に至りては、全く之に反し、俗間に流布せる野卑淫猥なるを資料とし、その諧調に合せし者なり。されば、兩者流行の是非如何は明かなれども、事實に於ては、遺憾ながら反對せる狀態をあらはす、その理由は兎も角、必竟、唱歌の流行する範圍は、俗謠に比して、甚だ狹隘に、而も、其の流行する期限もまた短し。されど、俗謠は下等社界を中心として、學生官吏に至る迄、悉く歌はざるなく、甚だしきは、女學生諸媛にして、屢屢歌ふものあるを見る。かくて、流行する事、今になほ衰へず。都門こそ僅にその面影を殘すのみなれ。假りに、一歩を出で、一地方に至らば、盛に子女の歌ひつゝあるにあらずや。此の如きは、唱歌より俗謠の人心に影響する事大なるを證すると同時に、多く社界に害毒を流す所以なりされば、諸孃は、ひとりストライキ節磯節に止まらず、都々一甚句等の野卑にして浮華なる俗謠を排斥して、高雅莊重なる唱歌を賓らざるべからず。俗謠は、全然、女德と一致並行する者にあらざれば也。さるを、未だ、女德の一部をも了悟せざるに先ち、俗謠に熱中し、三味線を弄するが如きは、徒に、貞正恭謹なる諸孃の體面を汚すのみならず、日本婦人たるの價値なく、資格なき者なり。耳に淫聲を聞かず、口に鄭聲を放たずとは此の謂也。(丸子投)

女子の威嚴

深窓にかしづかれ、婢僕を罵るを以て、威嚴ありとこと思ひ誤まらされ。人の諂ひもてはやすを見て、威嚴ありといふべからず。凡そ、威嚴とは、温容あつかはしきうつに、嚴然犯すべからざる威風あるを云ふなり。されば、さま〴〵の知識を得て、女德の大體をあきらめ、起居動作にいたるまで、よろづ、此の規準をはづれざらむには、事に當り物にふれて、辨別のこゝろを失はず。または、人に侮られざるのみか、其の品性高尚となり、人々に尊敬せらるゝは、必然の結果なりといふべし。さるに、みだりにわが藝能にほこり口さがなくも、人を輕むじ、さては、父母兄弟にさからひ、節操なく慈愛なければ、人皆之をいやしめ、をこなりと稱して、うと〳〵あらむは、また明なる事實なり。要するに我が國の完全なる禮儀作法は、威嚴と伴隨し、人に敬はるゝは、威嚴を保つ所以にして、徒に、威張の謂にあらざるなり。(きん子投)

衣服の改良

所謂半古式の衣服は、種々なる雜誌によつて紹介せられたれど、勿論、普通に採用せらるべしともおぼえず。衣服改良會も、亦、ある案を發表すべしと傳へられしより、既に、半歲を超ゆれども、いまだ、その事を聞かざるのみか、はやくも、其の會の存在をさへ忘却せられむとす。敢へて問はむ。嘗つて衣服改良の必要を唱導せし諸子に。誠に、改良せざるべからざる欠點あることを從來の衣服について知れりや否や。また、まことに、其の欠點ある衣服を着せしむるに忍びざるの誠心ありや否や、もしそれ、單に、從來の形態を變ふるを以つて、改良進步と誤解するに加へて、これによつて、多少の名譽を得るにはあらむかを豫想して、

衣服改良を唱ふるが如きことあらば、其の結果は、それ何時をか期すべき。衣服改良會評議員の名譽を負へる方々は、こゝ奮勵一番せざるべからず。

(なほ子投)

●落葉籠

投稿の規定

一、字体は楷書に限る、但漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ふべからず。

二、文体は、投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、五行内外の事。

但、可成は、フリガナを附けて貰ひたし

三誌上の匿名は、差支なけれど、便宜の所へ、必らず宿所姓名を明記すべし。

四、記事は、隨觀隨目何にてもよけれど、有益にして、興味あるものを望む。

五、〆切期限は、目次乘題の歌文と同日の事。用紙は、半紙、尤も、ハガキにてもよし。

▲東京、きよ子曰、　下谷淺草神田區のうちで高等女學校の入學豫備を、教へる所を、御存じの方は、御知らせ下さいまし、いそぎますのでございますから、御早く御願ひ申します。

▲備前、近藤琴雌曰、　衣服の名稱に、本比翼とか、附比翼とか、申すものがありますが、それはどのやうな、衣服をさして、云ふのでありますか、諸孃方の、御教へを願ひます。

▲讃岐、よしこ曰、　私は、近頃、中國から讃岐の琴平に移りましたが、事情がありまして、永住することになりました概して、この地は女子の教育が發達して居ません、別に、心合ひの友達もなく、家事のかたはら、貴社の女鑑を、この上なき師友として、樂んで居ります、時節柄、長夜にかなひます、獨學の方法を、御教へ下さいまし。

▲記者曰、　可成、問答は、諸媛方が、御互に

なさつた方が、かへつて、面白いかと思ひます、御存じの方は、御教へ申し、御わかりにならない方は、御尋ねになるのか道でありますし、また、有益だらうと存じますから、遠慮なく、御考へを述べて下さい。

▲東京、ふどり子曰、　高等女學校を卒業しましてから、先生方のお家へ、御禮に參るならはしでありますが、東西に、お住になつてお出でゞすから、實に、一日では、中々、まはりきれませぬ故、それより、生徒一同で、會費をだして、手製のお料理でおもしろく一日に、致す方が、宜しくは御座いませぬか、諸孃方いかゞでしよう。

▲下總、あつ子曰　長崎の秋子さんが、御妹子さんを、おとなしくする方法を、御問ひで御座いましたが、私の考では、たとへ腕白をしても、その時に、餘りイジメないで、わるいといふ譯をきかせて、それをやめさせる樣に教育して行けば物心もつき、大きくなれば、おとなしくなるだらうと思ひます

▲記者曰、　あつ子さんと同說で、腕白とて、仕方に種々あるから一概にわるいとはいへない、また、おとなしくするとて性質事情等を知りて、それに適した方法を講ぜねばならぬ、つまり、一時に直さうといふは困難であるし、かへりて失敗することがありますから、善行を賞しすゝめ惡行をおさへ矯める方針で行けば、だん／＼直るだらうと信じます。

▲石見、順子曰、　私は熱心なる本誌愛讀者なるが、妾等が、兼て敬慕せる下田歌子先生、三輪田眞佐子先生、其の他只今の閨秀才媛といはるゝ方々の傳記美譚及、その肖像を今より御掲載下されꞏ度くれ／＼も御願ひ申上候かして

▲石見、順子曰、　今日、日本女子の服装は、改まるべき事と思ひをり候處、警視廳醫長山根醫學士の發案せられたる改良服は、至極よろしき由承り候へば、その調度製法等、次號誌上にて御說明下され度、尤も、男子服も、御序でに御願申上候かしこ。

▲記者曰、　武藏のなでしこ孃と、大阪の文子孃に、御答へ申します、女子矯風問題は、これまでしばしば述べたのでありますが、この後とても、また、社說など述べるとしましやう。

▲東京、とし子曰、　なでしこ樣と同じく本誌を愛讀する諸孃と、是非會合して御交際の出來る樣にしたいと思ひます。記者足下、その御工夫はありますまいか

▲東京、しゆん子曰、　私もなでしこ樣に贊成します

▲青森、よしの曰、　なでしこ孃の發言には、至極贊成であります、私は田舍に居りますから、諸孃に遇へませんが、一日も早く、會合の出來る事を祈つて居ります其の變り度々本誌に投書しまして、心を通はしたいと思ひます

▲記者曰　なでしこ孃の御說には、續々贊成する者もあり、至つて結構の事と存じましたから、既にその方法を講じて居ます、追て發表して、贊成か否かを御聞き申しましやう

▲伊勢、田中さと子曰　女のためになる本で、わかり易い者がありますなら、すぐ御敎え下さいまし。

▲記者曰、　御問の本は、女子要書解題のうちにありますが其の中でも、昔のでは、貝原先生の益軒十訓などが善いでしやう、また今のでは三輪田先生の女子の本分、女子處世論等は、是非、諸

孃の讀まなければならぬ本です。

▲記者曰、　渡邊美濤子孃に御答へします短篇小説を入るゝ樣方々からもいつて來ましたし、私等も善い事と存じ、此度は、家庭で讀むに價値のある者と信じて、編入しました、

▲石見、順子曰、　本誌第二百三十四號論説欄にて、矢津先生の婦人と地理と、と題して、論じられしは、まことに、われ〳〵にとりては、有益あることゝ存候、就ては、世界週遊畫報などの如きものにて、子女を敎ふるに、適當の書物有之候はゞその發行所、代價等、次號にて、御知らせ下され度候。

▲宮城、節子曰　私は、弟に死なれて、一人娘となりました、所が幼少いときからのいゝなづけがあつて、此度、非常にすゝめる人がありますが家をすてゝも、そこへ緣付いた方が善いでしやうか、いかゞですか、御敎へ下さいまし。

▲記者曰　これは明白な事ですが、試に、諸孃に問ひましやう。

▲京都、そめ子曰　私をある宗敎の女學校に入る樣にと、從姉がいゝましたが、應じませんでした。

▲石見、順子曰、　少しあやしき問ひには候へども、これ迄、一般夫婦の間の日常の稱呼、まちまちにて一定せず、もとより一定することも六ヶ敷候へ共、普通夫より妻をよび、妻より夫を呼ぶにいかなる稱呼を用ひ候はゞよろしく候か大方諸媛の高敎を承りたく候、

○修身敎典唱歌　本編は、高等師範學校音樂敎官鈴木米次郎氏の作曲にて唱歌遊戲研究會の編纂に係るものにして、其の編纂の目的をきくに、さきに、小學校令の施行あるや、その趣旨に基き、

唱歌科をして、各學科、殊に修身科に關連せしめ、以て、國民敎育成効の一助たらしめんと、研究會に於て、斯道の熟練家をして、編纂せしめ、鈴木米次郎氏、之が作曲をなせるを、實地に施行して其の適否を試みられ、尤も適切なるを認められたるものなり。特に該編は、普及舍編纂の、新編修身敎典の各課章と、其の主眼を一致せしめ、毎に、相當課を授くべく順次編纂せし者なれば、同修身書を採用せる府縣の敎科用書として、適切なるを信ず。而して、本編は、尋常科高等科通じて、十六冊を以て完成せる者なるが、今回、其の尋常科第一學年用上卷を刊行發賣せしは、東京銀座三丁目十字屋

○中等單音唱歌　本集は師範學校、中學校、高等女學校の唱歌の資に供せんため、著者益山鎌吉氏が、實地敎鞭を執られたる者を輯め、小山作之助氏が校閲せられたる者なり。その內容多くは諸大家の作詠にして、歌詞の優雅なる、曲節の淸爽なる、挿畫の輕妙なる、各々特殊の趣味を存し轉た、吾人の心情をして和らがしむ。實に、近頃の好唱歌集なり。發賣元は東京銀座三丁目十字屋。

口繪につきて

あはれ、北海道といへば、廣漠として、はてもなき荒野に、熊やふすらむ、鷹や棲むらむ、人げうとく、未開の土地なんめりなど、推し量りたまふめれど、いみじき僻ごとなり。いまは、開けゆく大御代の惠みの露も至らぬくまなく、敎育もなか〱に進歩して內地にも劣るまじき勢なれば、人をはしたなめ給ふより、まづ、わが身をかへり見て、はげみつとむるこそよけれ。いかに、彼の小學校生徒等が、たのもしきことなるよ。

女鑑歌文月次兼題

十月廿日分

歌　海邊紅葉

文　女郎花を人に贈る文

右十月九日〆切

十一月五日分

歌　船中時雨

文　菊

右十月二十四日〆切

十一月廿日分

歌　初冬

文　故郷の父母に送る文

右十一月九日〆切

十二月五日分

歌　雪

文　燈下の讀書

右十一月廿四日〆切

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

題

住所
姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題

住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたるは没書とす。

○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。

○天地人を取りし人には賞品を呈す。

女鑑

明治三十四年十月五日發行

毎月二回五日廿日發行　第貳百參拾八號

明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

鈴木米次郎作曲　唱歌遊戯研究會編纂

修身教典唱歌

本編は小學校令施行規則の御趣旨に基き唱歌科をして各學科殊に修身科に關聯せしめ彼我相輔ひ以て道徳教育國民教育成効の一助たらしめんとて唱歌遊戯研究會に於て多年實地教育に從事し尤も熟練なる教育家と斯道の熟練家とを委員として調査編纂せしめたるを審議討究し尚某大家に修正を乞ひ鈴木先生が作曲なせるを實地に施して其適否を試みられ以て完成せり▲該書は普及舎編纂の新編修身教典各課の目的と各章の主眼とを一致せしめ修身書の終る毎に其相當課を授くべく歌詞用語の如きは國語科と其程度を等ふせられたるは實に他に其の比類を見ざる處なり▲本書は同修身書を採用せる府縣の教科用書實に必用適切なる者なり

小山作之助校閲　益山鎌吾著

尋常科第一學年より高等科第四學年まで　全拾六冊

洋製美本尋常第一學年用上卷出版○正價金八錢○○○郵稅金二錢

全下卷近刊

中等單音唱歌

全一冊

總クロース金文字入　横綴頗美本　定價四拾錢　郵稅四錢

本集は著者が師範學校、中學校、高等女學校等の爲に實地教授の上再三修正を加へられたるものにして内容の歌曲各々特殊の趣味を有し艶麗なる温雅なる清爽なる等皆其詩情に調和せり▲願くば一本を繙きて樂と詩と繪書の完備せる内容を嘉し學生の教養と子女の愛育の資に供へ給はらんことを

◉幼年唱歌　初編上中下(出)一册十錢完　二編上中下(板)郵稅二錢完

◉日本遊戯唱歌　四編出板一册各十五錢郵稅二錢

發行所　東京銀座三丁目二番地　十字屋　（電話新橋千二百五十九）

東京市京橋區築地貳丁目株式會社國光社印刷部印刷